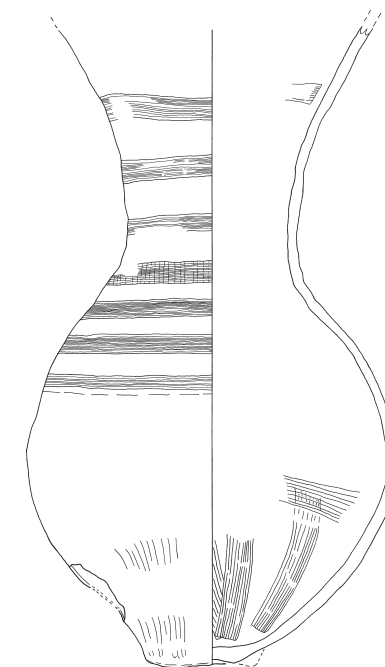


四條畷市文化財調査年報

第 5 号

中野遺跡



平成30（2018）年3月

四條畷市教育委員会

巻頭写真図版 1



1. NN2013-1 調査地区遠景（西から）



2. NN2013-1 調査地区周辺（旧造幣局官舎・昭和44～45年撮影・東から）

卷頭写真図版 2



1. NN2013-1 出土金属製品

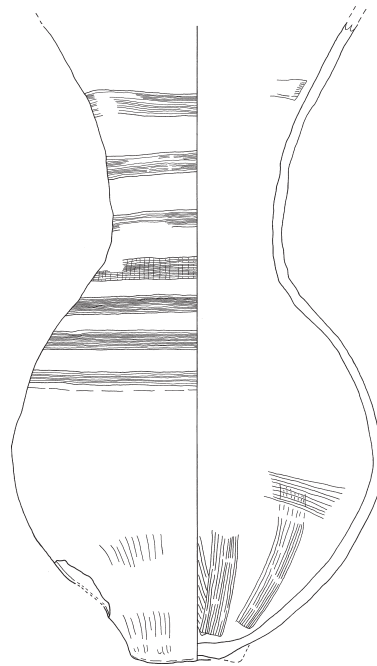


2. NN2013-1 出土弥生土器集合

四條畷市文化財調査年報

第 5 号

中野遺跡



平成30（2018）年3月

四條畷市教育委員会

例 言

1. 本書は、四條畷市文化財調査年報の第5号であり、四條畷市文化財調査報告の第55集である。本書には、平成25(2013)年6月から9月にかけて宅地造成に伴い(N N2013-1)、平成24(2012)年6月に市道拡幅に伴い(N N2012-1)、中野遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。また、関連調査として、平成2(1990)年の旧大阪法務局四條畷出張所増築工事に伴う中野遺跡(N N1990-1)埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。
2. 中野遺跡(N N2013-1)の発掘調査は、フジ住宅株式会社からの依頼を受け実施した。中野遺跡(N N2012-1)の発掘調査は、四條畷市長からの通知をもとに実施した。中野遺跡(N N1990-1)の発掘調査は、近畿地方建設局からの委託を受け実施した。いずれも四條畷市教育委員会が調査を実施し、調査期間等は本文中に記載している。
3. 中野遺跡(N N2012-1・N N2013-1)の発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主任村上 始・事務職員 實盛良彦(肩書はいずれも当時)を担当者として実施した。中野遺跡(N N1990-1)の発掘調査は、四條畷市教育委員会歴史民俗資料館主査 野島 稔(肩書は当時)を担当者として実施した。
4. 発掘調査実施にあたっては、各施主や地元自治会から多大なる御配慮・御協力を得た。記して厚く感謝の意を表したい。
5. 発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

大阪府教育庁文化財保護課、櫻井敬夫氏(故人)、瀬川芳則氏(元関西外国語大学教授)、濱田延充氏(寝屋川市教育委員会)、野島稔氏(四條畷市立歴史民俗資料館館長)、佐野喜美氏(前四條畷市立歴史民俗資料館館長)。(順不同)
6. 出土遺物の整理・図面作成などは、調査当時の一次整理に加え、四條畷市教育委員会地域教育課上席主幹兼主任 村上 始、主査 實盛良彦が、臨時職員 酒井圭二、山田章央、大阪府文化財愛護推進委員 田伏美智代の協力を得て行なった。
7. 本書は、村上・實盛が、分担して執筆・編集を行なった。文責者は各文末に記載している。
8. 発掘調査の出土遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書中のレベルは、T.P.(東京湾平均海面)を用いた。
2. 土色の色調は、1998年度版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 報告図面のうち、N N2013-1次調査の表示方位は世界測地系の国土座標(第Ⅵ座標系)に基づく座標北である。N N2012-1次およびN N1990-1次調査の表示方位は磁北である。

本文目次

巻頭写真図版

例言・凡例

目次

第1章	遺跡の位置と歴史的環境	6
第1節	遺跡の位置	
第2節	周辺の歴史的環境	
第2章	調査の経過	10
第1節	既往の調査	
第2節	既往の1992-1次調査の概要	
第3節	NN2013-1次調査の経過	
第4節	NN2012-1次調査の経過	
第5節	NN1990-1次調査の経過	
第3章	中野遺跡（NN2013-1）調査の成果	16
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第4章	中野遺跡（NN2012-1）調査の成果	46
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第5章	中野遺跡（NN1990-1）調査の成果	50
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第6章	調査のまとめ	54
第1節	調査のまとめ	
参考文献		55
付章1	北河内における弥生から古墳へ	57
付章2	持統天皇と四條畷	60
写真図版		
報告書抄録		

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	7
第2図	NN1992-1次調査第2遺構面平面図・井戸実測図	11
第3図	NN1992-1次調査第3遺構面平面図・井戸実測図	13
第4図	調査地区位置図	15
第5図	調査地区配置図 (NN2013-1)	16
第6図	第1遺構面平面図 (NN2013-1)	18
第7図	第3遺構面平面図 (NN2013-1)	19~20
第8図	3・4区中央トレンチ断面図 (NN2013-1)	21~22
第9図	第1遺構面1区土坑94・4-3区Pit41遺物出土状況図 (NN2013-1)	23
第10図	第3遺構面3-1区溝1・3-2区土坑10断面図 (NN2013-1)	24
第11図	第3遺構面3-3区溝15遺物出土状況図・断面図 (NN2013-1)	25
第12図	第3遺構面3-3区井戸16・土坑19・24・溝20・21遺物出土状況図・断面図 (NN2013-1)	27
第13図	第3遺構面4-2区溝17・井戸4遺物出土状況図・断面図 (NN2013-1)	28
第14図	第3遺構面4-2区土坑28・溝27・30・落込107遺物出土状況図・断面図 (NN2013-1)	29
第15図	第3遺構面4-1区溝2・4-3区井戸92遺物出土状況図・断面図 (NN2013-1)	30
第16図	出土遺物 (包含層・第1遺構面、NN2013-1)	33
第17図	出土遺物 (金属製品、NN2013-1)	35
第18図	出土遺物 (第3遺構面1区・3-2区、NN2013-1)	37
第19図	出土遺物 (第3遺構面3-3区溝15・21、NN2013-1)	39
第20図	出土遺物 (第3遺構面3-3区井戸16・土坑19・24、NN2013-1)	41
第21図	出土遺物 (第3遺構面4-1区・4-2区土坑28、NN2013-1)	43
第22図	出土遺物 (第3遺構面4-2区溝17・30・75・落込107、NN2013-1)	45
第23図	調査地区平面図・断面図・配置図 (NN2012-1)	47
第24図	出土遺物 (NN2012-1)	49
第25図	調査地区平面図・断面図 (NN1990-1)	51
第26図	出土遺物 (NN1990-1)	53

写 真 図 版 目 次

- 巻頭写真図版1 1. NN2013-1 調査地区遠景（西から）
2. NN2013-1 調査地区周辺（旧造幣局官舎・昭和44～45年撮影・東から）
- 巻頭写真図版2 1. NN2013-1 出土金属製品
2. NN2013-1 出土弥生土器集合
- 写真図版1 1. NN2013-1 第1遺構面1区遺構完掘全景（東から）
2. NN2013-1 第1遺構面4-3区遺構完掘全景（西から）
- 写真図版2 1. NN2013-1 第3遺構面3-1・3-2区遺構完掘全景（東から）
2. NN2013-1 第3遺構面3-3・4-1・4-2区遺構完掘全景（西から）
- 写真図版3 1. NN2013-1 第3遺構面3-3区溝15遺物出土状況（北東から）
2. NN2013-1 第3遺構面3-3区井戸16井戸枠検出状況（南から）
- 写真図版4 1. NN2013-1 第3遺構面4-2・4-3区遺構完掘全景（東から）
2. NN2013-1 第3遺構面4-2区土坑28・溝30遺物出土状況（南から）
- 写真図版5 1. NN2012-1 遺構検出全景（北西から）
2. NN2012-1 遺構完掘全景（北から）
3. NN2012-1 遺構完掘全景（南から）
- 写真図版6 1. NN2012-1 遺構完掘近景・東壁断面（南西から）
2. NN1990-1 遺構全景（東から）
3. NN1990-1 遺構全景（西から）
- 写真図版7 1. NN1990-1 掘立柱建物1近景（北から）
2. NN1990-1 井戸1・溝1近景（北から）
- 写真図版8 1. NN2013-1 出土遺物（包含層）
2. NN2013-1 出土遺物（第1遺構面）
- 写真図版9 1. NN2013-1 出土遺物（金属製品・表）
2. NN2013-1 出土遺物（金属製品・裏）
- 写真図版10 1. NN2013-1 出土遺物（第3遺構面1区・3-2区）
2. NN2013-1 出土遺物（第3遺構面3-3区溝15・21）
- 写真図版11 1. NN2013-1 出土遺物（第3遺構面3-3区井戸16・土坑19・24）
2. NN2013-1 出土遺物（第3遺構面4-1区・4-2区溝75）
- 写真図版12 1. NN2013-1 出土遺物（第3遺構面4-2区土坑28）
2. NN2013-1 出土遺物（第3遺構面4-2区溝17）
- 写真図版13 1. NN2013-1 出土遺物（第3遺構面4-2区溝30・落込107）
2. NN2013-1 出土遺物（馬歯・種子）
- 写真図版14 1. NN2012-1 出土遺物
2. NN1990-1 出土遺物

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讃良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。中野遺跡は、飯盛山系の西側の山裾部に位置する遺跡である。

第2節 周辺の歴史的環境

中野遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物がみつまっている（第1図）。

旧石器時代 讃良川床遺跡では旧石器時代の握斧・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している（櫻井1972）。また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている（片山1967a）。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形尖頭器が出土している（野島・藤原・花田1976）。

縄文時代 縄文時代草創期の有茎尖頭器が南山下遺跡（野島1978b）、四條畷小学校内遺跡（野島1994c）、木間池北方遺跡（村上1997a）などでみつまっている。讃良郡条里遺跡の第二京阪道路調査地では縄文草創期末からの各時期の遺物が出土しており、石器製作跡も検出されている（井上ほか編2003、佐伯ほか編2007、井上編2008等）。南山下遺跡では中期の集落跡が検出されている（野島1978b、1988）。

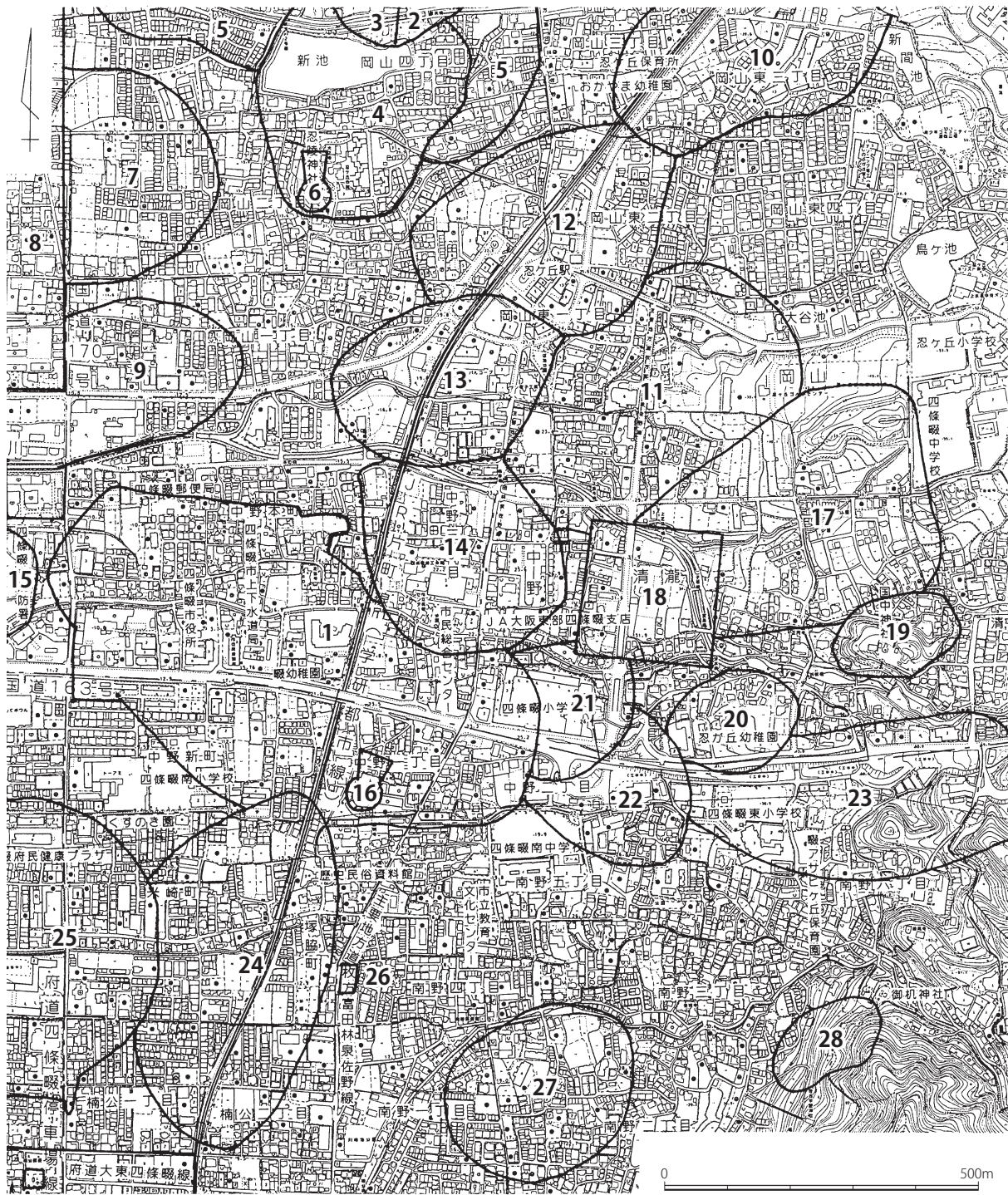
砂遺跡では中期から晩期の集落跡がみつまっている（宮野1992、四條畷市教育委員会編2008）。集落内にはイノシシ等動物の足跡が残されていた。晩期では土偶等も出土している。

後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡がある。寝屋川市の讃良川遺跡に東接しており集落の中心が移動したものとみられ、北陸からの大型彫刻石棒・ヒスイ製祭祀具をはじめ、土偶などの祭祀用品、土器類や多量の石器類が出土した。また晩期の土壙墓が複数確認されている（片山1967b、桜井1972、宮野1992、野島編2000）。

弥生時代 弥生前期初頭の土器が縄文晩期の突帯文土器とともに讃良郡条里遺跡の2005年の調査でみつまっている（中尾ほか編2009）。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稲作の初現を示す遺物として重要である。讃良郡条里遺跡ではこれら以外にも前期から後期までの水田・微高地上の集落が検出されている（後川・實盛・井上編2015）。

雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く拠点集落である。前期では板付Ⅱ式併行期に属する大形壺の出土や（野島1984a）、集落の検出がある（村上2001f）。中期では初頭から後葉までの方形周溝墓群が各調査で検出され、保存状態の良いコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製の木棺のほか、朱塗り土器・蓋付木製四脚容器やタンカ状木製品、鳥形木製品などが出土している（辻本1987、野島1987a、野島1994a、阿部1999）。焼失竪穴住居や掘立柱建物、貯木施設も検出され、分銅形土製品やト骨、銅鐸の舌や播磨地域の土器などが出土している（野島1994a、村上・實盛2011）。また2011年の調査ではサヌカイト埋納土坑を検出している。後期でも、竪穴住居群や方形周溝墓などが検出され（野島1987a、阿部1999）、丹後・近江・出雲・山陰地域系の土器類などを含む多くの遺物が出土している（三好ほか2007）。雁屋遺跡の銅鐸舌と関連するものとして、明治44年に四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸2口が出土したと伝えられ（梅原1985）、現在関西大学が所蔵している。

鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が5基みつまっている（野島1994b）。1号方形周溝墓には墳丘のほぼ中心に埋葬施設が1基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。2号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。



第1図 周辺遺跡分布図

- | | | | |
|---------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 中野遺跡 | 2. 讃良川床遺跡 | 3. 讃良寺跡 | 4. 更良岡山古墳群 |
| 5. 更良岡山遺跡 | 6. 忍岡古墳 | 7. 北口遺跡 | 8. 讃良郡条里遺跡 |
| 9. 奈良田遺跡 | 10. 坪井遺跡 | 11. 岡山南遺跡 | 12. 忍ヶ丘駅前遺跡 |
| 13. 南山下遺跡 | 14. 奈良井遺跡 | 15. 鎌田遺跡 | 16. 墓ノ堂古墳 |
| 17. 清滝古墳群 | 18. 正法寺跡 | 19. 国中神社内遺跡 | 20. 大上遺跡 |
| 21. 四條畷小学校内遺跡 | 22. 木間池北方遺跡 | 23. 城遺跡 | 24. 南野米崎遺跡 |
| 25. 雁屋遺跡 | 26. 伝和田賢秀墓 | 27. 南野遺跡 | 28. 近世墓地 |

このほか四條畷小学校内遺跡で前期の石敷き遺構が(野島1994c)、部屋北遺跡で中期の集落・方形周溝墓が(岩瀬編2012)、中野遺跡で後期の土器が検出されている(野島1986b)。

古墳時代 讃良川流域で古墳時代前期中頃に全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳が築造されている(梅原1937)。主体部は竪穴式石室(石槨)で、碧玉製の石釧・鍬形石・紡錘車、鉄剣、鉄鎌、小札片など副葬品の一部が出土している。

この古墳に伴うとみられる前期の集落は、讃良郡条里遺跡で微高地上の集落が検出されている(井上編2008、近藤ほか編2006、佐伯ほか編2007、後川・實盛・井上編2015)。また岡山南遺跡でも集落を検出している(村上・實盛2016)。

中期の古墳としては、全長約62mの前方後円墳である墓ノ堂古墳があり、立会調査で円筒埴輪片が出土している(野島1997c、櫻井・佐野・野島2006)。忍ヶ丘駅前1号墳では琴を弾く男性埴輪が出土している(野島1993a、1997a)。清滝古墳群(野島1980a)や大上古墳群(村上・實盛編2017)、更良岡山古墳群(野島1981)などは中期から後期まで続く馬飼い集団の墓域とみられる。中でも城遺跡内の大上3号墳は周溝を含めた全長が約45mある後期の帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と墳丘の一部を検出し、原位置を保つ葺石や円筒埴輪が出土した(村上2006)。清滝古墳群2号墳は、直径20mの円墳で、周溝に馬が埋葬されていた(野島1980a)。大上5号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盗掘されていたが、金銅装中空耳環が1点出土した(野島1999、四條畷市教育委員会編2002)。

JR忍ヶ丘駅付近では集落から中期の形象埴輪が多く出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪(櫻井・佐野・野島2006、2010等)、南山下遺跡で馬形埴輪(野島1987c、d)、岡山南遺跡で家形埴輪が出土している(野島1982)、一緒に左足用の木製下駄も出土している(野島1979a、1982、瀬川1992)。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。古墳時代中期以降この地域では全域で渡来系の人々が多く居住していたとみられ、広範に馬飼も行われており、奈良田遺跡(野島1980c、野島・村上2000)、中野遺跡・四條畷小学校内遺跡(村上2000等)、城遺跡・大上遺跡(村上2006)、南野米崎遺跡(野島1985、1987e、1991、四條畷市教育委員会編2004)などの集落遺跡で馬骨・馬歯をはじめ陶質土器、初期須恵器や韓式系土器等が数多く出土している。讃良郡条里遺跡で5世紀初頭の馬骨の出土がみられ(中尾ほか編2009)、部屋北遺跡では馬具の鐙・ハミ・鞍や、井戸枠に再利用された準構造船、埋葬馬が完全な姿で出土しており、河内湖岸の集落とみられる(岩瀬ほか編2010、岩瀬編2012)。鎌田遺跡では溝からスリザサラや木鎌、祭具を載せる台等の祭祀遺物が出土し(村上2001c、d、e)、奈良井遺跡では方形周溝状の祭祀施設遺構を検出し、犠牲馬の首や人形・馬形土製品等が出土している(野島1980b、野島・村上2000、野島・村上・實盛2012)。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讃良郡条里遺跡では水田跡がみついている(野島1993b、中尾ほか編2009等)。讃良郡条里遺跡の2011年度の調査では水路の堤防構築に敷葉を使った工法が用いられていた(後川・實盛・井上編2015)。北口遺跡では緑色凝灰岩質の石核が出土し、中期に玉類の製作が行われたとみられる(村上・實盛2014)。

古代以降 正法寺跡は、7世紀に創建された寺院跡で、これまでの調査で中門、塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である(大阪府教育委員会編1970)。一方、創建当時の建物の多くは掘立柱建物であった(村上2001a)。ただし、中門は礎石建物で(野島・藤原・花田1977)、塔は石積みの遺構を伴っていた(大阪府教育委員会編1970)。また回廊の南西部分にあたと推定される位置の瓦だまりから創建時の鴟尾片が出土している(野島・村上2002)。

讃良寺跡は1969年に部分的に調査され、暗渠の可能性のある瓦敷きなどを検出し、7世紀の創建であることが分かった(桜井1972、櫻井・佐野・野島2006、2010)。1997年の調査では正法寺跡のものと同範の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており(野島編2000)、文様に型起因の摩耗がみられることから、讃良寺のものが後に作られたと考えられている(野島1997b)。

飛鳥～奈良時代には寺跡の近辺を中心に集落跡がみついている。正法寺近辺では河川跡の数箇所土馬を使った祭祀がおこなわれており、木間池北方遺跡で円面硯や土器と共に土馬が7体出土した(村上2006)。木間池北方遺跡で「□万呂」(村上2006)、南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出

土している（野島1995）。讃良郡条里遺跡では小型海獣葡萄鏡が出土しており、有力者が祭祀に用いたとみられる（後川・實盛・井上編2015）。また、讃良郡条里遺跡では奈良時代に遡る条里制地割が検出されており、初期の条里制地割施行例として注目される（中尾・山根編2009）。

平安時代には中野遺跡や、岡山南遺跡、讃良郡条里遺跡のほか、四條畷小学校内遺跡（村上2000）、木間池北方遺跡（村上2006）、葎屋北遺跡（岩瀬ほか編2010）などで集落が検出されている。中野遺跡では「日置」と墨書された土師器坏や（村上2006）、「應保二年如月廿日」と書かれた墨書曲物井戸杵が出土している（村上2003）。岡山南遺跡では掘立柱建物群が検出されており（野島・藤原・花田1976、野島1987b）、井戸からは「高田宅」「福万宅」などの墨書土器が出土している（野島1987a）。讃良郡条里遺跡では皇朝十二銭を用いた溝内祭祀跡を検出している（後川・實盛・井上編2015）。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滝街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の國中神社が鎮座している。四條畷市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの國中神社だけである。

鎌倉時代から室町時代にかけては、奈良井遺跡（村上2003a）、南山下遺跡（野島・村上2001、村上2001b）、岡山南遺跡（野島・藤原・花田1976、野島1982、野島・前田1984、野島1987b、村上2004、村上・實盛2013a）、中野遺跡（野島1977、1986b、西尾1987）、忍ヶ丘駅前遺跡（野島1983、村上1997b）、四條畷小学校内遺跡（村上2000）、大上遺跡（村上2006）木間池北方遺跡（村上1997a）、南野遺跡（野島1995）、葎屋北遺跡（岩瀬ほか編2010）、讃良郡条里遺跡（後川・實盛・井上編2015）、南野米崎遺跡、楠公遺跡、葎屋遺跡等で集落跡等がみついている。坪井遺跡では鎌倉時代の鍛冶工房の跡とそれに伴う土壇墓がみつかり（野島1996a、b）、工房跡では鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が検出されている。

南北朝時代に四條畷付近では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

戦国時代には、三好長慶が飯盛城を拠点に畿内・四国の一部を支配し室町幕府の実権を握った。遺跡としての飯盛城跡はこれまでに大東市教育委員会によって調査が行われ、土塁や柵の跡が検出されている（黒田1989）。平成23年度には城跡の詳細な縄張図が測量・作成されている（村上・實盛編2013、黒田2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013）。

室町時代後期の16世紀中頃に讃良郡条里遺跡内の大將軍社が創建され、明治44年に式内社の忍陵神社に合祀されるまで地域の尊崇を集めた。発掘調査では御正躰あるいは奉納されたとみられる柴垣柳樹双鳥鏡が出土したほか、近世から近代に属する大量の灯明皿が出土し、文献に記録されていた「百灯明」の祭りの存在が裏付けられている（後川・實盛・井上編2015）。

（實盛良彦）

第2章 調査の経過

第1節 既往の調査

中野遺跡は、四條畷市中野本町・中野新町・中野一～三丁目に広がる遺跡で、古墳時代・中世の集落跡である。この遺跡は1977年に大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴い発見され、中世の石組井戸などや、古墳時代中期の大溝が見つかった（野島1977、1986b）。この大溝からは朱塗りの壺や滑石製玉類、馬の下顎骨等が出土している（野島1986b、四條畷市教育委員会編2004）。またその後の二次調査では、隅丸方形の周溝状遺構を検出し、多量の漆が入った須恵器把手付碗や製塩土器等が出土している（野島1977、1978c、1986b）。

同年からは国道163号の拡幅工事に伴う調査が始まり、数次にわたって調査が行われた（野島1978a、西尾1987、1988、村上2000、2006）。1977～1978年の調査では、平安時代～室町時代の集落跡が確認され、室町時代の石組井戸から花崗岩の石臼が出土した（野島1978a）。この調査では硬玉製勾玉など古墳時代の遺物も出土している。1986年の調査でも中世の集落跡を確認したほか、古墳時代中期～後期の大溝から人物埴輪片や滑石製玉類、舟形木製品などが出土した（西尾1987）。1987～1988年の調査では古墳時代中期後半の井戸から板に乗せられた状態で馬頭骨が出土した（西尾1988）。井戸廃絶時に犠牲とされたものと考えられている（四條畷市教育委員会編2004）。1994年の調査では、古墳時代後期前半の落込から滑石製子持勾玉などが出土した（村上2000）。1996年の調査では奈良時代末～平安時代ごろの方形横板椀井戸を検出し、井戸内から「日置」と墨書された土師器坏が出土した（村上2006）。

この間他の開発に伴う調査も多く行われており、1977年の旧国鉄片町線（現JR学研都市線）複線化工事に伴う調査では古墳時代後期の掘立柱群を検出している（野島1977）。1983・1985年の民間開発に伴う調査でも古墳時代の遺物が出土している（野島・前田1984、野島1986a）。1985年のマンション建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の井戸を検出し、井戸内からは石製玉類や多量の製塩土器などが出土した（野島1986b）。1986年の倉庫・事務所建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の掘立柱建物や竪穴住居等を検出し、井戸から馬形木製品が出土した（松岡1987）。1989年度の公共下水道工事に伴う調査では、奈良時代の青銅製銚帯（丸鞆）が出土した（野島1990）。1991～1992年の市役所東別館新築工事に伴う調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭ごろの方形縦板椀井戸を検出し、その底部の井戸椀に使われていた曲物には「應保二年 如月廿日」の墨書があった（村上2003b）。また溝からは青銅製銚帯（巡方）や長年大宝が出土した。

1993年のガソリンスタンド建設に伴う調査では横穴式石室を検出している（村上2006・四條畷市史編さん委員会編2016）。石室は床面のみの残存であったが、玄室から羨道へ延びる石組排水溝を確認した。

2007年から2009年にかけて主要地方道枚方富田林泉佐野線の拡幅工事に伴って2次にわたって行った調査では古墳時代の区画溝を検出し（村上・實盛2013a）、隣接する古墳時代祭祀遺跡である奈良井遺跡とのつながりが明らかになってきた。

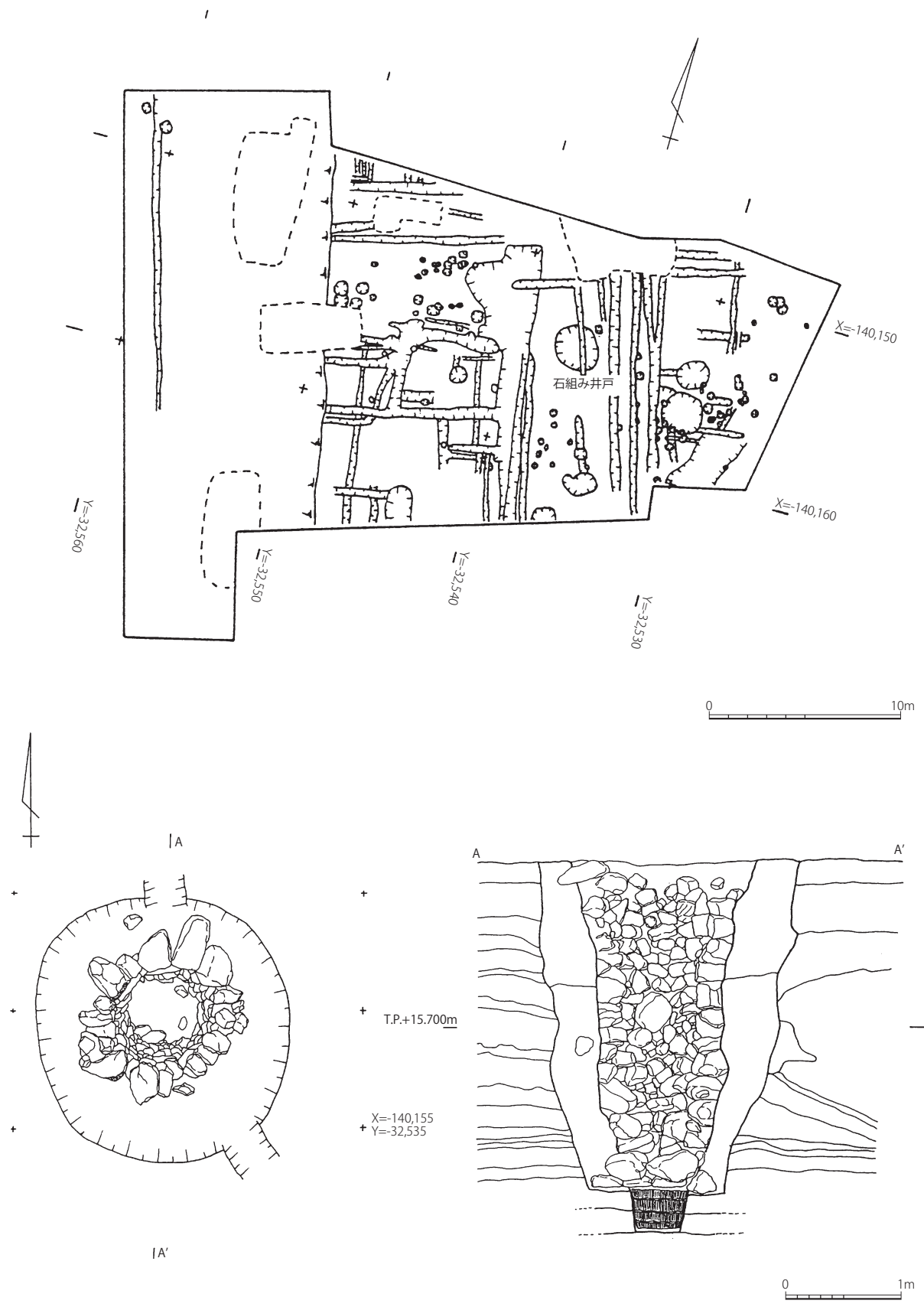
2011年度の調査では、平安後期～鎌倉前期の集落を検出し、「延任」の人名が書かれた木簡が出土した（村上・實盛2014）。

第2節 既往のNN1992-1次調査の概要

上記以外に、1992年にはマンション建設工事に伴い中野新町19で7月15日から9月7日にかけて712㎡の調査を行なった。この調査では3面の遺構面を確認した。第1遺構面では調査地区全域に中世の耕作跡を検出した。

第2遺構面では43基のPit、27基の土坑、1基の石組み井戸、溝状遺構を検出した。石組み井戸の北側からは、多量の土師質土器小皿や瓦器碗などが一括集中して出土した。また、Pitからは硯なども出土した。

石組み井戸は、直径約2.3m、深さ約2.7mの逆円錐状の土坑の底部の中心を直径約0.5m、深さ0.35



第2図 NN1992-1次調査第2遺構面平面図・井戸実測図（座標は旧日本測地系）

mほど掘り下げたところに、桶を納めたものである。井戸からは、漆塗りの椀片、土師質土器小皿、瓦器碗、信楽焼の壺片などが出土した。また、桶の内部からは羽釜片、常滑焼の大甕片とともに竹が出土した。

第3遺構面ではPit306基、土坑88基、井戸1基、溝状遺構を検出した。出土遺物からそのほとんどは古墳時代のものであるが、中世の遺構も混在していた。井戸に関しては上層で検出したものとは構造が違い、直径約1.3m、深さ約1mの土坑を掘り、その中心部分に直径約35cm、高さ約20cmの曲物を設置し、周囲を埋め戻したものであった。曲物については保存状態があまり良好ではなかったが、堆積土の断面観察から4個の曲物を積み上げたものであった。曲物内からは、蓆を編む道具が出土している。この井戸は出土遺物から中世のものであった。

第3節 NN2013-1次調査の経過

平成25年度第1次の発掘調査（NN2013-1）については、四條畷市中野新町1番・2番・3番・4番・5番において宅地造成工事が計画され、平成25（2013）年3月25日にフジ住宅株式会社代表取締役宮脇宣綱氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第93条第1項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは同年3月29日付け教委文第1-6412号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成25年4月4～5日に、計画用地内に7か所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、既存建物により攪乱されていた箇所を除く6か所のトレンチで中世を中心とした遺構・遺構面を確認した。その結果をもって協議を行ない、遺跡が工事によって破壊される道路予定地および防火水槽予定地の発掘調査を実施することとなった。同年4月24日付で発掘調査承諾書の提出があり、同年5月21日付畷教社第242号で、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行なった。調査面積は約2188㎡で、調査期間は平成25年6月3日から9月12日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行なった。

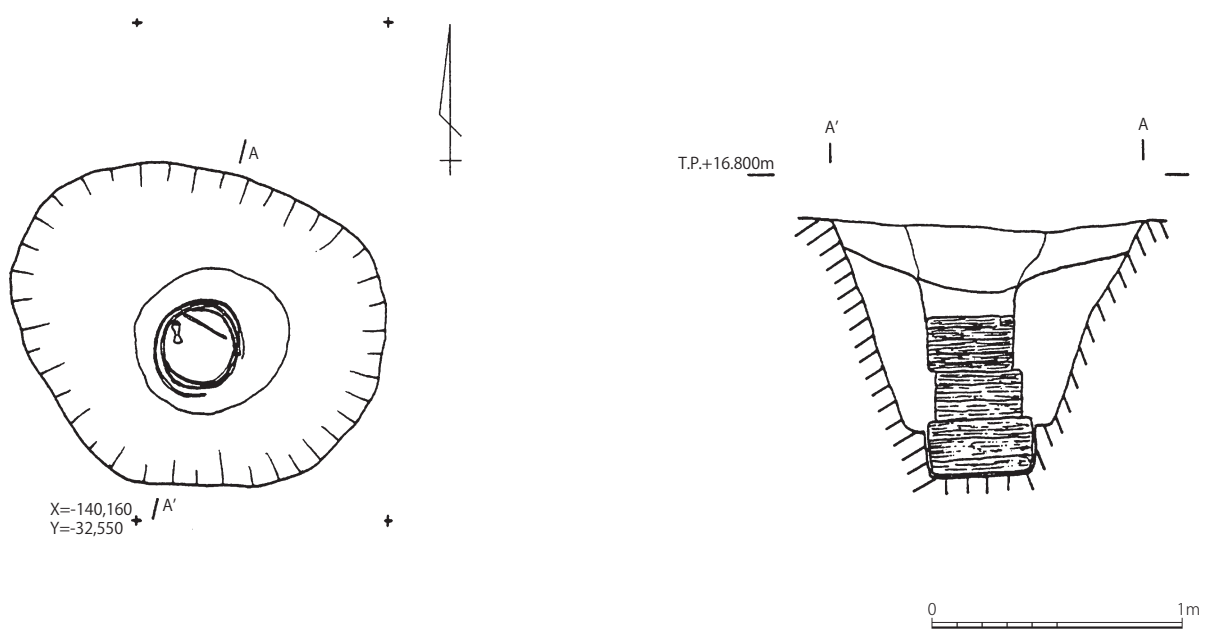
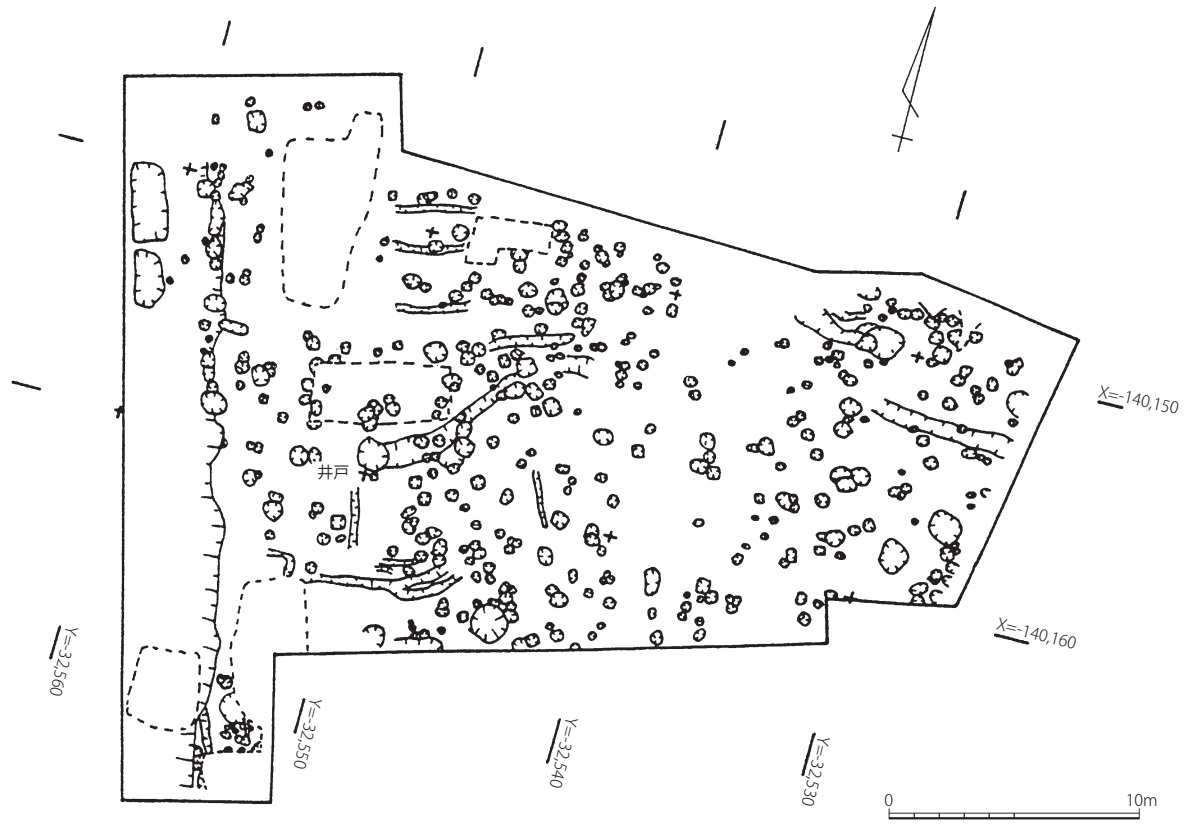
調査で出土した遺物については、平成25年9月12日付畷教社第786号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年9月18日に第2678号で受理された。大阪府教育委員会には同年9月12日付畷教社第787号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年11月27日付教委文第3-189号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計10箱であった。

なお、調査地区の一部は、調査以前は周知遺跡である中野遺跡の範囲外であった。また、この調査では中野遺跡ではほとんど知られていなかった弥生時代および平安時代の遺構を確認した。このため平成25年11月21日付畷教社第1090号で大阪府教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の取扱い変更協議書を提出し、同年11月27日付教委文第9-17号で中野遺跡の範囲拡大および時代の変更（追加）についての通知があった。

第4節 NN2012-1次調査の経過

平成24年度第1次の発掘調査（NN2012-1）については、四條畷市中野新町759-6（大阪法務局四條畷出張所跡地）において市道拡幅が計画され、平成24（2012）年4月12日に四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第94条第1項の規定により「埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。大阪府教育委員会からは同年5月25日付け教委文第1-254号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

既に後述する平成2年度第1次調査（NN1990-1）を行っていた土地であったため、その結果をもとに協議を行ない、遺跡が工事によって破壊される市道拡幅部分の発掘調査を実施することとなった。平成24（2012）年6月4日付畷教社第262号で、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行なった。調査面積は約58㎡で、調査期間は平成24年6月11日から6月26日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下



第3図 NN1992-1次調査第3遺構面平面図・井戸実測図（座標は旧日本測地系）

は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行なった。

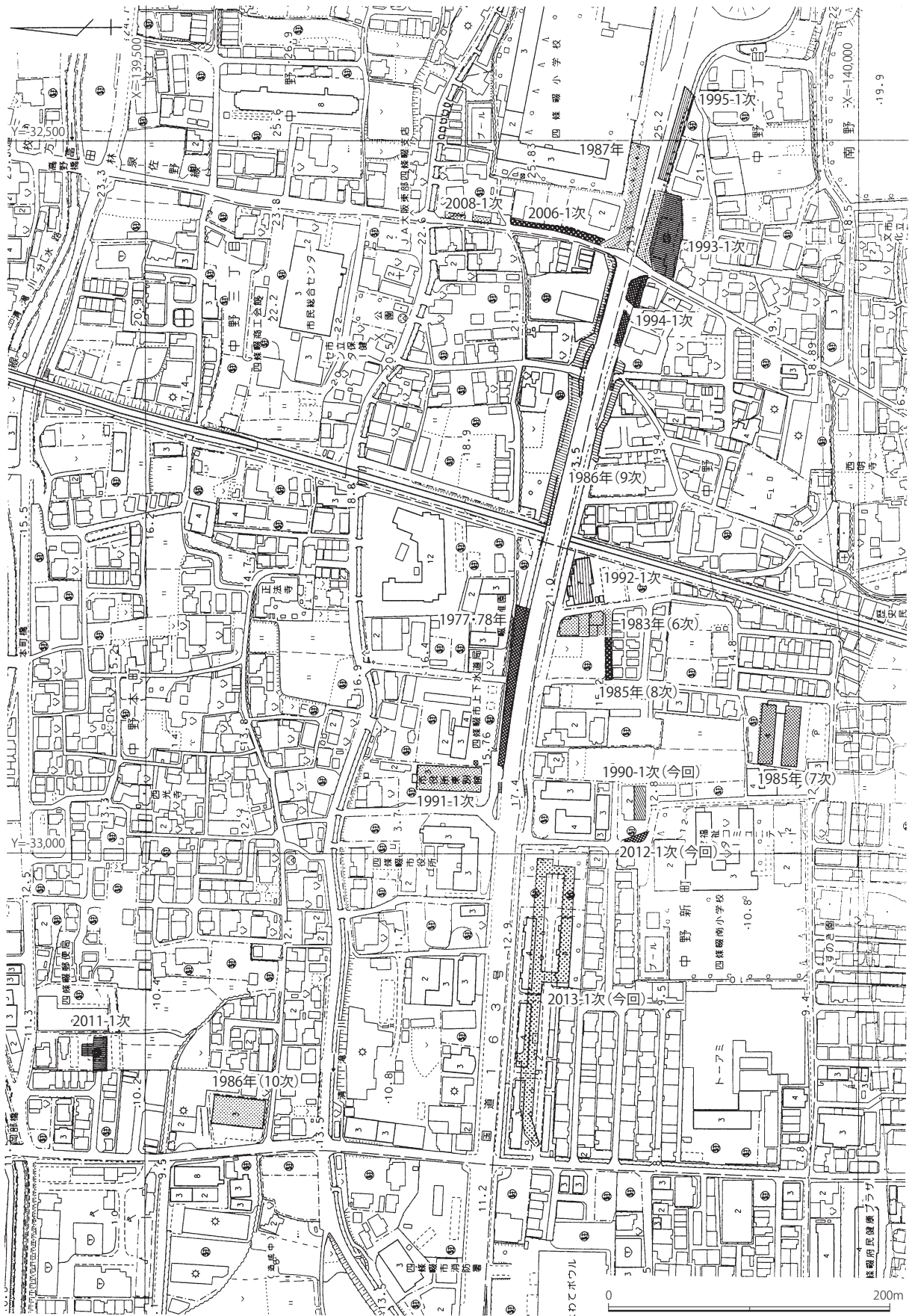
調査で出土した遺物については、平成24年7月2日付暇教社第355号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年7月5日に第1469号で受理された。大阪府教育委員会には同年7月2日付暇教社第356号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年10月16日付教委文第3-102号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計1箱であった。

第5節 NN1990-1次調査の経過

平成2年度第1次の発掘調査（NN1990-1）については、四條畷市中野新町759-6において大阪法務局四条畷出張所（当時）の増築工事が計画され、平成2（1990）年7月30日付第211号で近畿地方建設局長から四條畷市教育委員会を經由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第57条の3（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。大阪府教育委員会からは同年10月8日付け教委文第1-3210号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成2年9月3日に、計画用地内に2か所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、古墳時代と鎌倉時代の遺物包含層および集落跡と思われる遺構面を確認した。その結果をもって協議を行ない、遺跡が工事によって破壊される増築予定地の発掘調査を実施することとなった。同年10月5日付で近畿地方建設局長と四條畷市長の間で発掘調査委託契約書を締結した。調査面積は約233㎡で、調査期間は平成2（1990）年10月25日から11月16日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行なった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計1箱であった。

（實盛）



第4図 調査地区位置図

第3章 中野遺跡（NN2013-1）調査の成果

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区の調査前現況は造幣局大阪本局の旧官舎であった（巻頭写真図版1-2）。官舎建設のために0.6mほど盛土されていた。調査地区全域で旧建物による攪乱が大きく、旧耕土はほとんど確認できなかったが、明治21年に旧陸軍測量部が作製した地図ではこの土地の利用形態は耕作地であり、官舎建設以前は水田もしくは畑地であったと思われる。

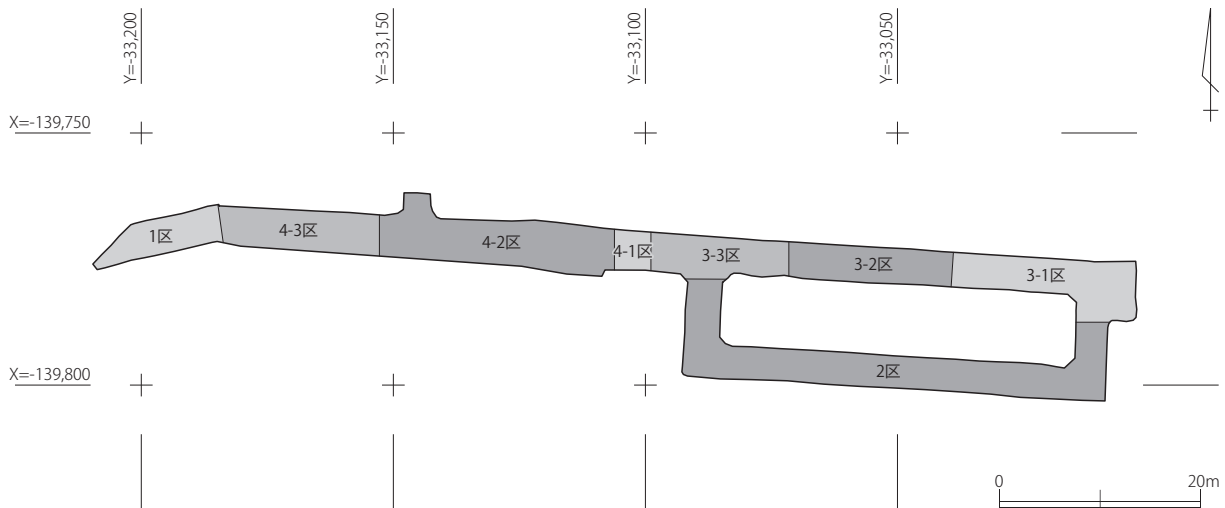
調査は1区から4区までに分け、地区ごとに4分割で調査を行なった（第5図）。調査中に3区・4区については便宜上さらに3区画に細分して記録を行なった。断面記録は、1区の北壁と2区東側の東西壁を記録したほか、3・4区は北壁・南壁ともに旧建物で全面的に攪乱されていたため、調査区中央にトレンチを設定しその断面を記録した（第8図）。調査中の設定のため、このトレンチでは盛土上面からの記録を行なうことができなかった。

1区では盛土の下層に0.2mほど中世から近世の遺物包含層が堆積し、その下面が第1遺構面であった。その下層は、単一層ではなく厚さ0.2mほどのブロック状の土層であり、第1遺構面造成のための整地層とみられ、その下面が第2遺構面であった。その下層も厚さ0.1mほどのブロック状の土層で第2遺構面造成のための整地層とみられ、その下面が第3遺構面であった。その下層は緑灰色系の砂質土で、地山であった。

2区では西半は旧建物で大きく攪乱され、東半のみ厚さ0.2~0.6mの盛土直下で黄色系の粘土層からなる地山を確認した。その上面は他地区との対応関係から第3遺構面と確認した。

3区では、3-1区は包含層の残存がほとんどなく、2区と同様の状況で第3遺構面を確認した。一方3-2区、3-3区では包含層の残存があり、その下面で第3遺構面を確認した。3-1区と3-2区の境界は旧耕作地の段で設定しており、3-2区および3-3区は一段低かったため、包含層が遺存したものと思われる。地山は一樣ではなかったが、ほとんどは黄橙色系の土層であった。下層確認では3-1区西側で地山下に南北方向の流路を確認しているが、遺物の出土はなかった。

4区では、4-3区においては1区と同様盛土・包含層の下面で第1遺構面を検出した。その下層は1区と同様厚さ0.2mほどのブロック状の土層であり、第1遺構面造成のための整地層とみられ、その下面が第2遺構面であった。その下層は1区とは異なり厚さ0.4~0.6mの暗灰色系の遺物包含層で、その下面が第3遺構面であった。地山は一樣ではなかったが、ほとんどは明黄褐色系と明青灰色系の砂質土層であった。4-3区西端で下層確認時に南北方向の流路を確認したが、遺物の出土はなかった。（實盛）



第5図 調査地配置図（NN2013-1）

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、弥生時代から中世にかけての遺構で、4地区合計で388基の遺構があり、遺構の種類としては溝、土坑、井戸、Pitがあった。調査は1区から4区までに分け、各地区順に4分割で調査を行なった。調査中に3区・4区については便宜上さらに3区画に細分して記録を行なった。遺構面は1区・4-3区では第1～3遺構面の3面を、それ以外の地区では第3遺構面のみを検出した。遺構面の標高は西から順に、第1遺構面は1区西端でT.P.+8.782m、4-3区西側でT.P.+8.924mであった。第2遺構面は1区西端でT.P.+8.670m、4-3区西側でT.P.+8.621mであった。第3遺構面は1区西端でT.P.+8.625m、4-3区東側でT.P.+8.462m、4-2区西端でT.P.+8.538m、東端でT.P.+9.462m、4-1区で9.727m、3-3区西端でT.P.+10.061m、東端でT.P.+10.094m、3-2区西端でT.P.+10.132m、東端でT.P.+10.436m、3-1区西端でT.P.+10.602m、東端でT.P.+12.053m、2区北東端でT.P.+11.542m、攪乱されていなかったうちもっとも西側の南端でT.P.+11.740mであった。遺構の番号は、遺構の種類に関係なく調査地区ごとの検出順に通し番号でつけた。4-2・4-3区については、第1・2遺構面と第3遺構面でそれぞれ通し番号を分けてつけた。なお、調査時は1区第2遺構面を1.5面、第3遺構面を2面として調査を行なったが、その後の整理時に各遺構面の他地区との対応関係を精査した結果、解釈を変更した。第1遺構面と第3遺構面においては集落及び耕作地の遺構を検出し、第2遺構面については主に鋤溝等の耕作地遺構が中心であった。以下、第1遺構面（第6図・写真図版1）と第3遺構面（第7図・写真図版2～4）を中心に、遺構面ごとに主な遺構について詳述する。

1. 第1遺構面

【1区】

溝51 1区の北半ほぼ中央で検出した。東から西へと向いた溝で、東へ向かって幅が広がっていき、東端は別の溝に切られる。検出できた規模は長さ約3m、東端での幅約0.25m、西端での幅約0.63m、深さは約0.1mである。標高は東端部分の上端がT.P.+8.856m、底部がT.P.+8.747mで、西端部分の北側上端はT.P.+8.767m、南側上端はT.P.+8.737m、底部はT.P.+8.673mであった。遺物は、瓦器碗（第16図-17）、砥石（第16図-18）などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

土坑19 1区南半西端付近で検出した。北側及び東側を攪乱されているため、正確な規模・形状は不明であるが、検出できた東西0.44m、深さ0.14mである。上端の標高はT.P.+8.822m、底部はT.P.+8.680mであった。土師器皿（第16図-12）などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

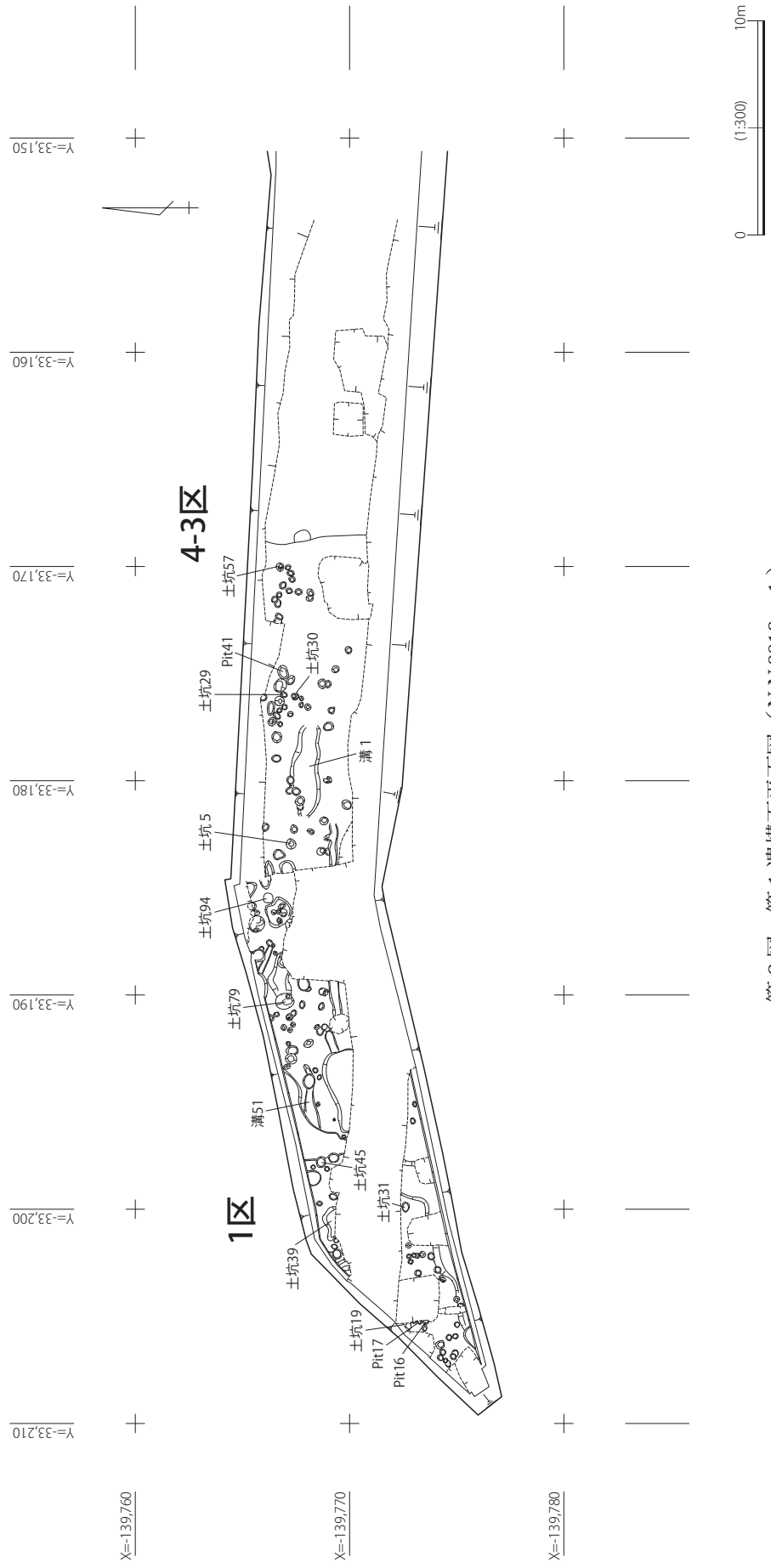
土坑31 1区南半中央付近で検出した。長径0.46m、短径0.35m、深さ0.12mで楕円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.759m、底部はT.P.+8.642mであった。土師器皿（第16図-13）が出土した。出土遺物から古代の遺構の可能性はある。

土坑39 1区北半西端で検出した。東西1.6m、深さ0.18mの不整形な遺構である。上端の標高はT.P.+8.772m、底部はT.P.+8.596mであった。瓦器碗（第16図-14）などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

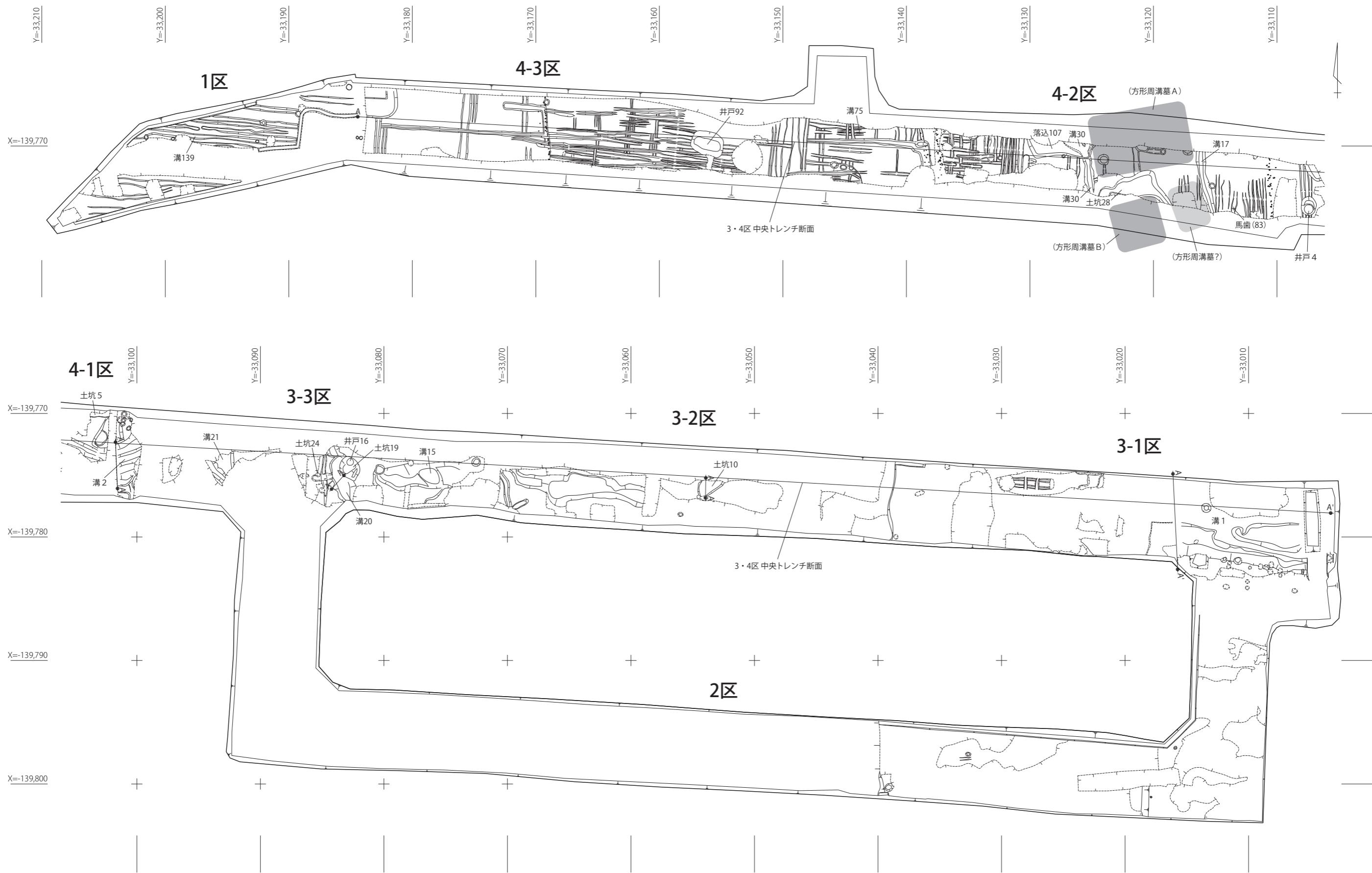
土坑45 1区北半西寄りで検出した。直径0.5m、深さ0.12mで円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.800m、底部はT.P.+8.677mであった。土鈴（第16図-15）などが出土した。出土遺物から中世もしくは近世の遺構と考えられる。

土坑79 1区北半東寄りで検出した。長径0.85m、短径0.74m、深さ0.23mで楕円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.997m、底部はT.P.+8.772mであった。東播系の須恵質土器甕（第16図-16）などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

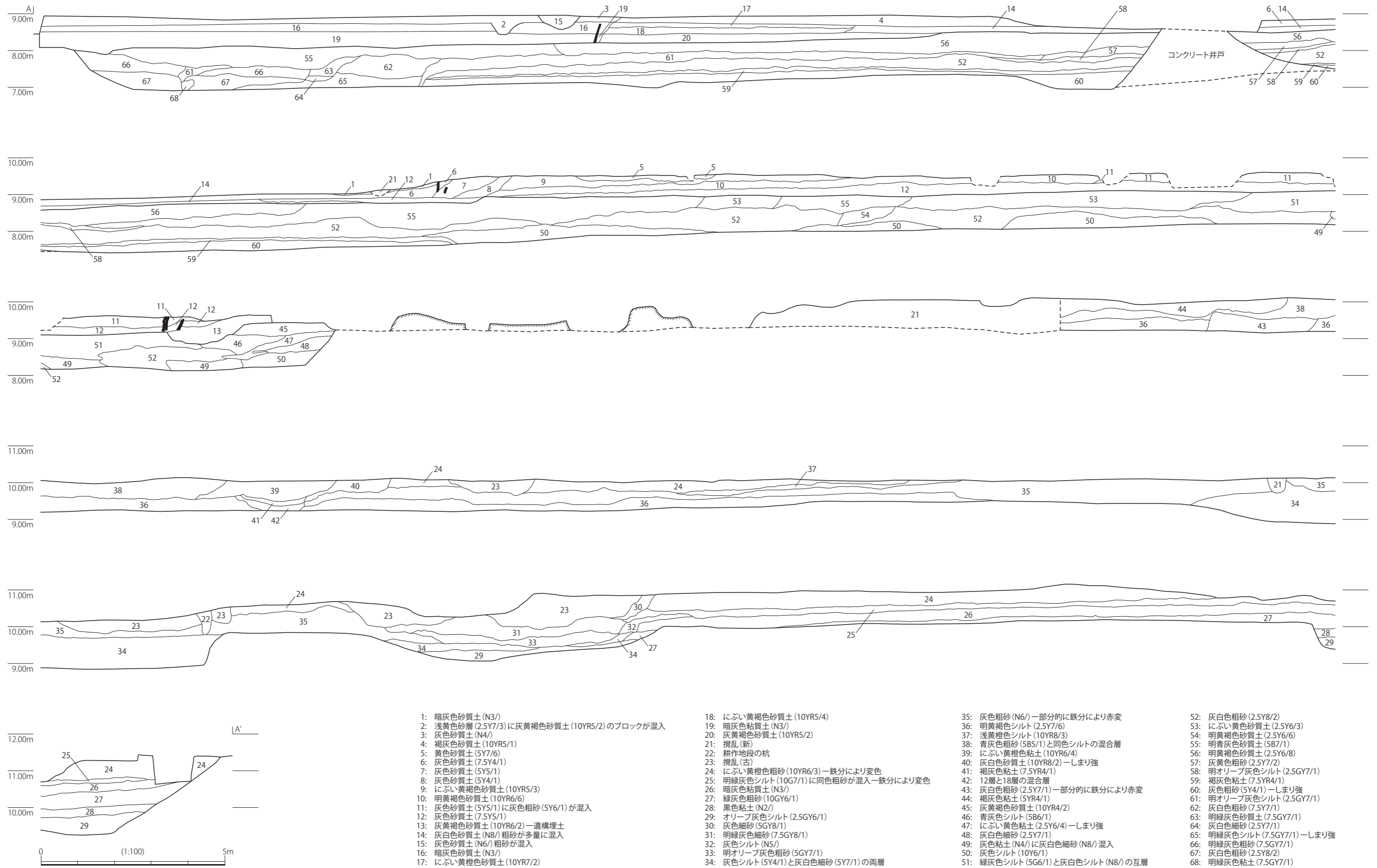
土坑94 1区北半東端付近で検出した。平面規模0.46×0.44m、深さ0.12mで隅丸方形を呈する。上端の標高はT.P.+9.094m、下端の標高はT.P.+8.972mであった。曲物桶とみられる木製品を検出したが（第9図）、劣化が著しく、原形を保った状態での遺物の取り上げができなかった。周辺の遺



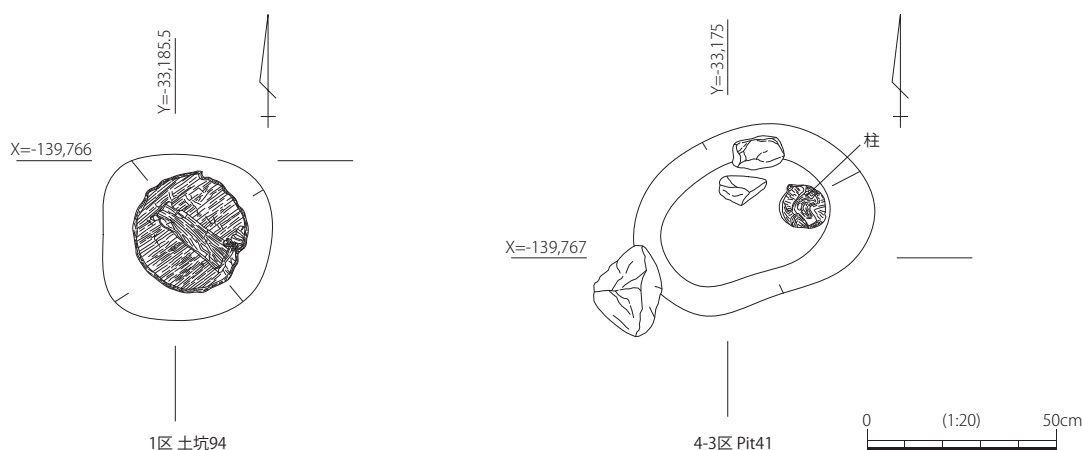
第6图 第1遺構面平面図 (NN2013—1)



第7図 第3遺構面平面図 (NN2013-1)



第8図 3・4区中央トレンチ断面図 (N N2013-1)



第9図 第1遺構面1区土坑94・4-3区Pit41遺物出土状況図 (N N2013-1)

構との関係から中世の遺構と考えられる。

Pit16 1区西端付近で検出した。直径0.3m、深さ0.12mで円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.800m、底部はT.P.+8.678mであった。土師器皿(第16図-10)などが出土した。出土遺物から古代の遺構の可能性はある。

Pit17 1区西端付近で検出した。直径0.2m、深さ約0.1mで円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.822m、底部はT.P.+8.736mであった。黒色土器碗(第16図-11)などが出土した。出土遺物から古代の遺構の可能性はある。

【4-3区】

溝1 4-3区西側中央で検出した。東から西へと向いた溝で、上面が削平されているとみられ両端とも消失して検出した。検出できた規模は長さ約4.3m、幅約1.3m、深さは約0.1mである。標高は東端部分の北側上端がT.P.+8.903m、南側上端がT.P.+8.900m、底部がT.P.+8.853mで、西端部分の北側上端はT.P.+8.926m、南側上端はT.P.+8.924m、底部はT.P.+8.834mであった。出土遺物から中世に掘削された遺構と考えられる。最終埋没時の最上面で寛永通寶(第17図-26)が出土した。

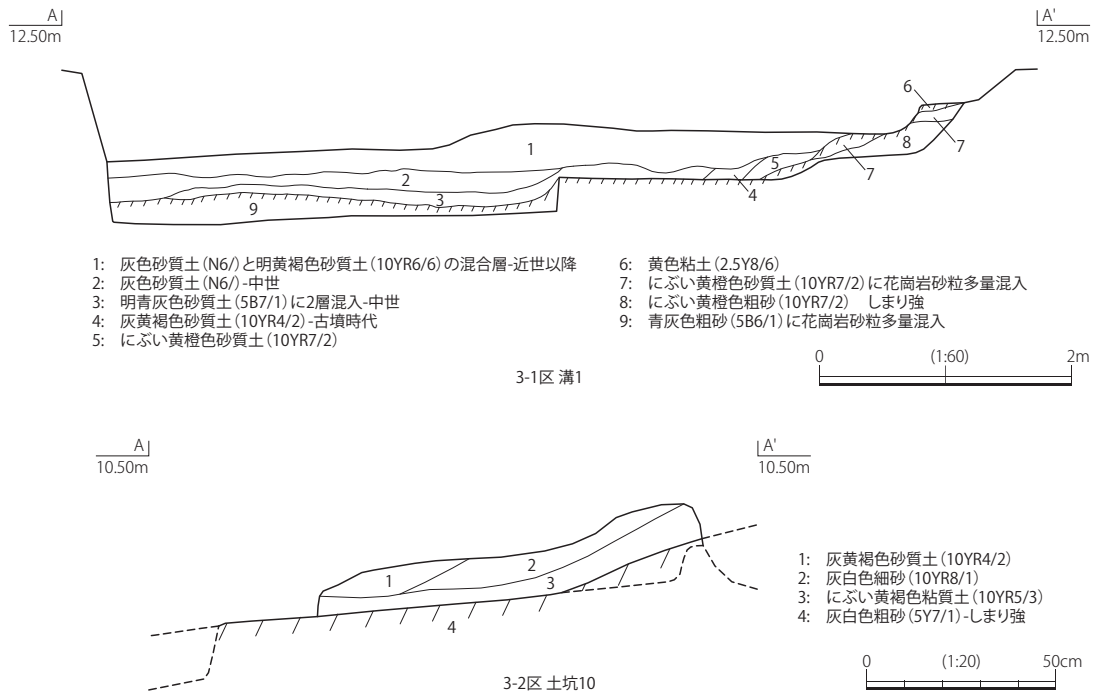
土坑5 4-3区西端で検出した。直径0.5m、深さ0.26mで円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.924m、底部はT.P.+8.669mであった。混入遺物とみられる縄文時代の石鏃(第16図-19)が出土した。周辺の遺構との関係から中世の遺構と考えられる。

土坑29 4-3区西側北寄りで検出した。長径0.35m、短径0.25m、深さ0.19mで楕円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.899m、底部はT.P.+8.712mであった。瓦器碗(第16図-20)などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

土坑30 4-3区西側北寄りで検出した。直径0.35m、深さ0.17mで円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.900m、底部はT.P.+8.729mであった。北宋銭の元豊通寶(第17図-25)などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

土坑57 4-3区中央北寄りで検出した。直径0.4m、深さ0.24mで円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.970m、底部はT.P.+8.734mであった。貿易陶磁の白磁碗(第16図-21)などが出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

Pit41 4-3区西側北寄りで検出した。長径0.6m、短径0.45m、深さ0.2mで楕円形を呈する。上端の標高はT.P.+8.759m、底部はT.P.+8.642mであった。非常に残存状態の良い掘立柱を検出した(第9図)。周辺遺構との関係から中世の遺構と考えられる。



第10図 第3遺構面3-1区溝1・3-2区土坑10断面図 (NN2013-1)

2. 第3遺構面

【1区】

溝139 1区北半で検出した。東から西へと向いた鋤溝で、東端は攪乱により切られ、西端は調査地区外に延びる。検出できた規模は長さ10.8m、幅0.44m、深さは約0.1mである。標高は東端部分の北側上端がT.P.+8.699m、南側上端がT.P.+8.615m、底部がT.P.+8.602mで、西端部分の北側上端はT.P.+8.676m、南側上端はT.P.+8.639m、底部はT.P.+8.591mであった。遺物は、土師質土器羽釜(第18図-28)と瓦器碗(第18図-29)が出土した。出土遺物から平安時代の遺構の可能性はある。

【3-1区】

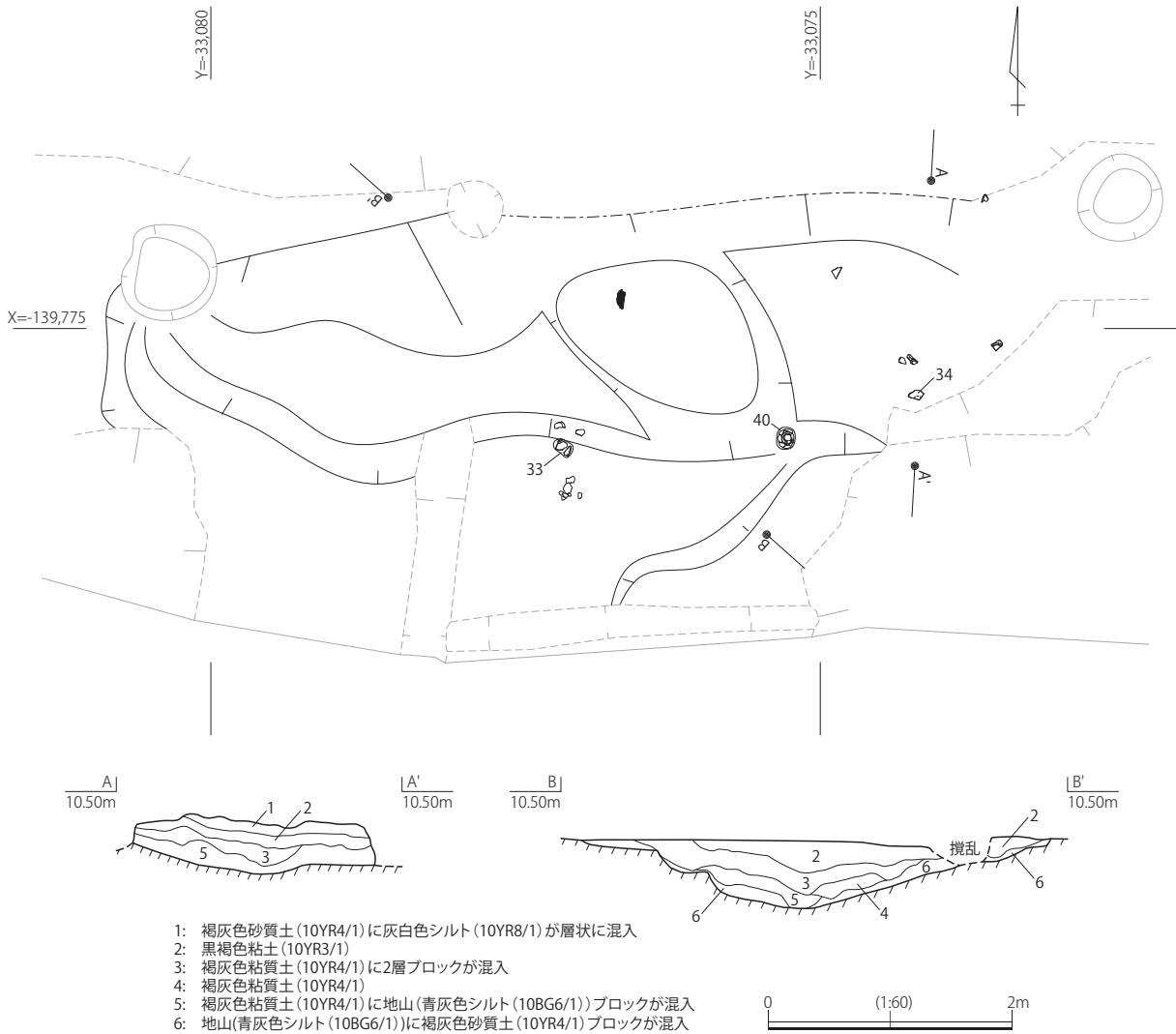
溝1 調査地区東端で検出した。東から西へと向いた溝で、南側の肩のみ検出し、北側の肩は調査地区外である。東端は調査地区外に延び、西端は攪乱により切られている。検出できた規模は長さ約10.1m、幅約6.8m、深さは約0.85mである。標高は東端部分の南側上端がT.P.+12.027m、底部がT.P.+11.003mで、西端部分の南側上端はT.P.+11.864m、底部はT.P.+10.966mであった(第10図・写真図版2-1)。出土遺物から中世の遺構と考えられる。溝内中層から古墳時代の青銅製鍍銀耳環(第17図-27)が出土した。

【3-2区】

土坑10 3-2区ほぼ中央で検出した。短径1.5m、深さ0.26mで楕円形を呈する。上端の標高はT.P.+10.323m、底部はT.P.+10.064mであった(第10図)。須恵器坏蓋(第18図-30)、陶質土器壺(第18図-31)、土師器甕(第18図-32)が出土した。陶質土器壺に共伴して桃・ウリ科種子(写真図版13-2-84)が出土した。出土遺物から古墳時代中期後半の遺構と考えられる。

【3-3区】

溝15 3-3区東半で検出した。東から屈曲しながら南へと向いた溝で、両端とも攪乱により切られる。検出できた規模は長さ約7m、幅3.5m、深さは0.55mである。標高は東端部分の北側上端が



第11図 第3遺構面3-3区溝15遺物出土状況図・断面図(N N2013-1)

T.P.+10.104m、南側上端がT.P.+10.094m、底部がT.P.+9.843mで、南端部分の東側上端はT.P.+10.104m、西側上端はT.P.+10.050m、底部はT.P.+9.669mであった(第11図・写真図版3-1)。遺物は、弥生土器壺(第11・19図-33)、須恵器坏蓋(第11・19図-34)、須恵器樽形甗(第19図-35)、韓式系土器甕・平底甕(第19図-36・37)、土師器皿(第19図-38)、瓦器碗(第19図-39)、須恵質土器山茶碗(第11・19図-40)・須恵質土器片口鉢(第19図-41)などが出土した。出土遺物から中世前期の遺構と考えられる。

溝20 3-3区中央付近で検出した。南から北へと向いた溝で、両端とも調査地区外に延びる。検出できた規模は長さ4.5m、幅1.56m、深さは0.32mである。標高は北端部分の東側上端がT.P.+10.121m、西側上端がT.P.+9.986m、底部がT.P.+9.690mで、南端部分の東側上端はT.P.+10.050m、西側上端はT.P.+10.007m、底部はT.P.+9.771mであった(第12図)。井戸16との対応関係から平安時代に掘削された遺構と考えられる。

溝21 3-3区西端で検出した。北から南へと向いた溝で、両端とも攪乱により著しく破壊されていた。検出できた規模は長さ1.62m、幅2.1m、深さは0.38mである。標高は北端部分の東側上端がT.P.+10.031m、西側上端がT.P.+9.900m、底部がT.P.+9.690mで、南端部分の東側上端はT.P.+10.031m、西側上端はT.P.+9.804m、底部はT.P.+9.647mであった(第12図)。遺物は、弥生土器(第19図-42)、土師器皿(第19図-43)、瓦質土器三足釜(第19図-44)、土師質土器羽釜(第19図-45)などが出土した。出土遺物から中世後期の遺構と考えられる。

井戸16(土坑19) 3-3区ほぼ中央で、溝20を切る遺構として検出した(第12図・写真図版3-2)。調査時は井戸16と土坑19をそれぞれ別個の遺構として取り扱ったが、断面図をみる限り、井戸16として取り扱ったのはこの井戸の井筒内に最終堆積した土で、土坑19として取り扱ったのが井戸16の井筒裏込め土の可能性が高い。すなわち、土坑19の形状が、この井戸全体の掘形の形状を示すと考えられる。井筒は、縦板を組み合わせた直径46cmの桶状の枠の内側に、直径35cmの曲物と直径25cmの曲物を上下2段に設置する二重の構造である。遺物出土状況から、井筒裏込め構築中に、第12図3層まで埋めた段階で黒色土器碗(第20図-50)などを用いた祭祀を行なったとみられる。また、井戸廃絶時には、第20図46~48の大形の土器や、拳大~人頭大の石を大量に井筒内に投棄する祭祀を行なったとみられる。掘形(土坑19)の規模は長径2.05m、短径1.6mの楕円形で、深さは0.63mであった。掘形上端の標高はT.P.+10.100m、掘形底部はT.P.+9.467m、井筒内の底部はT.P.+9.520mであった。出土遺物は、井戸16出土として取り扱った井筒内のものは、土師質土器羽釜・鍋・甕(第20図-46~48)などが、土坑19出土として取り扱った井筒裏込め土内のもは、土師器皿(第20図-49)、黒色土器碗(第20図-50)などがあつた。裏込め土内出土土器から、井戸の構築は11世紀末の平安時代、廃絶は12世紀末~13世紀初頭ごろの平安時代末もしくは鎌倉時代はじめと考えられる。

土坑24 3-3区中央西寄りで検出した。直径1.6m、深さ0.32mで円形を呈する。上端の標高はT.P.+10.092m、底部はT.P.+9.774mであつた(第12図)。土師器皿(第20図-51)、土師質土器羽釜(第20図-52)などが出土した。出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

【4-1区】

溝2 4-1区中央で検出した。東から西へと向いた溝で、両端とも調査地区外に延びる。検出できた規模は長さ約2m、幅3.35m、深さは0.35mである。標高は東端部分の北側上端がT.P.+9.800m、南側上端がT.P.+9.748m、底部がT.P.+9.366mで、西端部分の北側上端はT.P.+9.720m、南側上端はT.P.+9.800m、底部はT.P.+9.366mであつた(第15図)。遺物は、須恵器坏身(第21図-53)などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。

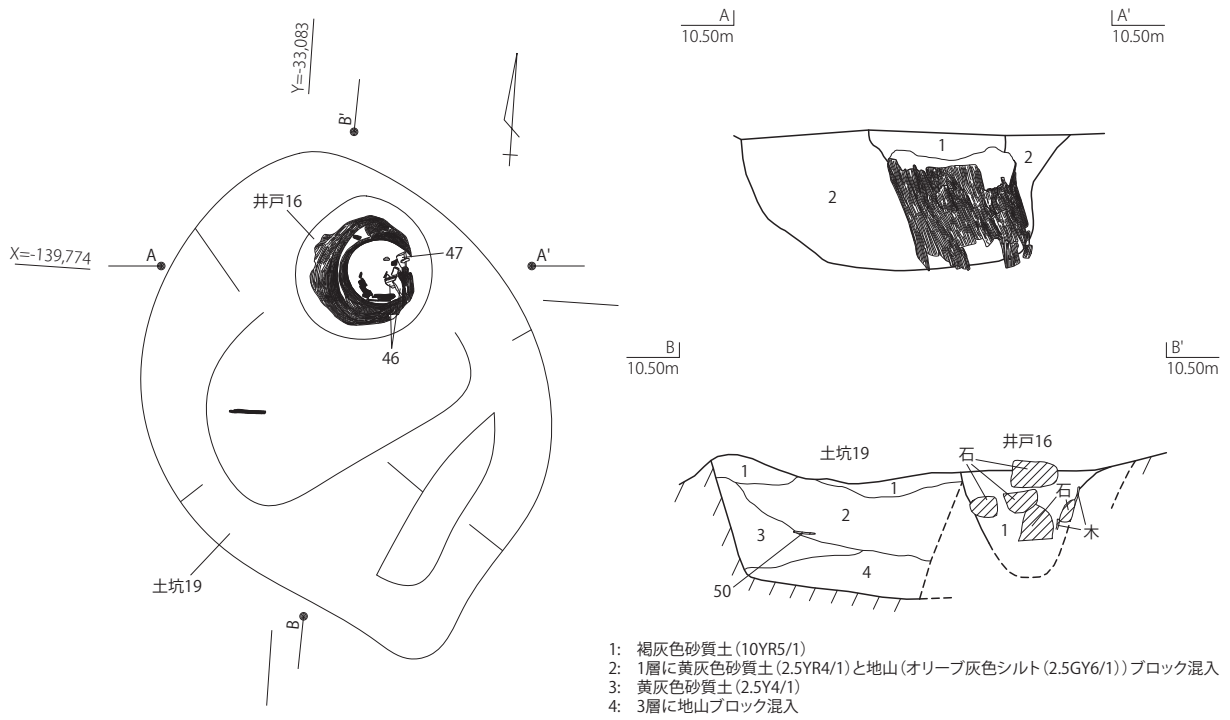
土坑5 4-1区北端で検出した。攪乱が著しいため遺構の形態は不明であるが、残存長1.5m、深さは0.03mである。上端の標高はT.P.+9.684m、底部はT.P.+9.656mであつた。遺物は、須恵器坏身(第21図-54)などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。

【4-2区】

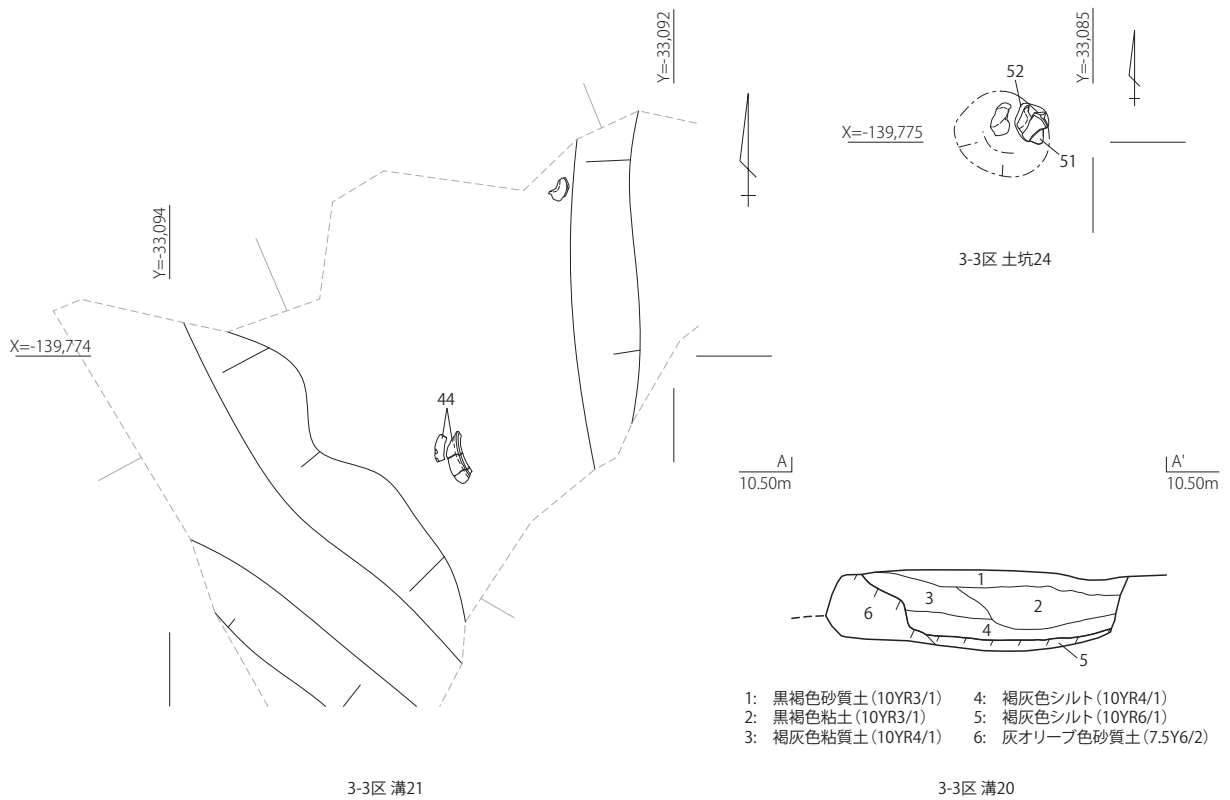
溝17 4-2区東寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、両端とも調査地区外に延びる。検出できた規模は長さ5.1m、幅0.7m、深さは0.45mである。標高は北端部分の東側上端がT.P.+9.174m、西側上端がT.P.+9.170m、底部がT.P.+8.889mで、南端部分の東側上端はT.P.+9.177m、西側上端は上層の溝に切られておりT.P.+9.124m、底部はT.P.+8.683mであつた(第13図)。遺物は、弥生土器壺・鉢(第13・22図-61~63)などが出土した。出土遺物から弥生時代中期の遺構と考えられる。土坑28の項目で後述する通り、方形周溝墓を構成する溝である可能性を考える。

溝30 4-2区中央西寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、両端とも調査地区外に延びる。北端部分は落込107により切られる。検出できた規模は長さ4.2m、幅0.76m、深さは0.31mである。標高は落込107に切られる北端部分の東側上端がT.P.+9.051m、西側上端がT.P.+9.067m、底部がT.P.+8.801mで、南端部分の東側上端はT.P.+9.049m、西側上端はT.P.+9.042m、底部はT.P.+8.720mであつた(第14図・写真図版4-2)。遺物は、弥生土器壺(第14・22図-64~66)、鉢(第14・22図-67・68)などが出土した。出土遺物から弥生時代中期中ごろの遺構と考えられる。土坑28の項目で後述する通り、方形周溝墓を構成する溝である可能性を考える。

溝75 4-2区西端で検出した。東から西へと向いた鋤溝で、東西端とも消失して検出した。検出できた規模は長さ2.2m、幅0.2m、深さは0.01mである。標高は東端部分の北側上端がT.P.+8.775m、南側上端がT.P.+8.778m、底部がT.P.+8.767mで、西端部分の北側上端はT.P.+8.750m、南側上端はT.P.+8.748m、底部はT.P.+8.740mであつた。遺物は、土師器皿(第22図-69)などが出土し

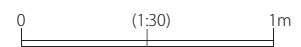


3-3区 井戸16・土坑19

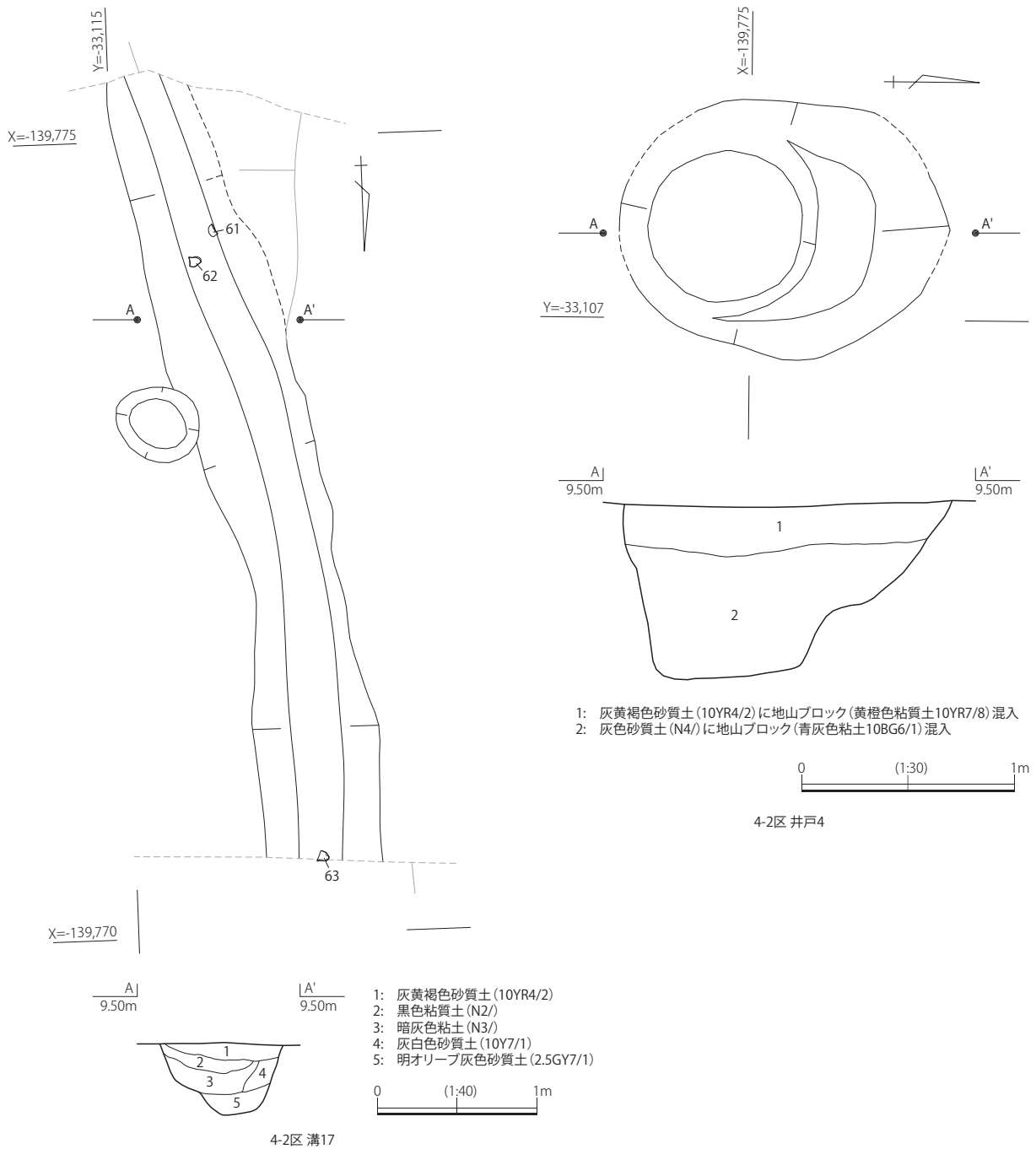


3-3区 溝21

3-3区 溝20



第12図 第3遺構面3-3区井戸16・土坑19・24・溝20・21遺物出土状況図・断面図(N N2013-1)

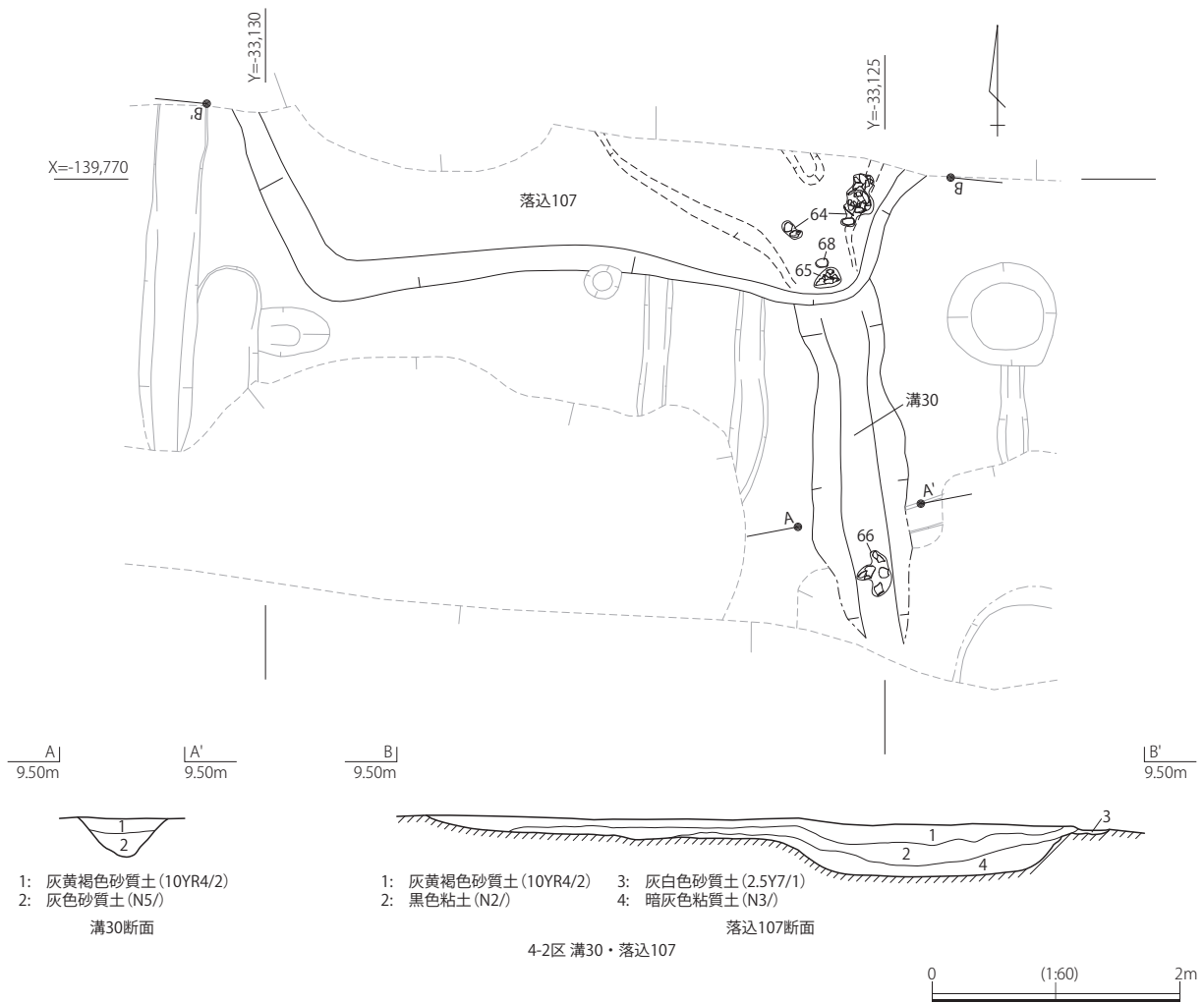
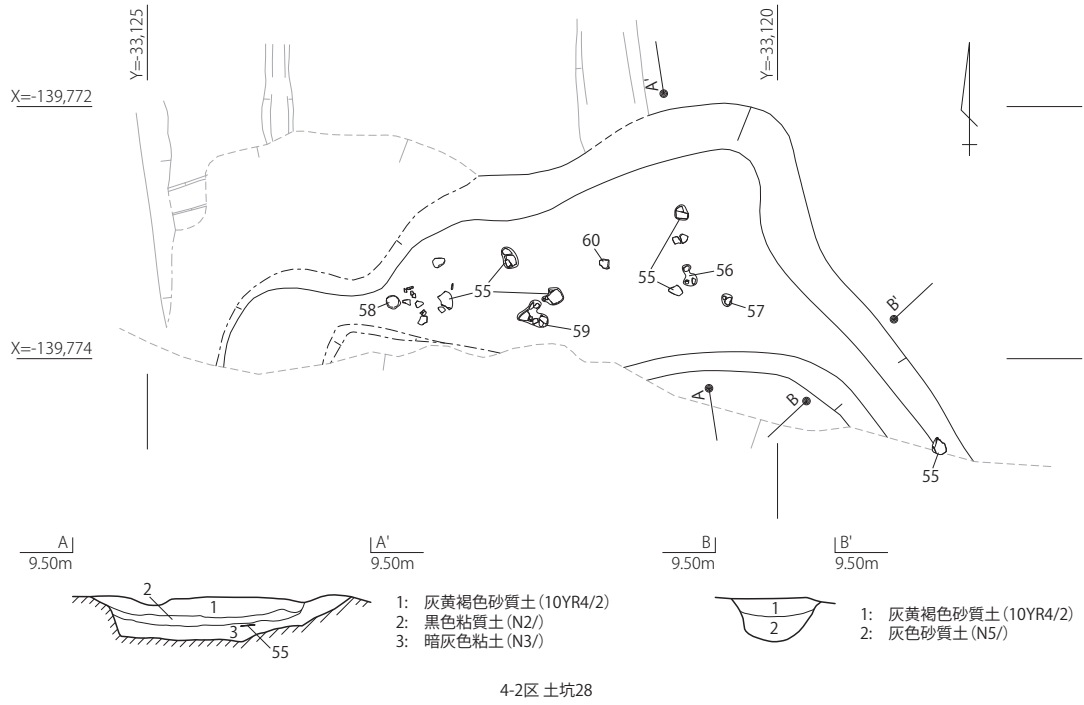


第13図 第3遺構面 4-2区溝17・井戸4遺物出土状況図・断面図(N N2013-1)

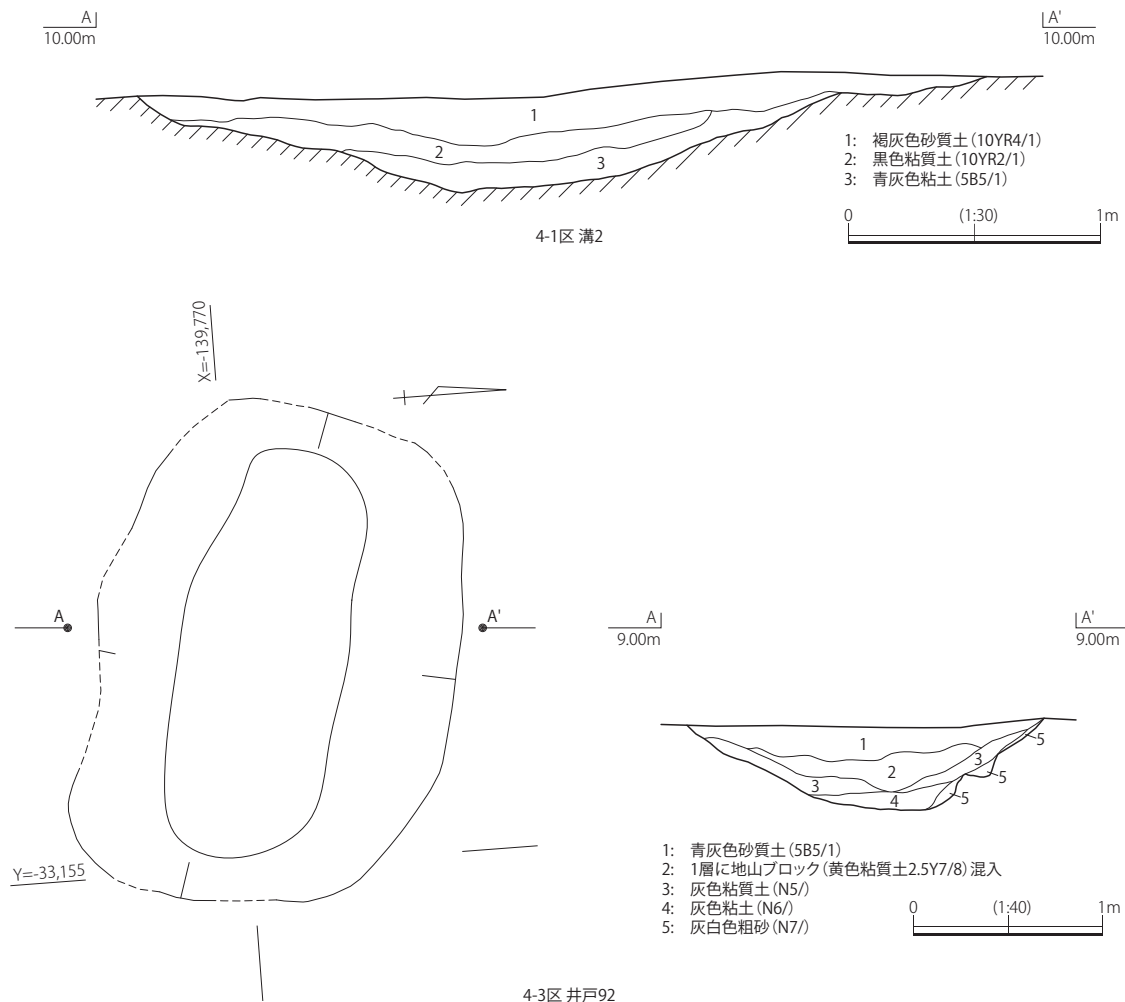
た。出土遺物から平安時代の鋤溝遺構と考えられる。

落込107 4-2区中央西寄り北端で検出した。北側は攪乱によって消失しており、南側のみ検出したが、一辺4.1mの隅丸形状である。深さは0.26mである。上端の標高はT.P.+9.070m、底部はT.P.+8.809mであった(第14図)。出土土器のうちいくつかは溝30出土土器と接合したが、落込107が溝30よりのちに掘削された際に、落込107埋土に混ざり込んだものとする。出土遺物は弥生土器のみであり、弥生時代の遺構と考えられる。

井戸4 4-2区東端で検出した(第14図)。掘形上面の一部は平安時代の鋤溝群によって切られている。規模は長径1.5m、短径1.2mの楕円形で、北側のみ段掘り状になっており、深さは0.8mであった。上端の標高はT.P.+9.475m、底部はT.P.+8.720mであった。土師器片、須恵器甕片のほか、黒色土器B類の小片が出土しており、平安時代の遺構と考えられる。



第14图 第3遺構面4-2区土坑28·溝27·30·落达107遺物出土狀況圖·断面圖 (N N2013-1)



第15図 第3遺構面4-1区溝2・4-3区井戸92遺物出土状況図・断面図 (NN2013-1)

土坑28 4-2区中央付近南端で検出した。検出時は南側の肩を認識できず、遺構掘削の結果不整形な形態を検出したため調査中は土坑として取り扱ったが、南東端から北西へと向かい、一度屈曲して幅広になり西へ向かい、西端で南へとやや屈曲気味になり調査地区外へのびる溝状の遺構である。西半は上部の攪乱により上層が失われ、底部最下層のみを検出した。西半部分は最下層のみの検出のため、不整形な形態での検出であったが、本来は幅広のまま西端までのびていたと考えられる。この場合、溝30に合流していた可能性も考えられる。上面で検出できた長さ3.3m、最大幅2.08m、深さ0.4mである。北側上端の標高はT.P.+9.118m、南側上端の標高はT.P.+9.126m、底部はT.P.+8.727mであった(第14図・写真図版4-2)。弥生土器壺(第14・21図-55~57)、底部片(第14・21図-58)、甕(第14・21図-59・60)などが出土した。出土遺物から弥生時代中期中ごろの遺構と考えられる。下記の通り、方形周溝墓を構成する溝である可能性を考える。

上記土坑28と溝17・30は、おおよその時期が一致する。溝17・30については掘削方向や幅が共通し、土坑28のうち南東の溝状部も方向や幅がおおよそそれに一致する。幅広の東西方向部分はそれらにほぼ直行する方向に掘削される。これらの配置形態から、この3遺構は方形周溝墓の区画溝として掘り込まれた遺構である可能性を考える。溝30から焼成前穿孔の壺(第22図-64)が出土していることも、このことを補強する要素となる。東を溝17、西を溝30、南を土坑28により囲まれた部分を方形周溝墓とみた場合、周溝が全周しない箇所があるが、市内の雁屋遺跡でも方形周溝墓に陸橋部が存在する例や周溝が全周しない例があることから(野島1987a、1994a)、方形周溝墓である可能性は十分にあると考える。土坑28により囲まれた南の部分も、方形周溝墓である可能性を考える。これらを方形周溝

墓と考えた場合、その規模は、東を溝17、西を溝30、南を土坑28により囲まれた方形周溝墓Aは東西約8.5m、土坑28により囲まれた方形周溝墓Bは東西約3.5mである（第7図）。周辺では、調査地区から西に300mほどの鎌田遺跡で中期の方形周溝墓群を（野島1994b）、南に250mほどの雁屋遺跡でも同じく中期の方形周溝墓群を検出しており（野島1994a）、中野遺跡にも墓域が広がるとみても不自然ではない。また小規模な方形周溝墓の類例としても、寝屋川市小路遺跡で時期はやや降るがこのような3mほどの小規模な方形周溝墓群が検出されている（六辻編2006）。このように、周辺の状況からみても、これらの遺構が方形周溝墓群を構成するものである可能性は十分にあると考える。なお、西を土坑28、東を溝17に区画された部分も、方形周溝墓の可能性があると考えるが、南北の区画溝が不明であるため、可能性を示すにとどめておく。

【4-3区】

井戸92 4-3区東端で検出した。掘形上面の一部は平安時代の鋤溝群によって切られている。規模は長径2.7m、短径1.9mの楕円形で、深さは0.43mであった。上端の標高はT.P.+8.480m、底部はT.P.+8.047mであった。遺構内北側が階段状に加工されており、井戸掘削時の作業足場等であった可能性がある（第15図）。木製品の可能性がある木質片以外に出土遺物がなく、明確な時期は不明であるが、他の遺構との関係からみると平安時代の遺構の可能性はある。

（實盛）

第3節 出土遺物

1. 遺物包含層内出土遺物

【1区】

土製品

1 土人形 高さ：2.8cm（残存）・最大幅：1.1cm。台座最大長：2.4cm・最大幅：1.2cm。色調：灰白色（10YR8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：頭部のみ欠損。稲荷の狐。型作りの土人形。近世のものと思われる。（第16図－1、写真図版8－1－1）

【3－1区】

韓式系土器

2 甕 最大長：6.4cm（残存）。最大幅：5.5cm（残存）。厚さ：0.8cm。色調：内・外・断面は灰色（N6/）。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。須恵質。体部外面は幅約2mmの平行叩き調整の後に沈線を巡らせている。体部内面はヨコ方向にヘラナデ調整を施している。3－1区出土。（第16図－2、写真図版8－1－2）

3 甕 最大長：4.7cm（残存）。最大幅：2.5cm（残存）。厚さ：0.9cm。色調：内・外・断面は灰白色（5Y8/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒と雲母を少量含む。焼成：やや不良。残存度：小片。須恵質。体部外面は格子叩き調整、体部内面はナデ調整。（第16図－3、写真図版8－1－3）

【4－2区】

韓式土器

4 甕 最大長：6.6cm（残存）。最大幅：6.2cm（残存）。厚さ：0.5～0.7cm。色調：内・外面は灰色（N4/）、断面は灰赤色（2.5YR4/2）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。須恵質。体部外面は平行線の一部が格子目となる叩き具を使い、体部内面に無文の当て具をあてて叩き調整を施している。他の市内出土のものと同胎土や色調の比較から韓式土器と思われる。（第16図－4、写真図版8－1－4）

須恵質土器

5 平鉢 口径：31.4cm（復元）。器高：5.6cm。厚さ：0.6～1.2cm。色調：内・底部外面はにぶい赤褐色（5YR5/3）、外・断面は灰色（N5/）。胎土：密。直径1～2mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。近世のものと思われる。（第16図－5、写真図版8－1－5）

6 片口鉢 口径：30.4cm（復元）。器高：5.7cm（残存）。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内・外・断面は灰色（N6/）、口縁部外面は自然釉により灰色（7.5Y4/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。東播系の製品。第Ⅲ期第1段階。13世紀代のものと思われる。（第16図－6、写真図版8－1－6）

動物遺体

83馬歯 長さ5.0cm、幅2.2cm、厚さ1.7cm。古墳時代か。（第7図－83、写真図版13－2－83）

【4－3区】

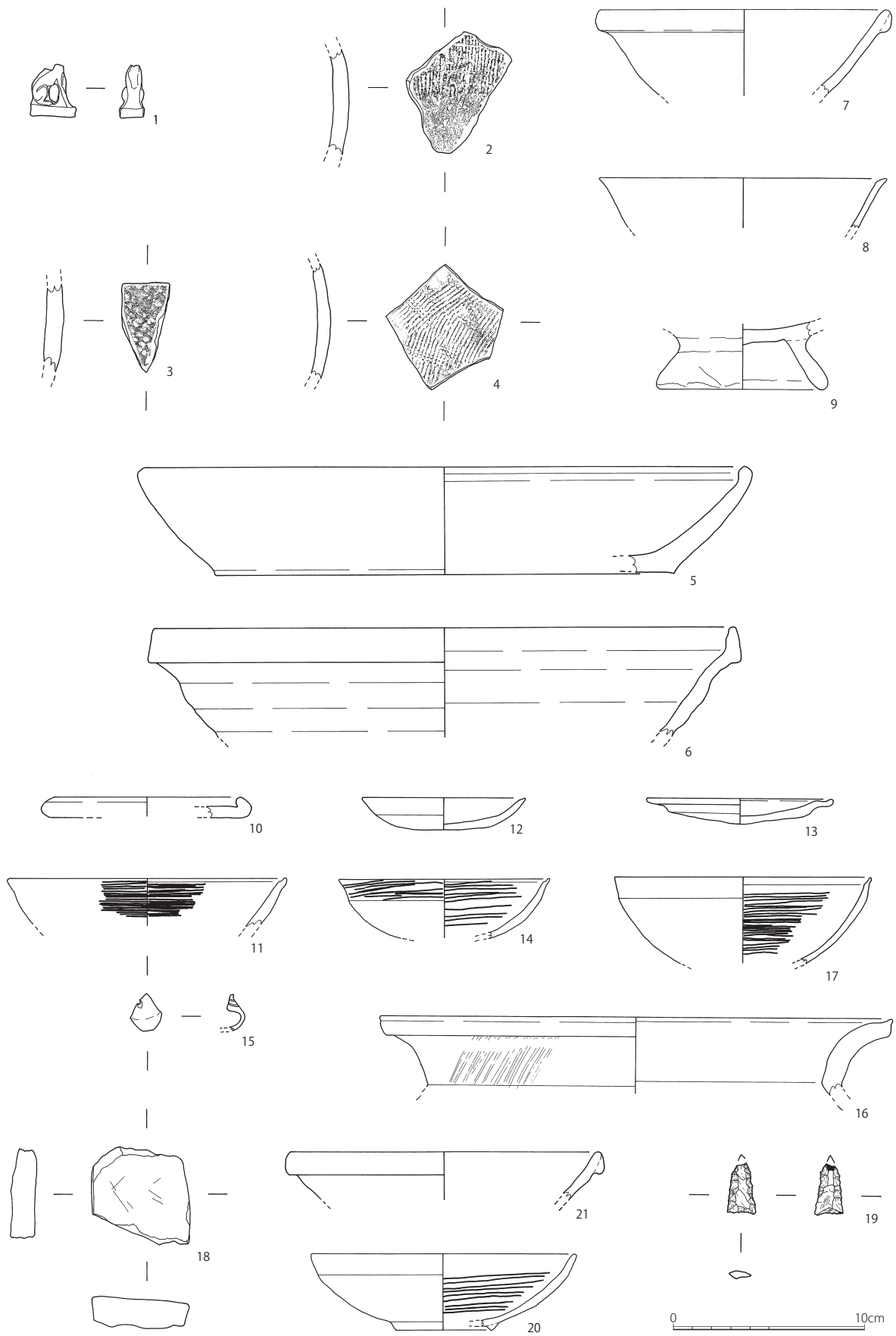
貿易陶磁器

7 白磁碗 口径：15.0cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.5～0.9cm。色調：内・外・断面は灰白色（N8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。口縁は玉縁状を呈している。12世紀前半のものと思われる。4－3区出土。（第16図－7、写真図版8－1－7）

8 白磁碗 口径：15.0cm（復元）。器高：2.5cm（残存）。厚さ：0.2～0.3cm。色調：内・外・断面は灰白色（N8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。12世紀後半～13世紀前半のものと思われる。（第16図－8、写真図版8－1－8）

土師器

9 台付皿 高台径：8.6cm（復元）。器高：3.5cm。厚さ：0.6～1.0cm。色調：内・外・断面は浅黄



第16図 出土遺物（包含層・第1遺構面、NN2013-1）

橙色 (10YR8/4)。胎土：密。直径 1 mm以下の赤色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。12世紀代のものと思われる。(第16図-9、写真図版 8-1-9)

【3・4区】

銅銭

22元祐通寶 直径：2.6cm。厚さ：0.1cm。1086年初鑄の北宋銭。(第17図-22、写真図版 9-1-22、写真図版 9-2-22、巻頭写真図版 2-1)

23咸豊通寶 直径：2.2cm。厚さ：0.1cm。背面の左右に文様がある。1851年初鑄の清国銭。盛土内出土。(第17図-23、写真図版 9-1-23、写真図版 9-2-23、巻頭写真図版 2-1)

24寛永通寶 直径：2.3cm。厚さ：0.1cm。1668年以降に鑄造された「新寛永通寶」。(第17図-24、写真図版 9-1-24、写真図版 9-2-24、巻頭写真図版 2-1)

2. 第1遺構面遺構出土遺物

【1区】

Pit16

土師器

10皿 口径：9.8cm (復元)。器高：1.1cm (残存)。厚さ：0.4~0.6cm。色調：内・外・断面は浅橙色 (10YR8/4)。胎土：密。直径 1 mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。Cタイプのコースター状皿。12世紀代のものと思われる。(第16図-10、写真図版 8-2-10)

Pit17

黒色土器

11碗 口径：14.6cm (復元)。器高：2.5cm (残存)。厚さ：0.2~0.6cm。色調：内・外・断面はオリブ黒色 (5Y3/1)。胎土：密。直径 1 mm以下の石英・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。B類碗。体部内外面は密なヘラミガキ調整を施している。畿内系V類の11世紀代のものと思われる。(第16図-11、写真図版 8-2-11)

土坑19

土師器

12皿 口径：8.6cm (復元)。器高：1.7cm。厚さ：0.2~0.4cm。色調：内・外・断面は灰白色 (10YR8/2)。胎土：密。直径 1 mm程度の砂粒を極少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。15~16世紀中頃のものと思われる。(第16図-12、写真図版 8-2-12)

土坑31

土師器

13皿 口径：9.6cm (復元)。器高：1.4cm。厚さ：0.3~0.5cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色 (10YR7/4)。胎土：密。直径 1 mm以下の赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。B cタイプの「て」の字状口縁の皿。11世紀末のものと思われる。(第16図-13、写真図版 8-2-13)

土坑39

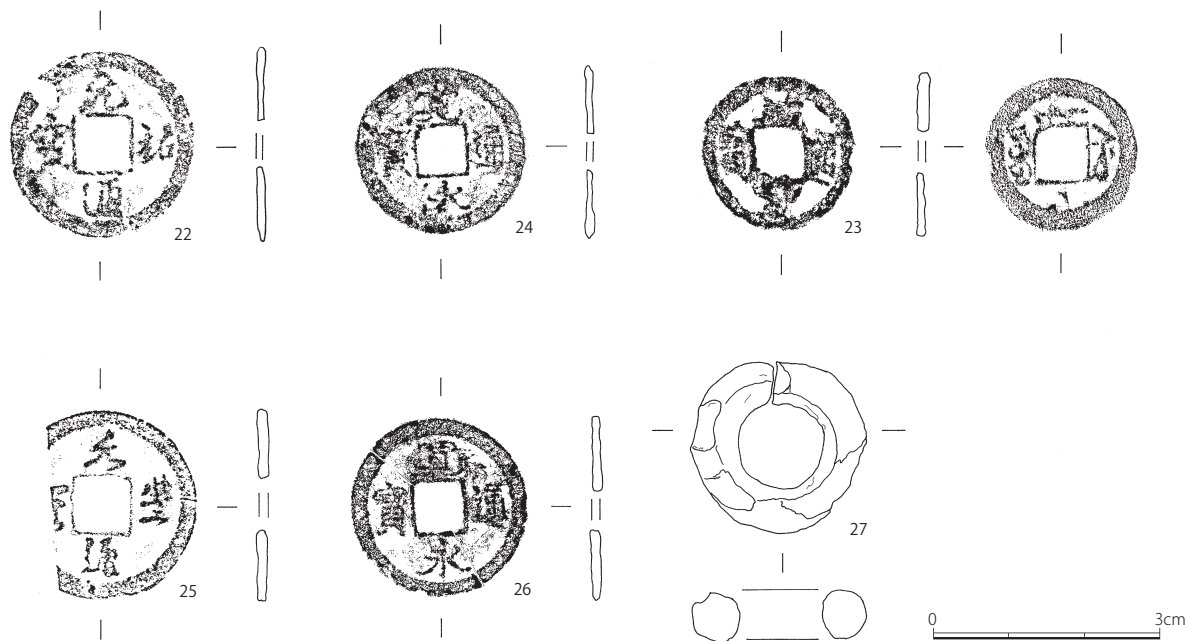
瓦器

14碗 口径：11.0cm (復元)。器高：3.1cm (残存)。厚さ：0.1~0.4cm。色調：内・外面は灰色 (N4/)、断面は灰白色 (N8/)。胎土：密。直径 1 mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/5。体部外面は口縁部のみヘラミガキ調整を施している。体部内面は粗いヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ-C段階。13世紀前半のものと思われる。(第16図-14、写真図版 8-2-14)

土坑45

土製品

15土鈴 高さ：1.9cm (残存)。最大幅：1.6cm (残存)。厚さ：0.2~0.3cm。色調：内・外面は浅橙色 (7.5YR8/6)、断面は内面と同色だが一部焼成不良のため黒褐色 (2.5Y3/1)。胎土：密。焼成：やや不良。残存度：1/3。中世以降のものと思われる。(第16図-15、写真図版 8-2-15)



第17図 出土遺物（金属製品、NN2013-1）

土坑79

須恵質土器

16甕 口径：26.8cm（復元）。器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.2～1.1cm。色調：内・外・断面は灰色（N6/）、口縁端部外面は灰色（N4/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。東播系の製品。12世紀後半のものと思われる。（第16図-16、写真図版8-2-16）

溝51

瓦器

17碗 口径：13.4cm（復元）。器高：4.5cm（残存）。厚さ：0.1～0.4cm。色調：内・外面は暗灰色（N3/）、断面は灰白色（N8/）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部外面は摩耗のため調整は不明瞭である。体部内面は密なヘラミガキ調整を施している。大和型Ⅲ-A（古）段階。12世紀後半のものと思われる。（第16図-17、写真図版8-2-17）

石製品

18砥石 最大長：5.1cm（残存）。最大幅：5.0cm（残存）。厚さ：0.9～1.6cm。色調：灰白色（2.5Y8/1）。（第16図-18、写真図版8-2-18）

【4-3区】

土坑5

石製品

19石鏃 長さ：2.7cm（残存）。幅：1.5cm。厚さ：0.4cm。色調：灰色（4Y4/1）。サヌカイト製。縄文時代の石鏃と思われる。（第16図-19、写真図版8-2-19）

土坑29

瓦器

20碗 口径：13.8cm（復元）。高台径：5.0cm（復元）。器高：4.0cm。高台高：0.3cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内面は灰色（N6/）、外面は灰色（N4/）、断面は灰白色（10Y8/1）。胎土：密。焼成：良好。

残存度：1/3。体部内面には粗いヘラミガキ調整を施している。楠葉型Ⅲ－3又はⅣ－1段階。13世紀後半のものと思われる。(第16図－20、写真図版8－2－20)

土坑57

貿易陶磁器

21白磁碗 口径：16.0cm(復元)。器高：2.5cm(残存)。厚さ：0.4～0.9cm。色調：内・外・断面は灰白色(5Y8/2)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁は玉縁状を呈している。口縁部に他製品との融着痕がみられる。12世紀前半のものと思われる。(第16図－21、写真図版8－2－21)

土坑30

銅銭

25元豊通寶 直径：2.6cm。厚さ：0.1cm。1078年初鑄の北宋銭。(第17図－25、写真図版9－1－25、写真図版9－2－25、巻頭写真図版2－1)

溝1

26寛永通寶 直径：2.5cm。厚さ：0.1cm。1668年以降に鑄造された「新寛永通寶」。上面から出土。(第17図－26、写真図版9－1－26、写真図版9－2－26、巻頭写真図版2－1)

3. 第3遺構面遺構出土遺物

【1区】

溝139

土師質土器

28羽釜 器高：5.8cm(残存)。厚さ：0.5～0.9cm。色調：内・外面は橙色(7.5YR7/6)、断面は灰白色(7.5YR8/2)。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁端部は外側へ折り返した玉縁状を呈する。口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面はヨコハケ調整を施している。11世紀末頃のものと思われる。(第18図－28、写真図版10－1－28)

瓦器

29碗 高台径：6.4cm(復元)。器高：1.0cm(残存)。高台高：0.3cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は暗灰色(N3/)、断面は灰白色(5Y8/1)。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：底部のみ1/2。見込部には斜格子状の暗文を施している。大和型Ⅰ－C又はⅠ－D段階。11世紀末～12世紀前半のものと思われる。(第18図－29、写真図版10－1－29)

【3－1区】

溝1

金属製品

27青銅製鍍銀耳環 直径：2.3cm。厚さ：0.6cm。中実の青銅製で、一部に銀メッキの痕跡がある。中層から出土。(第17図－27、写真図版9－1－27、写真図版9－2－27、巻頭写真図版2－1)

【3－2区】

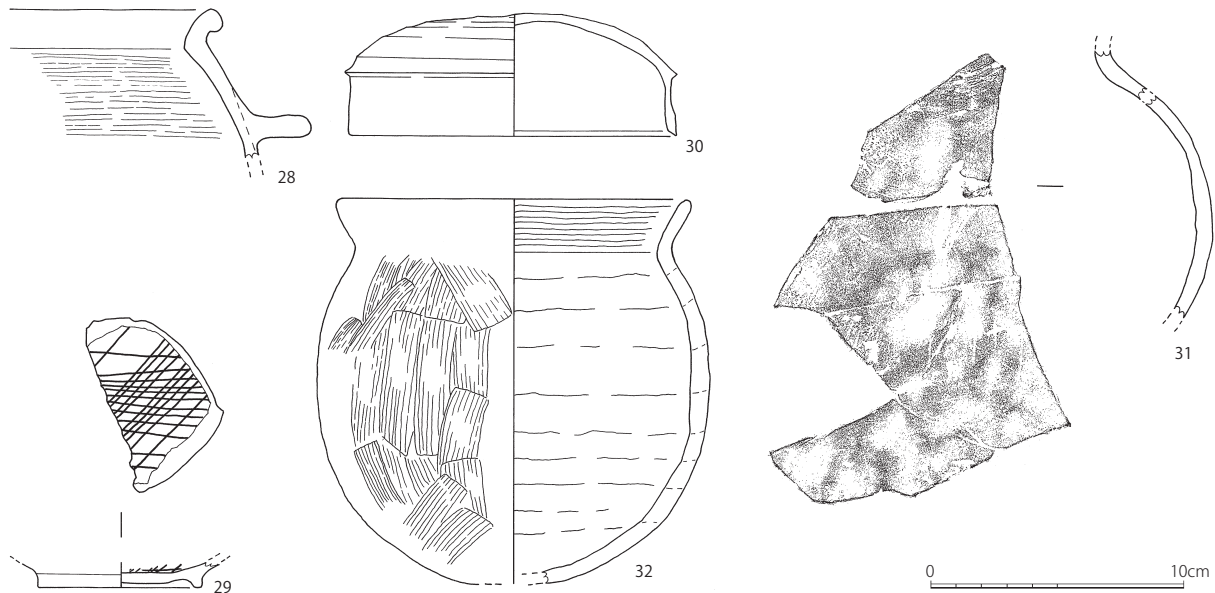
土坑10

須恵器

30坏蓋 口径：13.0cm。器高：4.8cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外面は灰色(N5/)。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：7/9。天井部の稜線は明瞭で、口縁部内面には内傾する段をもつ。天井部には降灰がみられる。Ⅰ型式4段階(TK23型式)5世紀後半のものと思われる。(第18図－30、写真図版10－1－30)

韓式土器

31壺 器高：10.5cm(残存)。厚さ：0.4～0.7cm。色調：内・外面は灰赤色(2.5YR5/2)、断面は褐灰色(10YR6/1)。胎土：緻密。微細の粒子を極少量含む。焼成：良好。残存度：小片。須恵質。体部



第18図 出土遺物（第3遺構面1区・3-2区、NN2013-1）

外面はナデ調整を施している。内面には当て具痕がみられる。他の市内出土のものと同胎土や色調の比較から韓式土器と思われる。桃の種子5点・ウリ科の種子1点（写真図版13-2-84）が伴出している。（第18図-31、写真図版10-1-31、写真図版13-2）

土師器

32甕 口径：13.8cm（復元）。器高：15.3cm（残存）。厚さ：0.5～0.8cm。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR7/4）、外面は黄橙色（7.5YR7/8）、断面は黒褐色（7.5YR3/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部外面はヨコナデ調整・内面はヨコハケ調整、体部外面はタテハケ調整を施している。体部内面は粗雑なナデ調整のため粘土紐痕が明瞭である。5世紀後半のものと思われる。（第18図-32、写真図版10-1-32）

【3-3区】

溝15

弥生土器

33壺 口径：12.6cm（復元）。器高：3.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・断面は褐灰色（10YR4/1）、外面は灰黄褐色（10YR5/2）。胎土：粗。直径2mm以下の石英・長石を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。受口状口縁の壺の口縁部。近江など他地域のものとの可能性がある。弥生時代中期のものと思われる。（第19図-33、写真図版10-2-33、巻頭写真図版2-2）

須恵器

34坏蓋 口径：14.4cm（復元）。器高：4.6cm（残存）。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・断面は灰白色（5Y7/1）、外面は灰色（5Y6/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：1/3。天井部の稜線はやや不明瞭である。口縁部内面にはわずかに内傾する段をもつ。Ⅱ型式1段階（MT15型式）6世紀前半のものと思われる。（第19図-34、写真図版10-2-34）

35樽形甕 最大長：4.6cm（残存）。厚さ：0.2～1.0cm。色調：内面は灰色（N6/）、外面は暗灰色（N3/）、断面は赤褐色（10R5/3）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面には自然釉が掛かっている。Ⅰ型式2段階（TK216型式）5世紀前半のものと思われる。（第19図-35、写真図版10-2-35）

韓式系土器

36甕 最大長：6.0cm（残存）。最大幅：4.4cm（残存）。厚さ：0.9cm。色調：内・外・断面は灰色（N6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。須恵質。体部外面は鳥足文平行叩き調整の後に幅約2mmの沈線を巡らせている。体部内面はナデ調整を施している。（第19図-36、写真図版10-2-36）

37平底甕 最大長：3.1cm（残存）。最大幅：3.7cm（残存）。厚さ：0.5~0.7cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR8/4）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。土師質。体部外面は格子叩き調整、体部内面はナデ調整を施している。（第19図-37、写真図版10-2-37）

土師器

38皿 口径：8.2cm（復元）。器高：1.5cm（残存）。厚さ：0.3~0.5cm。色調：内・外・断面は灰白色（2.5Y8/1）。胎土：密。直径1mm以下の黒色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部外面は二段のヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。体部外面は未調整である。J aタイプで12世紀中頃のものと思われる。（第19図-38、写真図版10-2-38）

瓦器

39碗 高台径：5.6cm（復元）。器高：1.4cm（残存）。高台高：0.3cm。厚さ：0.3~0.7cm。色調：内・外面は灰色（N4/）、断面は灰白色（5Y8/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を極少量含む。焼成：良好。残存度：小片。見込部には連結輪状の暗文を施している。大和型Ⅲ-A（新）段階。12世紀後半のものと思われる。（第19図-39、写真図版10-2-39）

須恵質土器

40山茶碗 口径：15.6cm。高台径：6.9cm。器高：5.0cm。高台高：0.4cm。厚さ：0.6~1.1cm。色調：内・外・断面は灰色（5Y6/1）。胎土：やや粗。直径1mm程度の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部外面の一部には自然釉がみられる。底部は回転糸切り後に幅広で丸みのある高台を貼り付けている。南部系の製品。尾張型-5~6。13世紀前半のものと思われる。（第19図-40、写真図版10-2-40）

41片口鉢 口径：26.0cm（復元）。器高：3.0cm（残存）。厚さ：0.6~1.1cm。色調：内・外・断面は灰色（N6/）。胎土：やや密。直径1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。東播系の製品。第Ⅱ期第2段階。12世紀末~13世紀初のものと思われる。（第19図-41、写真図版10-2-41）

溝21

弥生土器

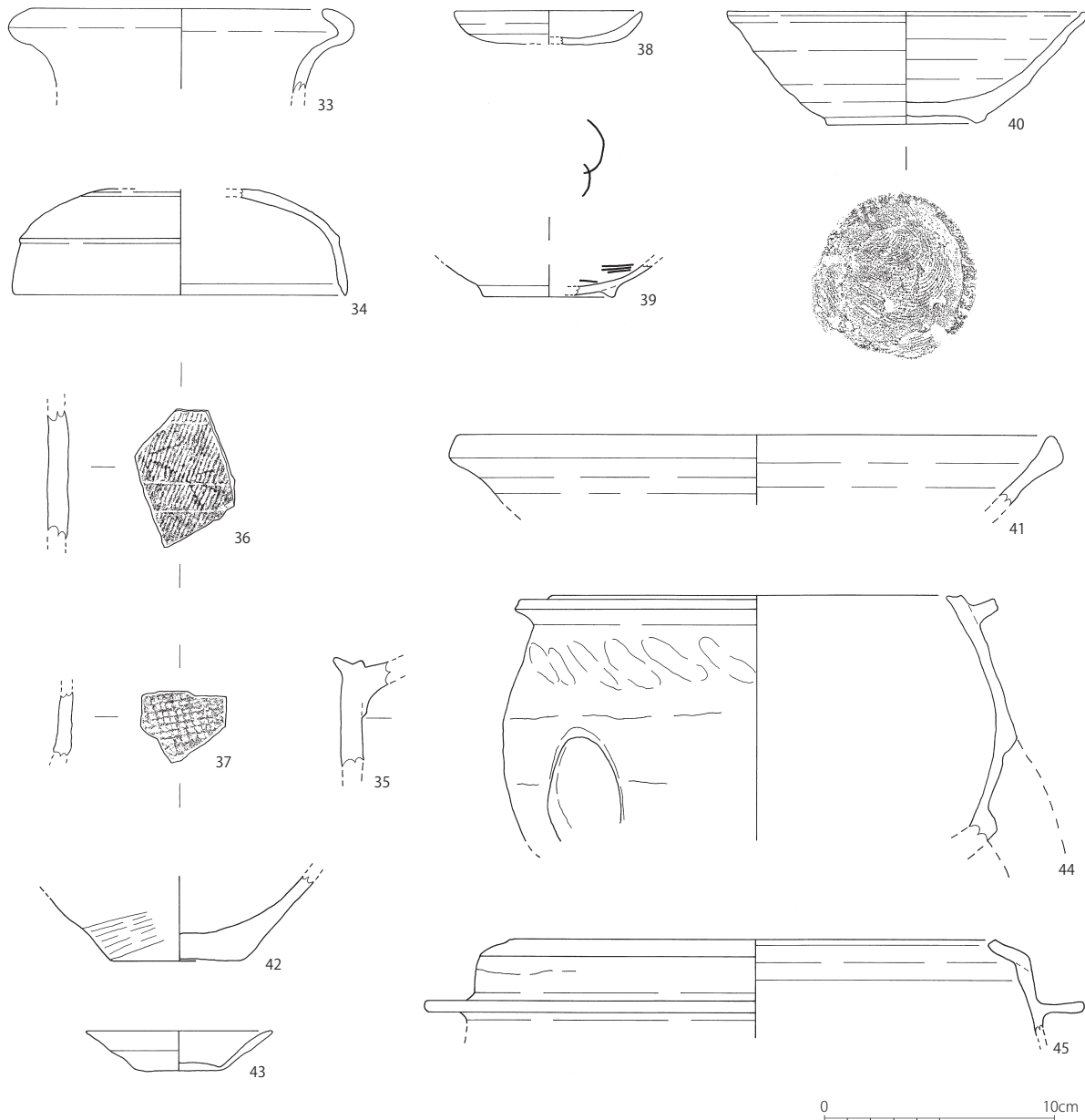
42壺 底径：5.6cm。器高：3.7cm（残存）。厚さ：0.5~1.5cm。色調：内・外・断面は灰白色（10YR8/2）。胎土：密。直径1~2mm程度の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。（第19図-42、写真図版10-2-42、巻頭写真図版2-2）

土師器

43皿 口径：8.2cm（復元）。器高：1.7cm。厚さ：0.2~0.4cm。色調：内・外・断面は灰白色（2.5Y8/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。口縁部外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。底部内面にやや窪んだ圏線がある。I bタイプで16世紀後半のものと思われる。（第19図-43、写真図版10-2-43）

瓦質土器

44三足羽釜 口径：17.8cm（復元）。器高：10.7cm（残存）。厚さ：0.5~0.9cm。色調：内・断面は灰白色（2.5Y7/1）、外面はオリーブ黒色（5Y3/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面の鰐下に指頭痕が、中央付近には粘土紐痕みられる。体部内面はナデ調整を施している。鰐の下部には煤が全体に付着し、使用の痕跡が確認できる。14世紀代の山城型のものと思われる。（第12・19図-44、写真図版10-2-44）



第19図 出土遺物 (第3遺構面3-3区溝15・21、NN2013-1)

土師質土器

45羽釜 口径：21.0cm (復元)。器高：4.2cm (残存)。厚さ：0.4~0.7cm。色調：内・外・断面は淡黄色 (2.5Y8/3)。胎土：密。直径1mm以下の黒色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面はナデ調整、口縁部内面はヨコナデ調整を施している。罫の下部には煤が全体に付着し、使用の痕跡が確認できる。14世紀代のものと思われる。(第19図-45、写真図版10-2-45)

井戸16 (井筒内)

土師質土器

46羽釜 口径：27.0cm (復元)。器高：23.3cm (残存)。厚さ：0.7~1.6cm。色調：内・断面は灰白色 (2.5Y8/1) 部分的に灰黄褐色 (10YR4/2) に変色している。外面はオリーブ黒色 (5Y3/1)。胎土：密。直径1~2mmの白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。口縁部外面の一部に指頭痕がみられる。罫付近の体部内面にはコビナデ調整を施している。体部外面の罫下には煤が全体に付着し、使用の痕跡が確認できる。12世紀

末～13世紀初頭の河内産のものと思われる。(第12・20図-46、写真図版11-1-46)

47鍋 口径：29.0cm (復元)。器高：12.5cm (残存)。厚さ：0.9～1.5cm。色調：内・断面は淡黄色(2.5Y8/3)、外面は黒色(N2/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。体部外面の口縁部下には煤が全体に付着し、使用の痕跡が確認できる。(第12・20図-47、写真図版11-1-47)

48甕 口径：23.0cm (復元)。器高：6.5cm (残存)。厚さ：0.6～1.1cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR8/3)。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面はナデ調整を施している。口縁下部外面には強い指頭痕がみられる。体部内面には粘土紐痕がみられる。口縁下部外面には煤が全体に付着し、使用の痕跡が確認できる。羽釜の可能性がある。(第20図-48、写真図版11-1-48)

土坑19 (井戸16掘形裏込め)

土師器

49皿 口径：9.0cm (復元)。器高：1.6cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外・断面は灰白色(2.5Y8/2)。胎土：密。直径1mm以下の雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。Bcタイプの「て」の字状口縁の皿。11世紀末のものと思われる。(第20図-49、写真図版11-1-49)

黒色土器

50碗 口径：15.8cm。高台径：5.8cm。器高：5.1cm。高台高：0.4cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外面は暗灰色(N3/)、断面は灰色(N4/)。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：4/5。B類碗。口縁部外面はヨコ方向、体部外面は斜め方向、体部内面はヨコ方向の密なヘラミガキ調整を施している。畿内系V類の11世紀後半のものと思われる。(第12・20図-50、写真図版11-1-50)

土坑24

土師器

51皿 口径：17.0cm (復元)。器高：3.2cm (残存)。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR8/4)。胎土：密。直径1mm以下の黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部外面と体部内面はナデ調整を施している。体部外面には指頭痕がみられる。Aaタイプで11世紀末のものと思われる。(第12・20図-51、写真図版11-1-51)

土師質土器

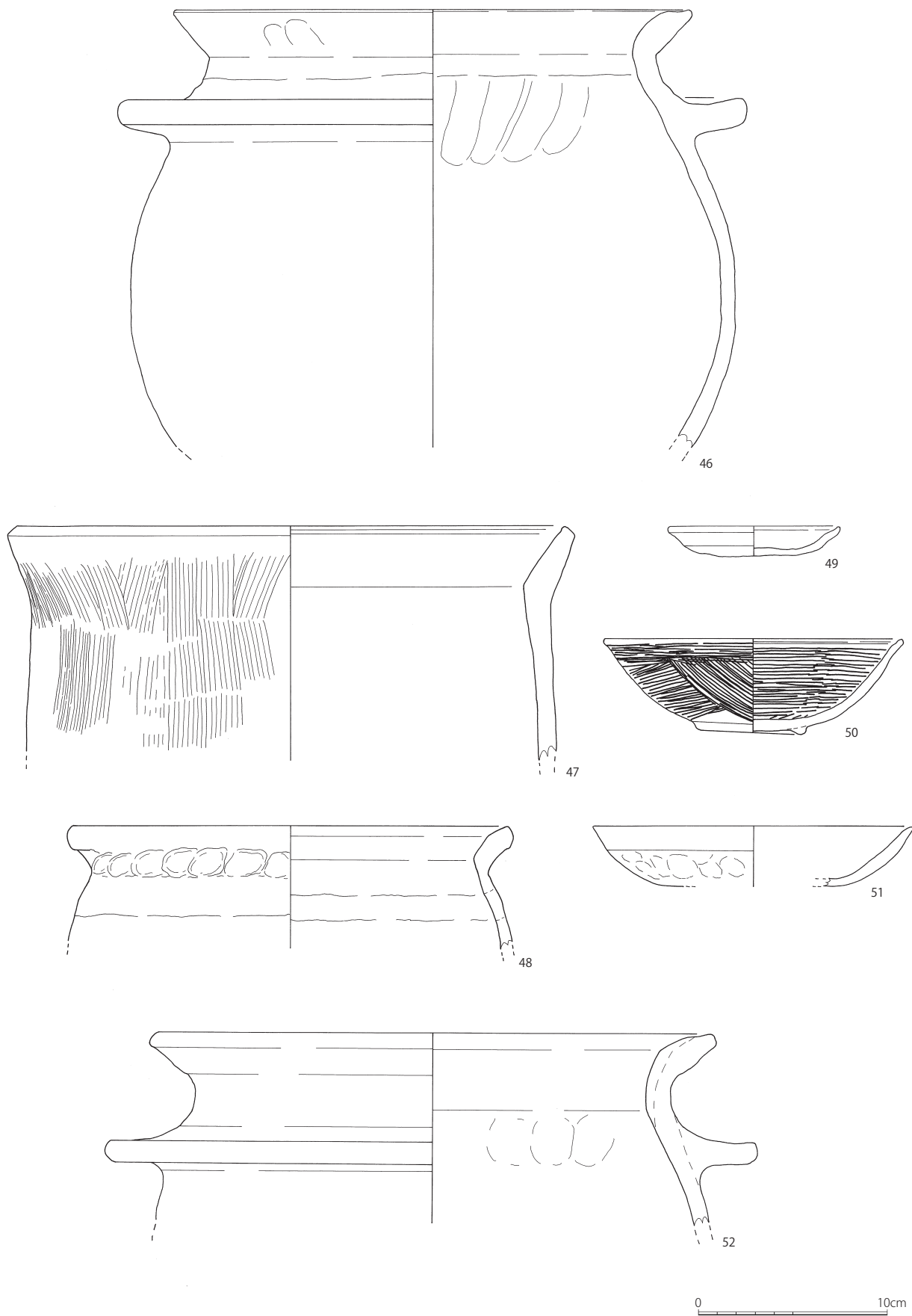
52羽釜 口径：29.4cm。器高：10.2cm (残存)。厚さ：0.8～1.7cm。色調：内・断面は灰白色(10YR7/1)、外面は灰白色(10YR8/2)。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く、雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面は2段のヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。鏝付近の体部内面にはユビナデ調整を施している。口縁部外面と鏝の下部には煤が全体に付着し、使用の痕跡が確認できる。12世紀末～13世紀初の河内産のものと思われる。(第12・20図-52、写真図版11-1-52)

【4-1区】

土坑5

須恵器

53坏身 口径：13.0cm (復元)。器高：2.7cm (残存)。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外・断面は灰色(N6/)。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁端部は丸く仕上げられている。II型式2段階(TK10型式)6世紀中頃のものと思われる。(第21図-53、写真図版11-2-53)



第20図 出土遺物 (第3遺構面3-3区井戸16・土坑19・24、NN2013-1)

溝2

須恵器

54坏身 口径：14.0cm（復元）。器高：2.6cm（残存）。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外・断面は灰色（N6/）。胎土：密。直径1mm程度の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁端部は内傾する段を有する。Ⅱ型式1段階（TK15型式）6世紀前半のものと思われる。（第21図-54、写真図版11-2-54）

【4-2区】

土坑28

弥生土器

55広口壺 口径：23.0cm（復元）。胴径：33.0cm（復元）。器高：25.0cm（残存）。厚さ：0.5～1.3cm。色調：（口縁部）内・断面は浅黄橙色（7.5YR8/3）、外面は橙色（7.5YR7/6）、（体部）内・断面は褐灰色（7.5YR4/1）、外面は橙色（2.5YR6/8）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：小片。普通口縁で口縁端部は下方に垂下し1条の沈線を巡らす。文様は体部外面の頸部から胴部上半にかけて、2段の波状文と4段の簾状文を施す。体部下半部はヨコヘラミガキ調整を施している。体部内面には指頭痕がみられ、ナデ調整を施している。弥生時代中期中葉（Ⅲ様式）のものと思われる。（第14・21図-55、写真図版12-1-55、巻頭写真図版2-2）

56壺 口径：10.0cm（復元）。器高：3.8cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面は灰黄色（2.5Y7/2）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はタテヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代中期前葉（Ⅱ様式）のものと思われる。（第14・21図-56、写真図版12-1-56、巻頭写真図版2-2）

57壺 底径：7.0cm（復元）。器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.5～1.1cm。色調：内面は暗灰黄色（2.5Y5/2）、外面は黄灰色（2.5Y4/1）、断面は灰黄色（2.5Y7/2）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石・赤色鉱物をやや多く、直径4mm以下の花崗岩粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はタテヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代中期のものと思われる。（第14・21図-57、写真図版12-1-57、巻頭写真図版2-2）

58底部片 底径：7.8cm（復元）。器高：1.8cm（残存）。厚さ：0.6～0.9cm。色調：内・断面は黄灰色（2.5Y4/1）、外面は黒褐色（2.5Y3/1）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に煤が付着している。弥生時代中期のものと思われる。（第14・21図-58、写真図版12-1-58、巻頭写真図版2-2）

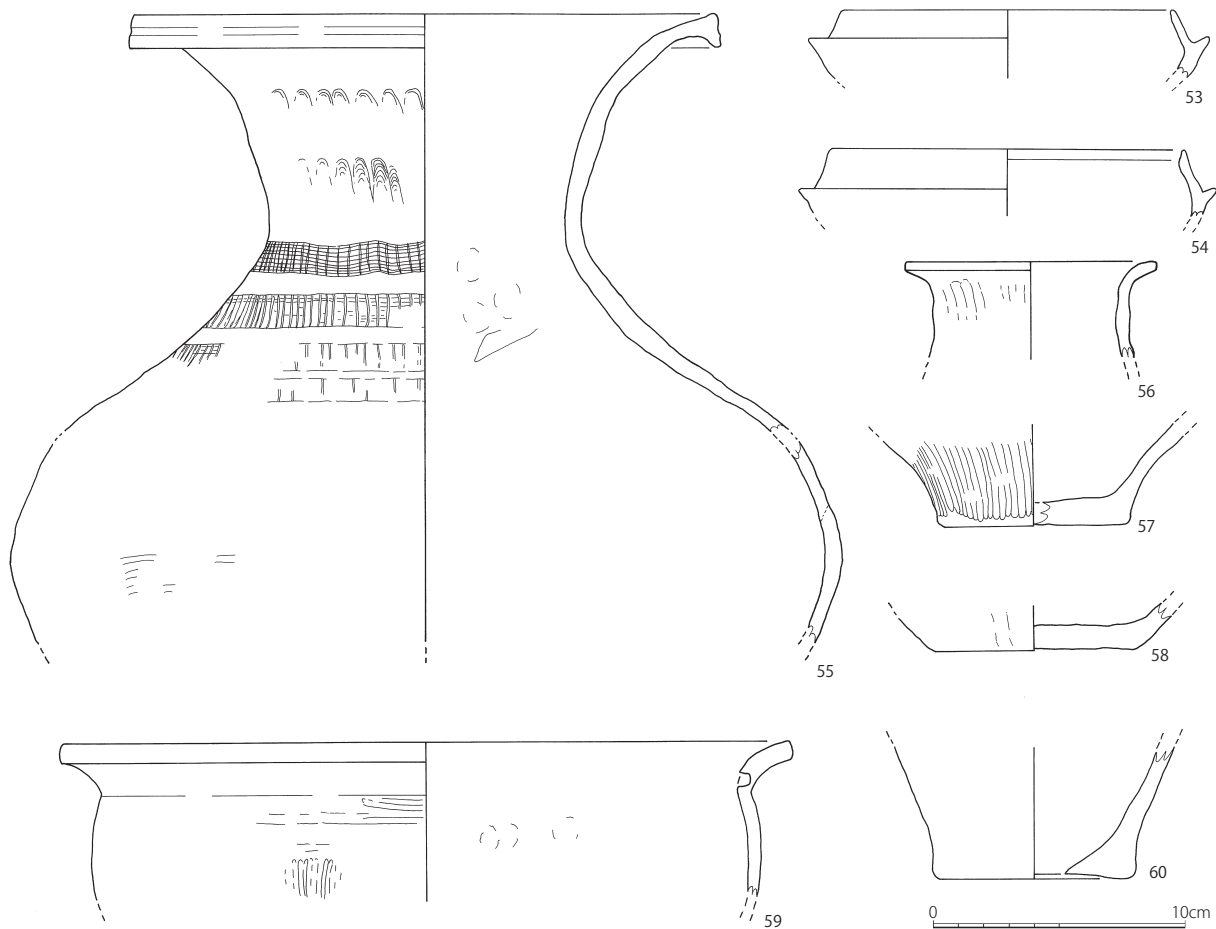
59甕 口径：28.8cm（復元）。器高：6.2cm（残存）。厚さ：0.4～0.7cm。色調：内・断面は浅黄色（2.5Y7/3）、外面は褐灰色（10YR4/1）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石・赤色鉱物を多く、直径5mm以下の花崗岩粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面の頸部はヨコヘラミガキ調整、体部外面はタテヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。孔が頸部内面の一か所に開けられているが、貫通しない。弥生時代中期前葉（Ⅱ様式）のものと思われる。（第14・21図-59、写真図版12-1-59、巻頭写真図版2-2）

60甕 底径：7.8cm（復元）。器高：5.2cm（残存）。厚さ：0.6～1.6cm。色調：内面はにぶい黄色（2.5Y6/3）、外・断面は浅黄色（2.5Y7/3）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石・雲母・黒色鉱物をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面はナデ調整を施している。弥生時代中期のものと思われる。（第14・21図-60、写真図版12-1-60、巻頭写真図版2-2）

溝17

弥生土器

61壺 最大長：8.0cm（残存）。最大幅：8.3cm（残存）。厚さ：0.5～0.8cm。色調：内・断面は褐灰色（10YR5/1）、外面は橙色（2.5YR6/6）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石・雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部の破片。体部外面はナデ調整後、上部には簾状文、下部



第21図 出土遺物 (第3遺構面4-1区・4-2区土坑28、NN2013-1)

には斜格子文を施文している。体部内面には指頭痕がみられ、ナデ調整を施している。弥生時代中期のもので、摂津・播磨など他地域系のものの可能性がある。(第13・22図-61、写真図版12-2-61、巻頭写真図版2-2)

62壺 最大長：10.9cm (残存)。最大幅：7.1cm (残存)。厚さ：0.5~0.8cm。色調：内・断面は褐灰色 (10YR4/1)、外面はにぶい黄橙色 (10YR7/4)。胎土：やや密。直径2mm以下の石英・長石・雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。壺の肩部の破片。体部外面はナデ調整後、上部には櫛描文、中央部には斜格子文を施文している。体部内面には指頭痕がみられ、ナデ調整を施している。弥生時代中期のもので、摂津・播磨など他地域系のものの可能性がある。(第13・22図-62、写真図版12-2-62、巻頭写真図版2-2)

63鉢 最大長：6.5cm (残存)。最大幅：7.2cm (残存)。厚さ：0.6~1.1cm。色調：内・外面はにぶい黄橙色 (10YR6/3)、断面は黒色 (10YR2/1)。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。鉢の口縁部の破片。口縁部には断面三角形の3条の突帯が巡る。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整を施している。弥生時代中期のもので、播磨など他地域系のものの可能性がある。(第13・22図-63、写真図版12-2-63、巻頭写真図版2-2)

溝30

弥生土器

64長頸広口壺 底径：6.5cm。胴径：19.6cm。器高：33.5cm (残存)。厚さ：0.4~0.8cm。色調：内・断面は暗灰黄色 (2.5Y 5/2)、外面は灰黄色 (2.5Y 7/2)。胎土：やや粗。直径3mm以下の石英・長

石・雲母・赤色鉱物・黒色鉱物を多く含む。焼成：良好。残存度：7/10。体部外面の文様は、頸部に等間隔に3段の櫛描文、胴部との境に1段の簾状文、肩部に等間隔に3段の櫛描文を施文している。体部外面下半部はタテヘラミガキ調整、体部内面上半部はナデ調整、下半部はタテハケ調整を施している。体部下半部付近の1箇所に直径4cm程度の焼成前の穿孔がみられる。体部外面の底部から胴部中央にかけて黒斑（黒褐色2.5Y3/1）がみられることから、焼成時にはこの部分を下にしていたと考える。弥生時代中期中葉（Ⅲ-1様式）のものと思われる。落込107から出土の破片と接合。（第14・22図-64、写真図版13-1-64、巻頭写真図版2-2）

65広口壺 口径：14.0cm（復元）。底径：6.8cm。胴径：21.7cm（復元）。器高：30.7cm。厚さ：0.5～2.0cm。色調：内面はにぶい赤褐色（5YR5/3）、外・断面は橙色（7.5YR7/6）、外面の一部は煤により黒褐色（7.5YR3/1）。胎土：粗。直径3mm以下の石英・長石・赤色鉱物・黒色鉱物を多量に含む。焼成：やや不良。残存度：3/5。体部外面はタテハケ調整、口縁部内面はヨコハケ調整、体部内面はナデ調整、底部内面はヨコハケ調整を施している。口縁部内面には繊維状と靱痕状の圧痕がみられ、底部外面には木葉痕がみられる。体部外面には二次被熱の痕跡と煤の付着がみられる。弥生時代中期前葉（Ⅱ-2～3様式）のものと思われる。（第14・22図-65、写真図版13-1-65、巻頭写真図版2-2）

66無頸壺 口径：10.6cm（復元）。底径：5.8cm。器高：18.0cm（復元）。厚さ：0.3～0.9cm。色調：口縁部内・断面は褐灰色（10YR4/1）、口縁部外面はにぶい黄橙色（10YR7/3）、底部内・外・断面は褐灰色（10YR4/1）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：1/3。体部外面はタテヘラミガキ調整、体部内面上部はタテヘラミガキ調整、下部はタテハケ調整を施している。弥生時代中期中葉（Ⅲ-1様式）のものと思われる。（第14・22図-66、写真図版13-1-66、巻頭写真図版2-2）

67鉢 口径：13.0cm（復元）。底径：6.4cm（復元）。器高：8.1cm。厚さ：0.4～1.1cm。色調：内面は灰黄色（2.5Y6/2）、口縁部外面は橙色（5YR7/6）、底部外面は浅黄橙色（10YR8/3）、断面は黄灰色（2.5Y4/1）。胎土：やや粗。直径1mm以下の石英・長石を多量に含む。焼成：やや不良。残存度：1/3。口縁端部は肥厚し若干垂下している。口縁部外面下には1単位当たり10条以上の2段の簾状文を施文している。体部外面下半部はタテヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。弥生時代中期中葉（Ⅲ-1様式）のものと思われる。落込107から出土の破片と接合。（第22図-67、写真図版13-1-67、巻頭写真図版2-2）

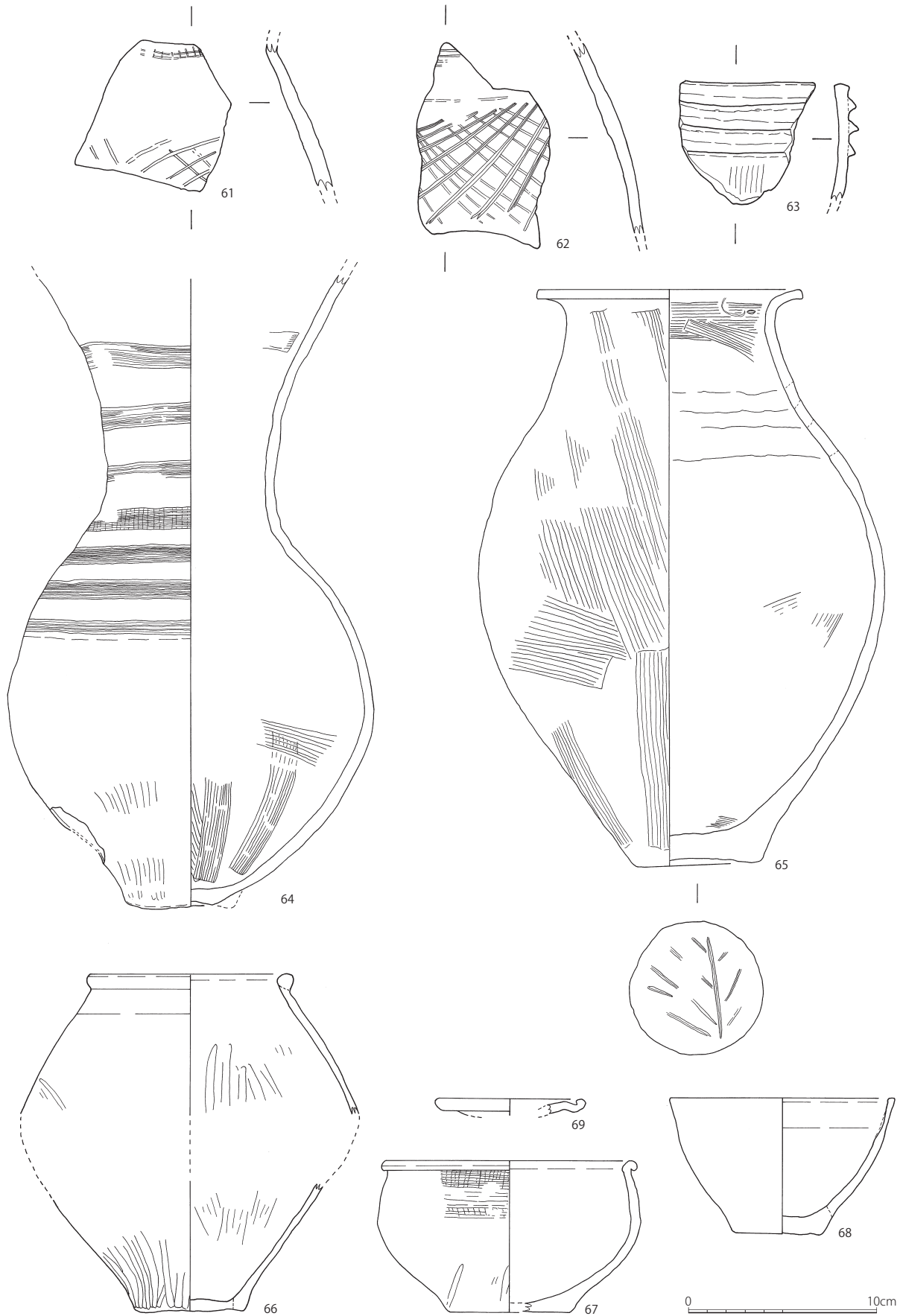
68鉢 口径：12.0cm（復元）。底径：4.8cm（復元）。器高：7.3cm。厚さ：0.2～1.2cm。色調：内面は黄褐色（2.5Y5/3）、外面はにぶい黄色（2.5Y6/3）。胎土：粗。直径3mm以下の石英・長石・黒色鉱物を多量に含む。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。底部外面に指頭痕がみられる。器形は弥生時代前期的であるが調整が異なる。（第14・22図-68、写真図版13-1-68、巻頭写真図版2-2）

溝75

土師器

69皿 口径：7.6cm（復元）。器高：0.8cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外面は橙色（7.5YR6/6）、断面は褐灰色（7.5Y4/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。B bタイプの「て」の字状口縁の皿。11世紀後半のものと思われる。（第22図-69、写真図版11-2-69）

（村上 始・實盛）



第22图 出土遺物 (第3遺構面4-2区溝17・30・75・落込107、NN2013-1)

第4章 中野遺跡（NN2012-1）調査の成果

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区は、調査前には大阪法務局四条畷出張所の跡地であった。調査地区は出張所時代に駐車場であった場所である。駐車場とするために0.3～0.85mほど盛土されており、その下層は約0.1～0.15mの耕土と約0.05～0.2mの床土が存在した。その下層は0.6mほど中世包含層が堆積し、その下層は0.47mほど古墳時代の包含層が堆積していた。その下層は黄橙色でしまりが強い粘質土層で、地山であり、その上面が古墳時代を中心とした遺構面であった。

以下、各土層の説明を述べる。

■調査地区東壁断面（第23図）

- 1 盛土
- 2 耕土
- 3 床土
- 4 にぶい黄色砂質土 2.5Y6/3 近世～中世
- 5 灰黄色砂質土 2.5Y7/2 近世～中世
- 6 灰黄色砂質土 2.5Y6/2 近世～中世
- 7 黄色砂質土 2.5Y7/8 近世～中世
- 8 明黄褐色砂質土 2.5Y6/6
- 9 灰白色砂質土 5Y7/1 中世
- 10 灰色砂質土 5Y4/1 古墳時代
- 11 黒褐色砂質土 10YR3/1 炭化物多く混入 古墳時代
- 12 黄橙色粘質土 10YR8/6 地山

（實盛）

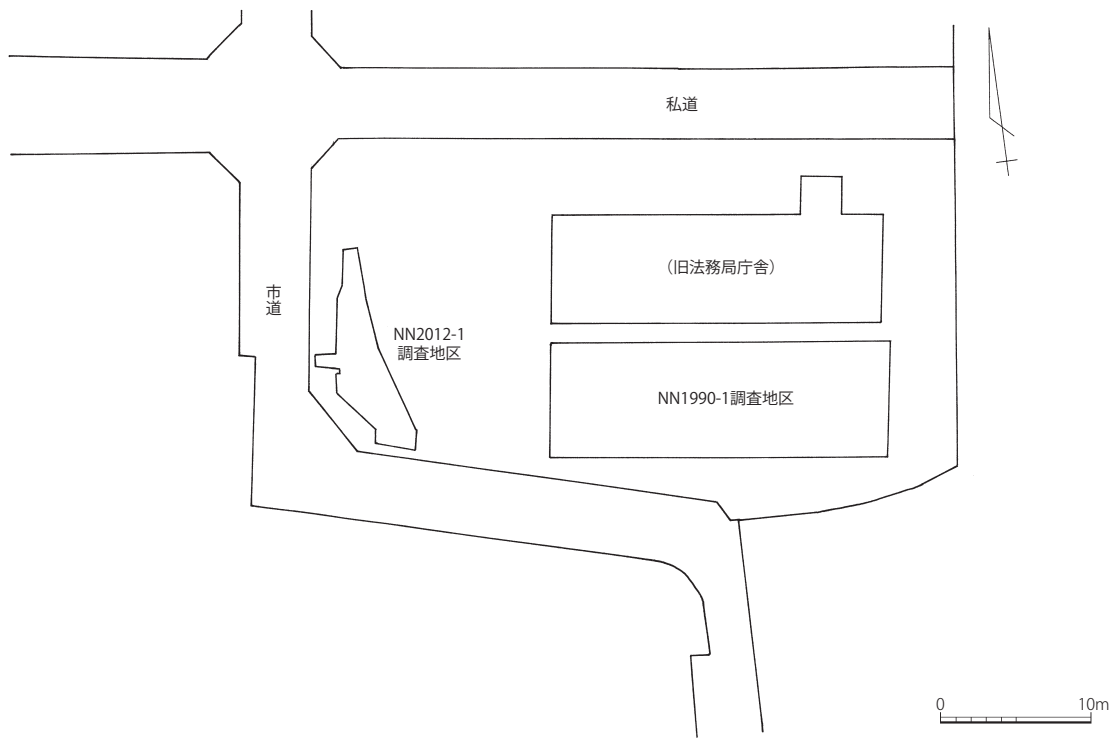
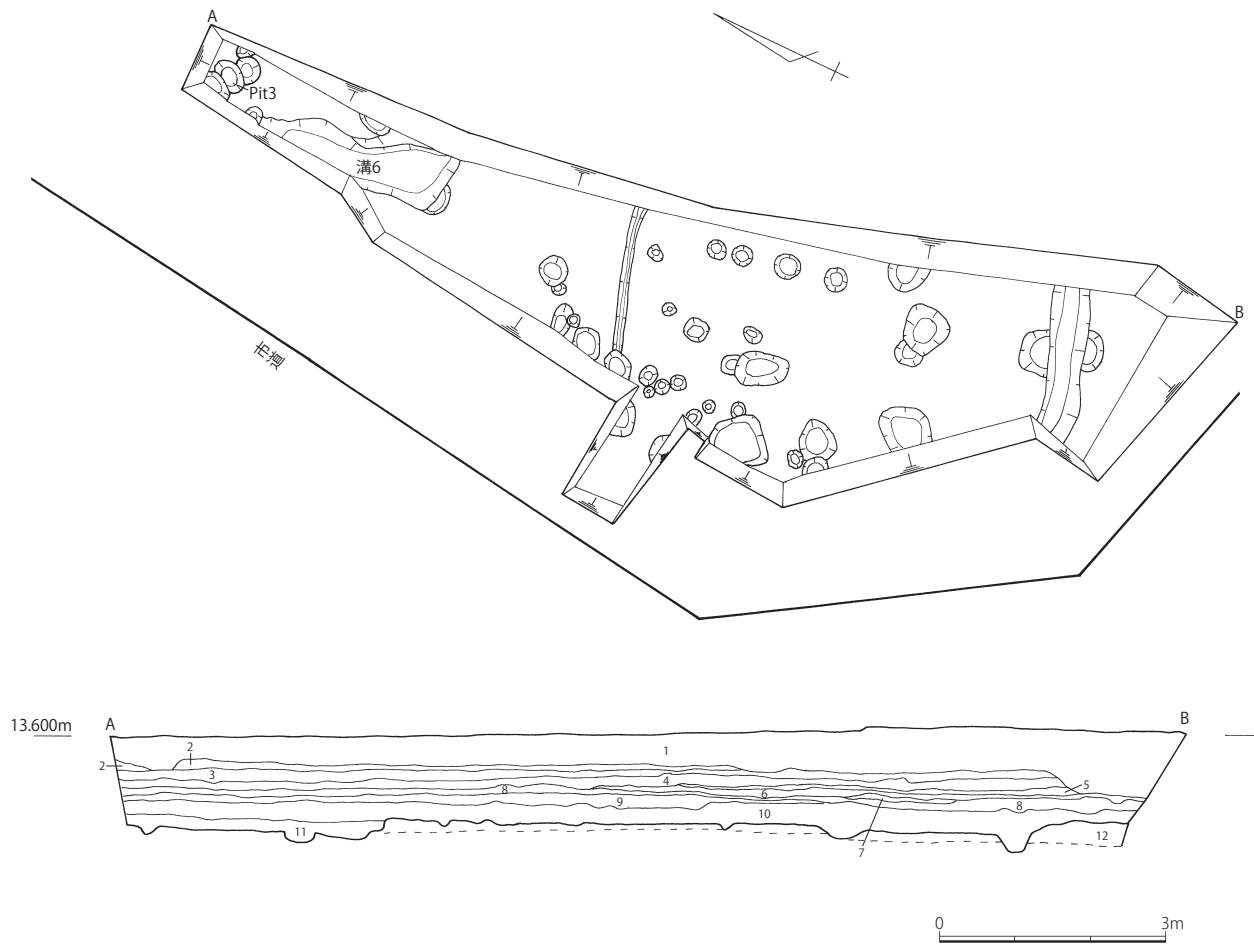
第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、多くが古墳時代の遺構で、溝3基、土坑2基、Pit40基の合計45基の遺構があった（第23図）。遺構面の標高は北端でT.P.+12.393m、南端でT.P.+12.293mであった。以下、遺物を掲載した主な遺構について遺構の種類ごとに詳述する。なお遺構の番号は、遺構の認識が変わった際の記録上の混乱を防止するため、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。

溝6 調査地区北側で検出した。南東から北西へと向いた溝で、両端は調査地区外に延びる。検出できた規模は長さ2.5m、幅0.7m、深さは約0.3mである。標高は北端部分の東側上端がT.P.+12.317m、西側上端がT.P.+12.375m、底部がT.P.+12.062mで、南端部分の東側上端はT.P.+12.371m、西側上端はT.P.+12.347m、底部はT.P.+12.143mであった（第23図・写真図版5-2）。土師器甕（第24図-74）・高坏（第24図-75）・製塩土器（第24図-76、77）などが出土した。

Pit3 調査地区北端で検出した（第23図・写真図版5-1）。遺構西側は別のPitにより切られている。東西0.28m、南北0.5mの楕円形を呈する。深さは約0.17mである。上端の標高はT.P.+12.375m、下端はT.P.+12.208mであった。土師器高坏（第24図-73）などが出土した。

（實盛）



第23図 調査地区平面図・断面図・配置図 (NN2012-1)

第3節 出土遺物

1. 遺物包含層内出土遺物

須恵器

70坏蓋 口径：15.0cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.2～0.9cm。色調：内・外・断面は青灰色（5B6/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。天井部の稜線は省略化している。口縁部内面にはわずかに内傾する段をもつ。Ⅱ型式3段階（MT85型式）6世紀後半のものと思われる。（第24図-70、写真図版14-1-70）

黒色土器

71碗 高台径：6.6cm（復元）。器高：1.6cm（残存）。高台高：0.7cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外面は黒色（N2/）、断面は灰色（N6/）。胎土：緻密。微細な石英をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。B類碗。内面のヘラミガキ痕は摩耗のため不明瞭である。高台は「ハ」の字状に開く輪高台。畿内系V類の11世紀代のものと思われる。（第24図-71、写真図版14-1-71）

72碗 高台径：7.6cm（復元）。器高：1.3cm（残存）。高台高：0.5cm。厚さ：0.4～0.6cm。色調：内・外面は灰色（N4/）、断面は灰白色（N8/）。胎土：緻密。微細な石英をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。B類碗。内面には密なヘラミガキ調整を施している。高台は「ハ」の字状に開く輪高台。畿内系V類の11世紀代のものと思われる。（第24図-72、写真図版14-1-72）

2. 遺構出土遺物

Pit 3

土師器

73高坏 底径：12.4cm（復元）。器高：3.8cm（残存）。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内・外・断面は橙色（5YR6/8）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒・雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はナデ調整を施している。脚部は大きく「ハ」の字状に開く。「ハ」の字状に開く付近の内外面には指頭痕がみられる。5世紀後半～6世紀代のものと思われる。（第24図-73、写真図版14-1-73）

溝6

土師器

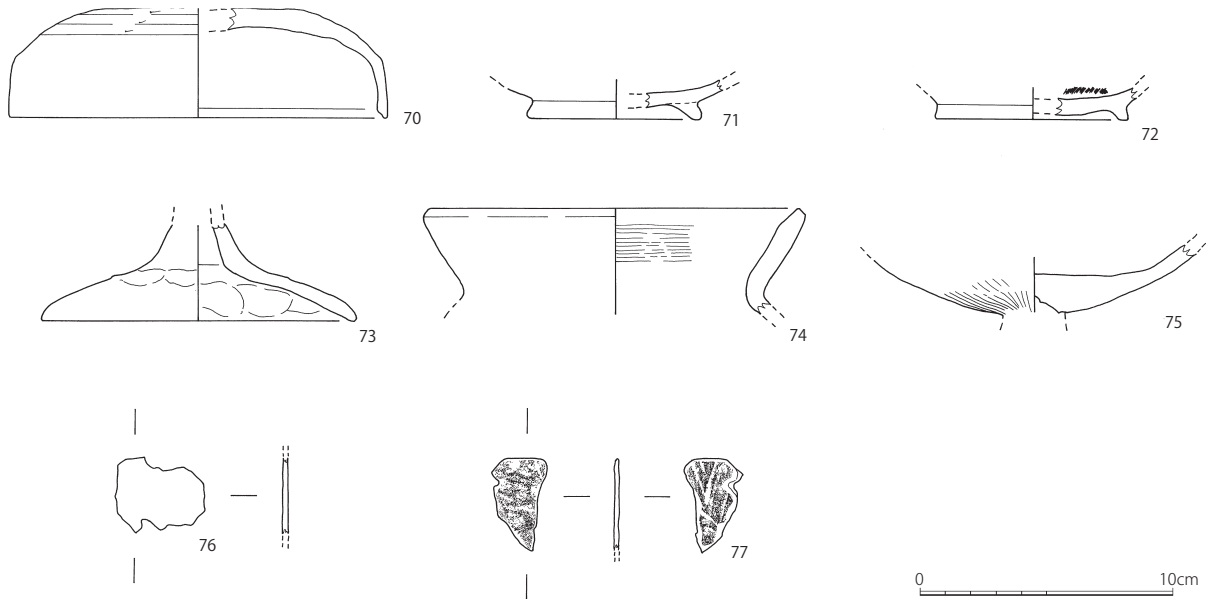
74甕 口径：14.6cm（復元）。器高：4.2cm（残存）。厚さ：0.6～0.8cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色（7.5YR8/6）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒と雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面と端部内面はヨコナデ調整・内面はヨコハケ調整を施している。5世紀後半～6世紀代のものと思われる。（第24図-74、写真図版14-1-74）

75高坏 脚との接合部径：2.4cm（復元）。器高：2.6cm（残存）。厚さ：0.5～1.5cm。色調：内・外・断面は橙色（5YR6/8）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。内外面はナデ調整を、外面の脚部との接合部分にはハケメ調整を施している。5世紀後半～6世紀代のものと思われる。（第24図-75、写真図版14-1-75）

76製塩土器 最大長：3.0cm（残存）。最大幅：3.6cm（残存）。厚さ：0.2cm。色調：内・外面は橙色（5YR7/6）、断面は灰色（N4/）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子と赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。外面は無文である。（第24図-76、写真図版14-1-76）

77製塩土器 最大長：3.7cm（残存）。最大幅：2.2cm（残存）。厚さ：0.2cm。色調：内・外面は橙色（5YR7/4）、断面は灰色（N4/）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子・赤色粒子と雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。外面には平行叩き調整が施されている。（第24図-77、写真図版14-1-77）

（村上・實盛）



第24図 出土遺物 (N N2012-1)

第5章 中野遺跡（NN1990-1）調査の成果

第1節 基本層序

発掘調査地区は、調査前には大阪法務局四条岨出張所の敷地であった。出張所建設のために0.7～1mほど盛土されており、その下層は約0.2mの旧耕土と約0.1mの床土が存在した。その下層は0.1mほど近世の包含層が堆積し、その上面と下面のそれぞれで近世の鋤溝群（2面）を検出した。その下層は0.2～0.4m中世の包含層が堆積し、その下面で中世の鋤溝群を検出した。その下層は部分的に古墳時代の包含層が堆積し、その下層が明黄褐色でしまりが強い土層で、地山であり、その上面が古墳時代を中心とした遺構面であった。

以下、各土層の説明を述べる。

■調査地区断面（第25図）

1 盛土	14 褐灰色粗砂層 10YR6/1
2 攪乱	15 緑灰色砂質土 5G5/1
3 耕土	16 灰色砂質土 N6/
4 床土	17 16層に9層が混入
5 赤褐色砂質土 10R4/4	18 灰白色砂層 7.5YR8/2
6 赤褐色砂質土 10R4/3	19 明褐色砂質土 7.5YR5/8
7 灰赤色砂質土 10R5/2	20 にぶい赤褐色砂質土 5YR5/3
8 灰赤色砂質土 10R6/2	21 明褐色砂質土 7.5YR5/6
9 橙色砂質土 7.5YR6/6	22 明青灰色砂質土 5GB7/1
10 灰褐色砂質土 7.5YR5/2	23 褐灰色砂質土 10YR6/1
11 にぶい黄色砂質土 7.5YR7/4	24 灰白色砂質土 10YR7/1
12 灰褐色砂質土 7.5YR7/2	25 灰褐色砂質土 7.5YR4/2
13 明黄褐色砂質土 10YR7/6	

（村上・實盛）

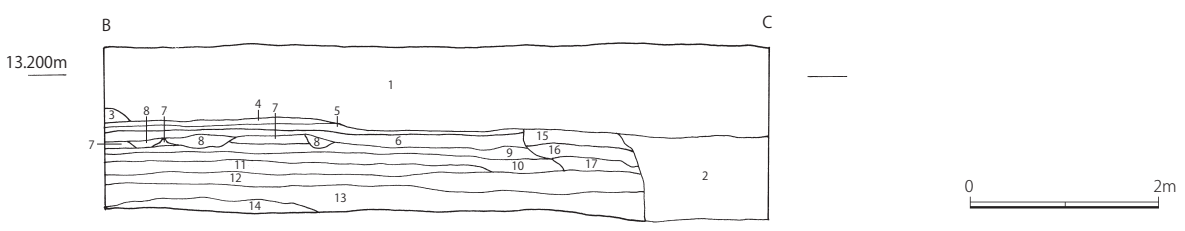
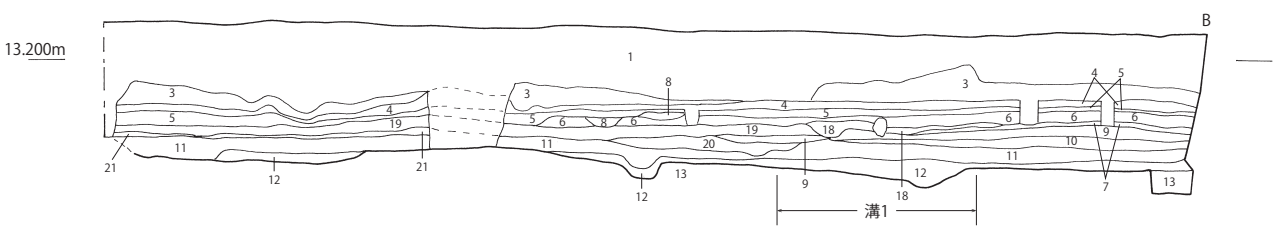
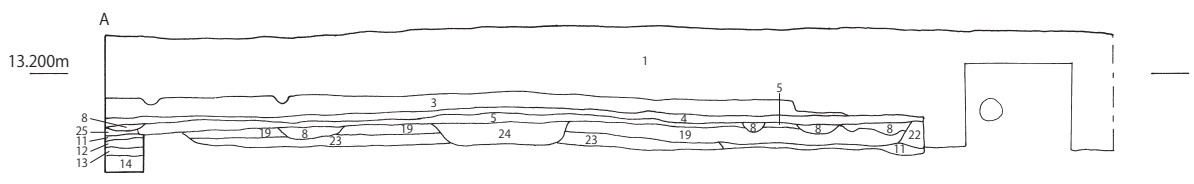
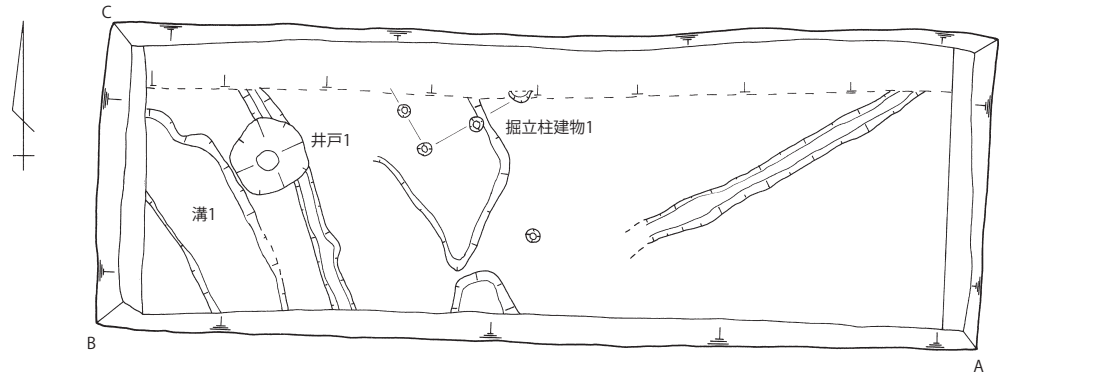
第2節 検出遺構

この調査で、古墳時代遺構面において確認した遺構は、溝3基、土坑2基、Pit5基、井戸1基の合計11基の遺構があった（第25図）。Pit5基のうち4基は掘立柱建物を構成する。この遺構面への掘削時の遺物包含層は古墳時代後期の遺物が中心であった（第26図-82）。遺構面の標高は東端でT.P.+12.983m、西端でT.P.+12.510mであった。以下、主な遺構について遺構の種類ごとに詳述する。

掘立柱建物1 調査地区中央北端で検出した（第25図・写真図版7-1）。この調査で検出したPit5基のうち4基により構成される。検出できた規模は1間以上×2間以上で、1.2m以上×3.0m以上を測る。長辺の柱間は1.50～1.58mである。Pitの掘形は直径0.33～0.65mのほぼ円形で、Pitの底部はT.P.+12.376～12.559mであった。出土遺物がなかったため厳密な時期は不明であるが、検出状況から溝1や井戸1と同時期である古墳時代中期の遺構と考える。

溝1 調査地区西端で検出した。南から西へと向いた溝で、両端とも調査地区外に延びる。検出できた規模は長さ約5m、幅約2m、深さは約0.3mである。標高は北端部分の東側上端がT.P.+12.463m、西側上端がT.P.+12.464m、底部がT.P.+12.229mで、南端部分の東側上端はT.P.+12.526m、西側上端はT.P.+12.497m、底部はT.P.+12.331mであった（第25図・写真図版7-1）。遺物は、須恵器の壺片と土師器片数点が出土した。

井戸1 調査地区の北西部、溝1の東側に接して検出した（第25図・写真図版7-1）。他の溝を切って掘り込まれており、規模は直径約2mのほぼ円形で、底部は直径約0.5mのほぼ円形を呈し、深さは約0.76mであった。上端の標高はT.P.+12.6079m、下端はT.P.+11.903mであった。土師器高坏（第26図-78、79）、土師器甕（第26図-80）、須恵器壺片などが出土した。（村上・實盛）



第25図 調査地区平面図・断面図 (NN1990-1)

第3節 出土遺物

1. 遺構出土遺物

井戸1

土師器

78高坏 口径：15.0cm（復元）。器高：6.4cm（残存）。厚さ：0.4～1.8cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色（7.5YR8/4）。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色砂粒・石英・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：坏部のみ1/3。坏部は平底から斜め上方に口縁部が開く形態である。内外面ともにナデ調整を施している。5世紀前半～中頃のものと思われる。（第26図-78、写真図版14-2-78）

79高坏 底径：11.0cm（復元）。器高：7.5cm（残存）。厚さ：0.4～1.6cm。色調：内・外・断面は橙色（5YR6/8）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：脚部のみ1/3。脚部の裾部分で大きく屈曲し「ハ」の字状に開く。外面はナデ調整が施されている。脚部と坏部の接合部外面にはナデ調整による指頭痕が、脚部の内面には粘土を絞った痕跡がみられる。5世紀前半～中頃のものと思われる。（第26図-79、写真図版14-2-79）

80甕 口径：14.6cm。器高：17.7cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内面は褐灰色（10YR5/1）、外面は浅黄色（2.5Y7/3）・浅黄橙色（10YR8/3）、断面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：やや粗。直径1～2mm以下の白色砂粒・赤色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。口縁内外面はヨコナデ調整、体部外面はハケ調整、体部内面はヘラケズリ調整を施している。布留式甕。4世紀末～5世紀初頭のものと思われる。（第26図-80、写真図版14-2-80）

須恵器

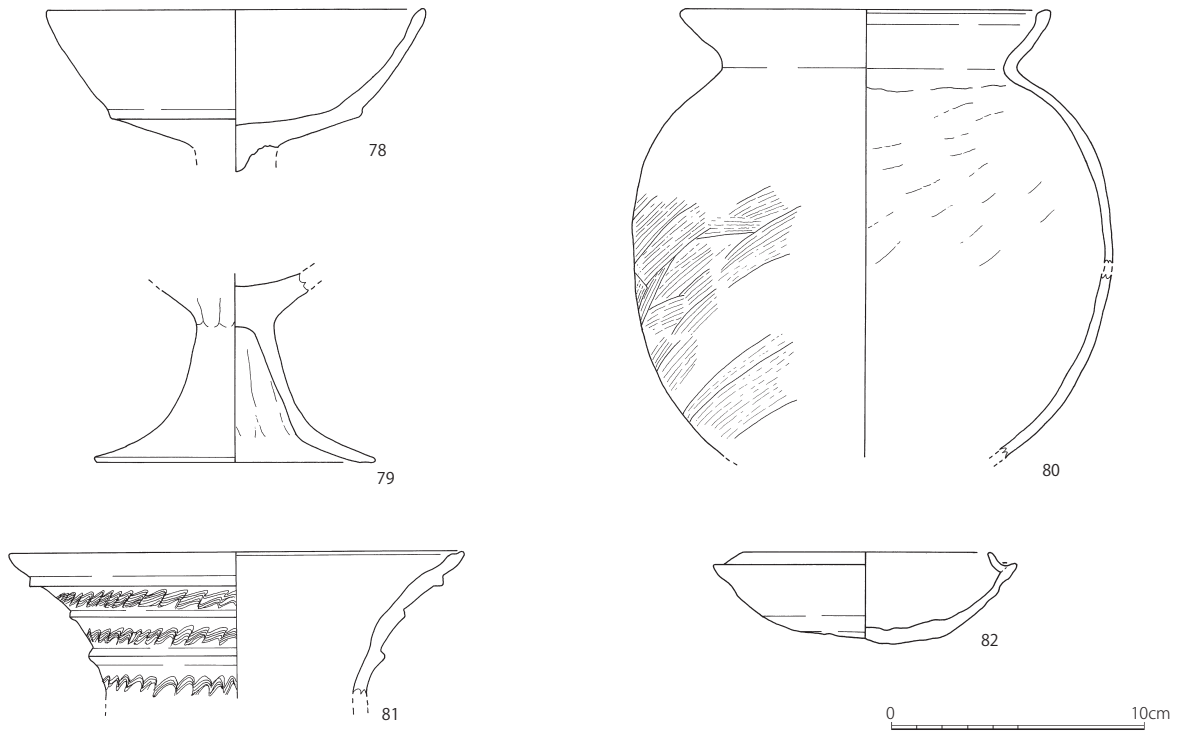
81広口壺 口径：18.0cm（復元）。器高：5.8cm（残存）。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内面は灰色（N6/）、外面は灰色（N5/）、断面は明褐灰色（7.5YR7/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部から頸部の外面には断面三角形の凸線を3か所巡らせ、その間には波状文を施している。口縁部内面には降灰による自然釉が掛かっている。I型式2段階（TK216型式）5世紀前半のものと思われる。井戸1もしくは溝1から出土。（第26図-81、写真図版14-2-81）

2. 遺物包含層内出土遺物

須恵器

82坏身 口径：9.8cm。器高：3.6cm。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内・外・断面は灰白色（N7/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：やや良好。残存度：1/2。II型式4段階（TK43型式）6世紀後半のものと思われる。（第26図-82、写真図版14-2-82）

（村上・實盛）



第26図 出土遺物 (N N1990-1)

第6章 調査のまとめ

第1節 調査のまとめ

今回報告した中野遺跡の3次にわたる調査では、これまで不明であった遺跡南西部の状況を確認することができ、弥生時代から中世にわたる多くの成果があった。以下、遺構・遺物の時期ごとにまとめを行なっていきたい。

中世 2013-1次調査の第1遺構面で、この時期の集落を検出した。数多くの遺構が密集しており、一定規模の集落が存在したとみられる。ここでは集落建設のために土を盛り整地を行なっている状況も確認することができた。それ以外では、2013-1次調査3区で溝を検出したほかは鋤溝群の検出が主であり、中世には耕作地として利用されていたとみられる。讃良郡条里遺跡など（後川ほか編2015）、大規模な調査により土地利用状況を検討できた例からみると、通常集落は微高地上に営まれることが多いが、ここでは集落建設のために微高地を作り出しているともいえる状況であった。調査地の西には隣接して江戸期に枚方街道、明治期に河内街道と呼ばれるようになった道があり、道沿いに集落を営むため、このような造成を行なった可能性も考えられるだろう。

平安時代 2013-1次調査第3遺構面で、この時期の集落と鋤溝群を検出した。集落と耕作地の境界付近を発掘できたとみられ、同時期の土地利用状況を検討することができる資料を蓄積することができたと考える。周辺では、1991-1次調査で、應保二年の墨書がある井戸枠や青白磁合子蓋などを出土した井戸や、青銅製巡方、長年大寶などを出土した溝などを含む平安時代のまとまった集落を検出しており、出土遺物からは重要施設の存在も想定される（村上2003、四條畷市史編さん委員会編2016）。今回検出した、井戸3基を含む集落も、1991-1次調査検出の集落と、一連かもしくは何らかの関連がある可能性が考えられるだろう。

古墳時代 1990-1次調査で、古墳時代中期の遺構をまとめて検出した。井戸や掘立柱建物の検出から、まとまった集落が古墳時代中期でも前半の段階から存在していたことが明らかにできると言えるだろう。2012-1次調査で検出した溝6は、1990-1次調査で検出した溝1と、その配置からみると一連のものである可能性が考えられる。このことから、2012-1次調査で検出した集落と1990-1次調査で検出した集落とは同一の集落である可能性が極めて高い。集落廃絶後に堆積した遺物包含層出土の遺物が、古墳時代後期が中心であったことから考えると、この集落はおおよそ古墳時代中期を中心として存在した集落であった可能性が考えられるだろう。その集落の性格を考える資料としては、2012-1次調査の溝6から出土している製塩土器があげられる。四條畷市内では古墳時代中・後期の集落で製塩土器の出土が多く、奈良井遺跡では石敷製塩炉も検出している（野島1979b）。これらは市域で広く行なわれた馬飼いに伴うことが指摘されており（野島1984b）、今回出土した製塩土器も同様である可能性が高い。周辺での馬骨の出土は5世紀初頭からすでにみられ（中尾ほか編2009）、今回の集落も市域に広がる古墳時代中期の馬飼い集落の一つとして位置付けることができるだろう。

この時期の特異な遺物としては、2013-1次調査で出土した耳環があげられる。出土した溝は西流する中世の溝とみられるが、その上流方向には1993-1次調査で検出した古墳や（四條畷市史編さん委員会編2016）、山裾の古墳群である大上古墳群（村上・實盛編2017）が存在する。これらの古墳群は、その大半が平安時代に削平されたことが判明している。この耳環は、これら山裾に存在した古墳群の副葬品であったものが、平安時代の削平により流出し、中世の溝に包含されたと考えられる。

弥生時代 2013-1次調査第3遺構面で、弥生時代中期の遺構をまとめて検出した。これまで中野遺跡では、後期の土器が出土している（野島1986b）ほかは明確な弥生時代の遺構は検出されておらず、弥生時代の土地利用が中野遺跡まで広がることを初めて明らかにできた意義は大きい。検出した遺構は溝が中心であったが、その配置から考えると、主体部等は未発見であるが方形周溝墓群である可能性があるもので、近隣の雁屋遺跡（野島1994a）や鎌田遺跡（野島1994b）に加え、中野遺跡にも墓域が広がっている可能性があることを指摘することができた。今後の調査で、弥生時代の周辺の状況についてもさらに明らかにしていきたい。

（實盛）

参考文献

- 後川恵太郎・實盛良彦・井上智博編2015『讚良郡条里遺跡』四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
- 阿部幸一1999『雁屋遺跡発掘調査概要』IV、大阪府教育委員会。
- 井上智博・多賀晴司編2003『讚良郡条里遺跡』その2、財団法人大阪府文化財センター。
- 井上智博編2008『讚良郡条里遺跡』VI、財団法人大阪府文化財センター。
- 岩瀬 透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編2010『部屋北遺跡』I、大阪府教育委員会。
- 岩瀬 透編2012『部屋北遺跡』II、大阪府教育委員会。
- 梅原末治1937「河内四條畷村忍岡古墳」『日本古文化研究所報告』第4、日本古文化研究所。
- 梅原末治1985『銅鐸の研究』木耳社。
- 大賀克彦2002「古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会。
- 大阪府教育委員会編1970『四條畷町、正法寺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会。
- 片山長三1967a「枚方台地の先土器時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 片山長三1967b「縄文時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 木下保明編2004『小路遺跡（その3）』（財）大阪府文化財センター。
- 黒須亜希子編2004『高宮遺跡（その2）』（財）大阪府文化財センター。
- 黒田 淳1989「飯盛山城跡の調査」『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988年度、大東市教育委員会。
- 黒田 淳1997『北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
- 黒田 淳2013『飯盛山城遺跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
- 古代の土器研究会編1992『都城の土器集成』古代の土器研究会。
- 古代の土器研究会編1993『都城の土器集成』II、古代の土器研究会。
- 近藤章子・山本雅和・多賀晴司編2006『讚良郡条里遺跡』IV、財団法人大阪府文化財センター。
- 佐伯博光・六辻彩香編2007『讚良郡条里遺跡』V、財団法人大阪府文化財センター。
- 櫻井敬夫1972「考古学」『四條畷市史』第1巻、四條畷市役所。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2006『こども歴史 わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2010『歴史とみどりのまち ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
- 四條畷市教育委員会編2002『みどりの風と古墳』第17回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 四條畷市教育委員会編2004『馬と生きる』開館20周年記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 四條畷市教育委員会編2008『ひとつぶの粉』第23回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 四條畷市史編さん委員会編2016『四條畷市史』第5巻考古編、四條畷市。
- 瀬川芳則1992「最古の木製下駄」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV、同刊行会。
- 大東市北新町遺跡調査会編1991『北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
- 大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013『飯盛城跡縄張測量図』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店。
- 中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社。
- 辻本 武1987『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
- 寺沢 薫1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会。
- 寺沢 薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年』近畿編I、木耳社。
- 中尾智行・山根 航編2009『讚良郡条里遺跡』VIII、財団法人大阪府文化財センター。
- 中村 浩2001『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
- 西尾 宏1987『中野遺跡発掘調査概要』IV、四條畷市教育委員会。
- 西尾 宏1988『中野遺跡発掘調査概要』V、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1977「四條畷市中野遺跡」『まんだ』第2号、まんだ編集部。
- 野島 稔1978a『中野遺跡発掘調査概要』I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1978b「南山下遺跡」『まんだ』第5号、まんだ編集部。
- 野島 稔1978c「大阪府四條畷市発見の製塩土器」『古代学研究』第86号、古代学研究会。
- 野島 稔1979a「岡山南遺跡出土の古代下駄」『まんだ』第8号、まんだ編集部。
- 野島 稔1979b「大阪府下における製塩土器出土遺跡」『ヒストリア』第82号、大阪歴史学会。
- 野島 稔1980a「清滝古墳群発掘調査概要」四條畷市文化財研究調査会。
- 野島 稔1980b「四條畷市奈良井遺跡（2）」『まんだ』第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔1980c「四條畷市奈良田遺跡」『まんだ』第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔1981『更良岡山古墳群発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1982『岡山南遺跡発掘調査概要』II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1983『忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要』II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1984a『雁屋遺跡発掘調査概要』I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1984b「河内の馬飼」『万葉集の考古学』筑摩書房。
- 野島 稔1985「四條畷市南野米崎遺跡」『まんだ』第24号、まんだ編集部。
- 野島 稔1986a『四條畷市埋蔵文化財発掘調査概要—1985年度—』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1986b『中野遺跡発掘調査概要』III、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987a『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987b『岡山南遺跡発掘調査概要』IV、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987c「四條畷市、南山下遺跡出土の馬形埴輪」『まんだ』第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔1987d「四條畷市南山下遺跡」『まんだ』第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔1987e「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』I、韓式系土器研究会。
- 野島 稔1988「四條畷市“南山下遺跡”」『まんだ』第35号、まんだ編集部。

- 野島 稔1990「四條畷市・中野遺跡」『まんだ』第39号、まんだ編集部。
- 野島 稔1991「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅲ、韓式系土器研究会。
- 野島 稔1992「四條畷市・大上遺跡」『まんだ』第47号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993a「四條畷市忍ヶ丘駅前遺跡」『まんだ』第49号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993b「四條畷市鎌田遺跡（一）」『まんだ』第50号、まんだ編集部。
- 野島 稔1994a「雁屋遺跡発掘調査概要—四條畷市江瀬美町所在—」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1994b「四條畷市鎌田遺跡（二）」『まんだ』第51号、まんだ編集部。
- 野島 稔1994c「四條畷市・四條畷小学校内遺跡」『まんだ』第53号、まんだ編集部。
- 野島 稔1995『南野遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1996a『四條畷市坪井遺跡』『まんだ』第57号、まんだ編集部。
- 野島 稔1996b「鍛冶工房のある風景」『まんだ』第58号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997a「五絃の琴」『まんだ』第60号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997b「四條畷市更良岡山遺跡（一）」『まんだ』第62号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997c「はにわはともだち」第12回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 野島 稔1999「四條畷市大上古墳群」『まんだ』第66号、まんだ編集部。
- 野島 稔編2000『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔編2006『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔2008「王権を支えた馬」『牧の考古学』高志書院。
- 野島 稔2009「河内湖東岸における古墳と古代豪族の動向」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也1976『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也1977『正法寺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・前田 暢1984『岡山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始1999『正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2000『奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2001『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2002『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始・實盛良彦2012『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 原田昌則・尾崎良史2014『考古資料からみる八尾の歴史』公益財団法人八尾市文化財調査研究会。
- 平尾兵吾1931『北河内史蹟史話』（1973年増補再刊）。
- 松岡良憲1987『中野遺跡発掘調査概報』四條畷市教育委員会。
- 宮崎泰史・藤永正明編2006『年代のものさし』大阪府立近つ飛鳥博物館。
- 宮野淳一1992『更良岡山遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
- 三好 玄・杉本厚典・野島 稔・深澤芳樹2007「弥生時代後期周溝状遺構に伴う土器群」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号、財団法人大阪市文化財協会。
- 六辻彩香編2006『小路遺跡』Ⅲ、(財)大阪府文化財センター。
- 村上 始1997a『木間池北方遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 村上 始1997b『忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 村上 始2000『四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001a『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001b『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001c「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『月刊考古学ジャーナル』No.470、ニュー・サイエンス社。
- 村上 始2001d「四條畷市鎌田遺跡」『まんだ』第71号、まんだ編集部。
- 村上 始2001e「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『祭祀考古』第21号、祭祀考古学会。
- 村上 始2001f「四條畷市雁屋遺跡」『まんだ』第73号、まんだ編集部。
- 村上 始2003a『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始2003b「大阪・中野遺跡」『木簡研究』第25号、木簡学会。
- 村上 始2004『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始2006『一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2011「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿弥生の会第14回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
- 村上 始・實盛良彦2013a『中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2013b『北口遺跡・讃良郡条里遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2014『四條畷市文化財調査年報』第1号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2016『四條畷市文化財調査年報』第3号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦編2013『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦編2017『四條畷市文化財調査年報』第4号、大上遺跡（大上古墳群）、四條畷市教育委員会。
- 山口 博編1972『四條畷市史』第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博1990『四條畷市史』第4巻、四條畷市役所。

付章1 北河内における弥生から古墳へ

～墓制を中心として～

前言

中野遺跡の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓を構成する可能性がある溝を検出した。これに関連し、本章では平成25年11月16日に大阪府立弥生文化博物館スポット展示（イオンモール四條畷建設地の調査成果展示）に伴い行われた講演会『最新報告 讃良郡条里遺跡の弥生時代』において行なった、北河内の弥生時代から古墳時代にかけての墓制についての講演記録を掲載する。

1. はじめに

北河内地域は、大阪府の北東部に位置していて、枚方市・交野市・寝屋川市・四條畷市・大東市・門真市・守口市から成っています。北西は北摂地域に接していて、その境目を淀川が西流しています。北東は京都府と接し、石清水八幡宮が山のすぐ向こう側にあります。東は生駒山系を境に奈良県と接しています。西は大阪市と、南は中河内地域と接しています。

讃良郡条里遺跡は、四條畷市と寝屋川市にまたがる遺跡です。その調査成果と弥生時代の周辺遺跡については、ここまでの講演で詳しく話がなされました。讃良郡条里遺跡の今回の調査では、弥生時代から古墳時代へと、途切れなく遺跡が利用されていたことが分かりました。ここでは北河内地域における弥生時代から古墳時代へのうつりかわりについて、お墓という視点から考えていき、讃良郡条里遺跡の今回の調査成果を位置づけてみたいと思います。

2. 弥生時代の墓制

弥生時代のお墓として、門真市の古川遺跡では、弥生時代前期末から中期初頭（約2200年前）の時期の方形周溝墓（周りに四角い形に溝を掘って中央に掘った土を積み、その部分に墓穴を掘るお墓）が10基以上みつかっています。この方形周溝墓は一辺が約8mありました。土を盛り上げて作るお墓としては北河内で最も古いものです。

四條畷市の雁屋遺跡や鎌田遺跡では、弥生時代中期（約2100年前）の同じような方形周溝墓がみつかっています。このうち雁屋遺跡のものは一辺が13m程のものが複数みつかっています。そのうち2基からは合計20基の埋葬施設がみつかっていて、非常に木棺の残りが良く、埋葬されていた人骨も出土しています。木棺にはコウヤマキが使われていて年輪を使った年代測定が行われており、紀元前134年頃の伐採の可能性が高いとされています。この方形周溝墓の周溝から出土した土器には、水銀朱が塗られているものがありました。また、木製の蓋付四脚容器もみつかっていて、その蓋にも水銀朱が塗られていました。

別の調査地では同じような方形周溝墓のまわりの溝から木製のタンカと鳥形木製品がみつかっています。いずれも葬儀（葬送儀礼）の際に使用したものとみられます。当時は鳥が魂を天に運ぶ存在とされていたようで、このような鳥の木製品が用いられたとみられます。

鎌田遺跡でも一辺10m程のものが5基みつかっていて、そのうちの1基からは木棺がみつかりました。

こういった方形周溝墓はほかに枚方市の楠葉野田西遺跡、交北城ノ山遺跡、招提中町遺跡、星丘西遺跡、アゼクラ遺跡や寝屋川市大尾遺跡などで弥生時代中期のものが、枚方市の茄子作遺跡などで弥生時代後期のものがみつかっています。このような方形周溝墓は、特に雁屋遺跡などでは特徴的でしたが、特定の人物のためにつくられたお墓ではなく、家族などが葬られる集団墓という意味合いの強いものでした。

3. 古墳時代への胎動

このように、弥生時代には方形周溝墓という家族等が集団で葬られるお墓が造られました。そうした中で、少しずつ、個人のためにつくられるお墓というのが現れてきます。弥生時代中期の寝屋川市

大尾遺跡では、方形周溝墓に葬られた人の中で棺の中に水銀朱がまかれたものがみついています。他の棺ではこのような跡はみつかっていないので、この人物は何らかの特別扱いをされ、朱がまかれた可能性があります。

枚方市の鷹塚山遺跡や星丘西遺跡、中宮ドンバ遺跡では、弥生時代後期から終末期ごろにかけての時期のもので、方形や円形の墳丘を持っていたり、大きな棺を用いていて、鉄製の武器などの副葬品を持っているような墓がみついています。これらの遺跡では、葬られた被葬者は明らかに特別扱いされていて、その地域で権力をもった有力者の墓の可能性があります。

寝屋川市の小路遺跡では、一辺数mから10m前後の方形周溝墓群がみつかりましたが、その中に1基、方形の墓にさらに突出部がついた前方後方形の墓がありました。この墓は上の部分が削られていて人が葬られていた部分はみつかりませんでした。全長が22.7mあります。このような墳丘の形をしたお墓は、弥生時代から古墳時代へと移り変わる時期に生み出されたものです。この遺跡は古墳時代前期初頭（約1750年前）の時期にあっており、北河内地域における弥生時代から古墳時代への転換を示す遺跡の一つです。

4. 古墳時代前期の北河内

このようにして突出した権力をもつ特定の人物のために大きな墳丘を持つお墓が造られるようになり、古墳時代を迎えます。その過程では、奈良県にあったであろう王権の中核とのかかわりで様々な動きがあったことでしょう。

讚良郡条里遺跡の今回の調査では、古墳時代前期（約1750～1600年前）にも集落が営まれていたことが分かっています。古墳時代前期の集落は、東西にのびる土地の高まり（微高地）上に営まれており、建物跡や土坑、井戸などがみつかりました。みつかった集落は遺構が密集しており、何度か建物が立て替えられた可能性があります。

北河内で、現時点で最も古い古墳と言えるのが、交野市にある森古墳群の鍋塚古墳です。この古墳は全長67mあって、前方後方墳という形のお墓です。この次に続くのが雷塚古墳で、これは全長が106mあります。これらの古墳を含め、森古墳群にはわかっているだけでも6基の古墳があり、継続してこの地域に有力者がいたことが想定されます。また、この古墳群では北河内の他の地域とは異なりそのほとんどが前方後方墳である可能性が指摘されていて、大和（奈良県）の王権中核との関係が注目されます。

枚方市域には三つの特筆すべき前期古墳があります。禁野車塚古墳は、全長約120mの前方後円墳です。これまでに墳丘の形が詳細に測量された結果、奈良県の箸墓古墳と同じ形をしていることが指摘されています。墳丘の長さではわかっている中で北河内最大の大きさを誇る古墳です。

万年寺山古墳は、墳丘の形はわかりませんが、現在の意賀美神社境内で明治37年に工事中に発見され、三角縁神獣鏡7面を含む9面の鏡などがみつかりました。銅鏡の出土面数が突出していて、その内容は北河内でわかっている中では随一のものでした。

牧野車塚古墳は、全長107.5mある前方後円墳です。以前はもっと新しい古墳時代中期のものと考えられることが多かったのですが、近年の発掘調査で古墳時代前期の古墳であることがわかってきました。その規模は禁野車塚古墳に次ぐ大きさです。

今回の讚良郡条里遺跡の調査地から最も近い位置にあるのが四條畷市にある忍岡古墳です。調査地から東に1kmの位置にあります。古墳は全長87mの前方後円墳です。主体部の竪穴式石室（竪穴式石槨）は盗掘されていましたが、昭和10年の京都大学による調査で鍬形石や紡錘車などの石製品や、鉄剣、鉄鎌、小札片などが出土しました。墳丘の規模や残されていた副葬品の内容から、この地域を治めていた有力者の墓であると考えられます。これまで、忍岡古墳の被葬者を支える基盤となった集落はみつかっていませんでした。今回みつかった集落は古墳から約1kmと近い距離にあり、この集落が忍岡古墳の被葬者を経済的にも築造の面でも支えた集落であったと考えられます。

忍岡古墳の周辺に位置する古墳時代前期集落としては、今回みつかった讚良郡条里遺跡の集落の他に、讚良郡条里遺跡のうち寝屋川市域でみつかった集落などがあり、これらの集落が忍岡古墳の被葬者を支えた集落であったとみることが出来るでしょう。

5. おわりに―北河内における弥生から古墳へ―

このように、北河内地域での弥生時代から古墳時代への流れについて、お墓という視点から概観してきました。弥生時代の前期末以来、北河内地域では方形周溝墓という型式のお墓がつくられてきました。それが、弥生時代でも後半期になるとだんだんと有力者のための墓がみられるようになり、古墳時代前期になって全長100mを超えるような大きな墓が造られました。それらはその地域を治めたであろう有力者の墓と考えられ、枚方市域、交野市域、四條畷市域にはかなりの大きさをもった古墳が造られたことをみてきました。北河内という大阪のほんの一地域に過ぎない範囲のなかでも、弥生時代から古墳時代への時代の流れについてかなり詳しく追うことができることを、みていただけたかと思えます。

(實盛)

主用参考文献

- 宇治原靖泰ほか編1999『古川遺跡』門真市教育委員会。
梅原末治1937「河内四條畷村忍岡古墳」『日本古文化研究所報告』第4、日本古文化研究所。
大竹弘之・田中秀和1989「中宮ドンバ遺跡」『枚方市文化財年報』IX、財団法人枚方市文化財研究調査会。
香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館編2008『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』。
木下保明編2004『小路遺跡(その3)』(財)大阪府文化財センター。
財団法人大阪府文化財センター編2005『北河内発掘! 緑立つ道に歴史わきたつ』。
財団法人交野市文化財事業団編2009『北河内の古墳』。
四條畷市教育委員会編2002『みどりの風と古墳』第17回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編2006『こども歴史 わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市教育委員会編2011『魂はどこへ』第26回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
下村節子ほか2009『図録 考古資料でみる枚方の歴史2009』財団法人枚方市文化財研究調査会。
下村節子・野島稔編1996『図説・北河内の歴史』郷土出版社。
西田敏秀・荒木幸治2000「淀川左岸地域における弥生集落の動態」『みずほ』第32号、大和弥生文化の会。
寝屋川市教育委員会編2004『邪馬台国と北河内』歴史シンポジウム資料。
寝屋川市教育委員会編2009『古墳出現前夜の北河内』歴史シンポジウム資料。
寝屋川市教育委員会編2010『緑立つ道の遺跡たち』歴史シンポジウム資料。
枚方市教育委員会・(財)枚方市文化財研究調査会編2009『交野ヶ原の前期古墳』歴史シンポジウム資料。
真鍋成史編2007『交野市の埴輪』交野市教育委員会。
六辻彩香編2006『小路遺跡』Ⅲ、(財)大阪府文化財センター。

付章2 持統天皇と四條畷

前 言

中野遺跡では、古墳時代馬飼い集落の一部を検出した。これに関連し、本章では、四條畷市立歴史民俗資料館第32回特別展「鷓野讚良皇女 ―持統天皇と北河内の飛鳥・奈良時代―」に伴い、平成29年10月12日に歴史民俗資料館で行なった講演記録を掲載する。

1. はじめに

第41代天皇である持統天皇は、四條畷とかかわりの深い天皇でした。そのことは、数々の文献や発掘調査資料を紐解くことで、想定することができます。この講演では、それらの資料を概観しながら、天皇と四條畷の関係について考えたいと思います。

2. 持統天皇のあゆみ

持統天皇と四條畷の関係を考える前に、まず天皇自身のことについて知っておきたいと思います。持統天皇の人生や業績については、『日本書紀』と、それに続く歴史書である『続日本紀』から知ることができます(直木1960)。それらの記述によれば、持統天皇の生まれは大化元年(645)のことです。天皇は名を鷓野讚良皇女といます。父は中大兄皇子、母は蘇我倉山田石川麻呂の娘、遠智娘でした。父はこの年、乙巳の変で蘇我蝦夷・入鹿父子を滅ぼし、その後大化の改新として政治改革を主導していました。母方の祖父である蘇我倉山田石川麻呂はその政権で右大臣に任じられ、政権の中枢にいました。

大化五年(649)、石川麻呂は、讒言により中大兄皇子に謀反を疑われました。彼は本拠地で建設中だった氏寺の山田寺で自殺します。しかし『日本書紀』によれば、没収された私財には「皇太子(中大兄皇子)の物」とあり、冤罪でした。この事件以来、母遠智娘は気を病み、白雉三年(652)頃亡くなりました。

657年、鷓野讚良皇女13歳の時、父の同母弟である大海人皇子の妃となりました。二人の間には662年に草壁皇子が生まれました。この年、父中大兄皇子は斉明天皇の崩御により政治を執り始め、668年には天智天皇として即位しました。しかし父は671年に崩御し、夫大海人皇子は出家して吉野へ向かいました。妻である持統天皇もそれに従ったようです。

翌672年に起こった壬申の乱に勝利した大海人皇子は、673年に天武天皇として即位し、鷓野讚良皇女は皇后になりました。天武天皇即位後、皇后となった鷓野讚良皇女は天皇を支えます。天皇は、飛鳥浄御原令の制定、八色の姓の制定や、銅銭使用の詔(富本銭)などをはじめ、多くの新しい制度を打ち立てました。

天武九(680)年には、皇后が病気になったので、天皇は病気が治ると薬師寺建立を誓願しました。これが本薬師寺で、その甲斐あってか皇后は快復しました。

朱鳥元(686)年に天武天皇が、3年後に皇太子草壁皇子が亡くなると、鷓野讚良皇女は翌690年に即位しました(持統天皇)。天皇は天武天皇の政治を引き継ぎ、694年には初の都城制を敷いた藤原京(新益京)に遷都しました。

持統天皇は、697年に孫の軽皇子(文武天皇)に位を譲り、史上初の太上天皇(上皇)となりました。この後も天皇を支え、701年に曾孫の首皇子(後の聖武天皇)の誕生を見届けて、翌大宝二(702)年に亡くなりました。

大宝三(703)年、持統天皇は天皇として初めて火葬され、夫天武天皇の墓に合葬されました。これが天武・持統天皇陵(檜隈大内陵・野口王墓古墳)です。この陵墓は鎌倉時代に盗掘され、事の顛末が「阿不幾乃山陵記」に記録されました。そこには墳丘が八角形であると記述がありました。昭和36年に宮内庁が行なった調査で実際に隅部がみつき、墳丘は八角形で五段に築造されたと想定されています(西光編2013)。表面には二上山の凝灰岩が敷かれており、築造当初は白く輝くような威容を誇りました。

3. 持統天皇と讃良

持統天皇と四條畷の関係をみていくうえで、まず考えておきたいのは讃良地域という土地についてです。これまでの発掘調査による成果や文献からみると、讃良地域では飛鳥時代の前の古墳時代に、馬飼いが盛んに行なわれていました。

この馬飼いに従事していた豪族について、『日本書紀』には、天武天皇12（683）年10月5日の条に、「娑羅羅馬飼造・菟野馬飼造に連の姓を賜る」という記述があります。

これらの氏族の出自については、以下の記述があります。

◆『日本書紀』 欽明天皇23（562）年7月1日条

新羅の使者が帰国せず日本に住みつき、河内国更荒郡鷓鴣野邑の新羅人の先祖になった。

◆『新撰姓氏録』 河内国諸蕃の項

佐良々連 出自は百済の国の人、久米都彦から

宇努造 百済の国の人（または百済王の子）、弥那子富意弥の後裔

◆『新撰姓氏録』 河内国未定雑姓の項

宇努連 新羅の王子、金庭興の後裔

このように、娑羅羅（佐良々）氏・菟野（宇努）氏ともに、百済や新羅からの渡来系の氏族であるとの記述があります。このことを裏付けるように、四條畷市域の古墳時代の遺跡からは、朝鮮半島とのかかわりを示す陶質土器や韓式系土器などが多くみつかります。これら渡来系の人びとは、馬飼いの技術をもたらして四條畷付近に住みつき、豪族化したのでしょう。

持統天皇と四條畷の関係を考えるうえで、次に助けになるのはそのお名前です。先に述べた通り、天皇は名を鷓鴣野讃良皇女といます。このうち「讃良」は、四條畷市全域と寝屋川市・大東市の各一部を含む古代「讃良郡」の地名からとられたものです。また、「鷓鴣野」も、先ほど紹介したように『日本書紀』によれば讃良郡の中にある地名として「鷓鴣野邑」が出てきます。この地名の比定地はこれまで不明でした。この地名と同様に「○○のサト」と呼ばれる讃良郡内の地名として、『日本霊異記』中巻には、「河内国更荒郡馬甘里」が出てきます。この「馬甘里」は、讃良郡内で行われた馬匹生産（馬飼い）に関連する名称とみられ、同じく馬匹生産の牧があったことによる郷名とみられる、『倭名類聚抄』高山寺本にある「讃良郡牧岡郷」に比定できると考えます。この牧岡郷は、四條畷市砂・岡山地域に比定できると考えられます。このことから、「鷓鴣野邑」はこれ以外の高宮郷、石井郷、甲可郷、山家郷のいずれかにあった可能性が考えられます。この鷓鴣野（鷓野）の地名は、河内湖が低湿地であった際に水鳥が多く生息していた付近の景観によるものとみられ（瀬川1975）、低湿地であった可能性のある甲可郷、山家郷を候補地として絞ることができます。その中で、甲可郷内にあたる四條畷市内の清滝にあった飛鳥時代後期創建の寺院である正法寺にのちにつけられた山号は「小野山」で、「小野」と「鷓野」は母音の変換で通じることから、同一とみなすことが可能であるといえます（瀬川1975）。これらのことから、「鷓野」はおおよそ現在の四條畷市南野・中野・清滝などの付近を中心とした甲可郷域を指すのではないかと考えられます。

このように地名を皇族の名に使う場合、その地で生まれ育ったか、領地をもっていたか、その地出身の豪族から乳母が出たためその豪族に養育されたといった理由が考えられると言います（直木1960）。先ほど述べたように讃良地域では馬飼いを行なった渡来系の豪族である佐良々氏や宇努氏の存在が記録されています。これらの豪族の名も、持統天皇の名と共通しています。天皇は、これらの豪族に養育された、あるいは乳母がこれらの豪族の出身だったといったような理由で讃良地域にゆかりが深かったため、その地名を名に持ったのかもしれませんが。いずれにしても、持統天皇の名には四條畷市域のこととみられる地名が使われており、四條畷とゆかりの深い天皇だったと言えるでしょう。

『日本書紀』によれば、持統天皇八年（694）6月8日、更荒郡（讃良郡）から白いヤマドリが献上されました。その年の12月6日には藤原京へ遷都されており、このことは遷都に向けた吉兆として捉えられ、郡の官吏及び捕獲者には褒美として位や品物が与えられています。自らにゆかりの深い地からの吉兆に、天皇はおおいによるこんだのかもしれませんが。

4. 讃良と中央の関係

讃良地域と、飛鳥時代当時の都との関係を示す資料は、それほど多く残っているわけではありません。しかし、特異な資料として、小型海獣葡萄鏡の出土があげられます（後川他編2015）。

四條畷市の讃良郡条里遺跡でみつかったこの鏡は、鏡面等が磨かれていない、まつり専用の鏡です。同じような小型海獣葡萄鏡は、これまでに全国で12点みつかっています。そのうち8点は飛鳥・奈良時代当時都があった奈良県で出土し、大阪府下では唯一です。このようにみると、奈良県内、それも飛鳥～奈良時代に都があった藤原京や平城京での出土が多いことが注目されます。この点から、この鏡は都付近で製作されたものとみられます。類例の中には海上交通の要衝での国家的祭祀遺跡から出土しているものもあり、この点も中央からの流通であることを裏付けると言えます。

このように都で行なわれたまつりと同様のものを使ってまつりを行なっている点は、讃良地域が中央と密接な関係を持っていたことを示していると言えるでしょう。

また、厳密には讃良の隣、交野郡域になりますが、寝屋川市石宝殿古墳の存在も考えておく必要があります。飛鳥時代は、まだ古墳がつくられていた時代で、天武・持統天皇をはじめ当時の天皇が葬られた墓も墳丘を持つ古墳でした。石宝殿古墳は7世紀中頃の築造とみられ、主体部は巨石を用いた横口式石槨で、古墳の背後には3個の巨石が一行に並んでいます。昭和63（1988）年の調査で、列石の西側に続く石がみつかりました（濱田編1990）。その設置角が135度だったことから、古墳の平面形が八角形だった可能性が指摘されています。また列石の内側には石が敷き詰められていたことがわかりました。副葬品は不明ですが、江戸時代に古墳の側から金銅製の蔵骨器が掘り出された記録があり、関連性が指摘されています。八角形の墳形は、天武・持統天皇陵のように皇族の墓に多く採用されるため、この古墳の被葬者は天皇家にかなり近い関係があったのかもしれない。

5. おわりに

ここまで、持統天皇と讃良地域の関係を中心にみてきました。持統天皇のお名前である、「鷓野讃良皇女」は、現在の四條畷市域を中心とした讃良地域にその名の由来があり、この地にいた渡来系馬飼い豪族の佐良々氏や宇努氏とのかかわりが考えられることを述べました。讃良地域では中央におけるまつり（祭祀）で用いられた器物（小型海獣葡萄鏡）がみつかり、中央との密接な関係がうかがえること、交野郡域の讃良郡隣接地区に、天皇家とのかかわりの深い八角形の墳形を採用する古墳（石宝殿古墳）があることも、この地域と中央との関係を想起させます。このように、持統天皇とこの地域の関係について考えることができました。

文献の存在する時代になると、文献と考古学的な調査成果の内容との関係をどう考えるかも重要です。今後も、持統天皇と四條畷との関係を裏付ける資料の探求を続けていきたいと思えます。

（實盛）

主要参考文献

- 後川恵太郎・實盛良彦・井上智博編2015『讃良郡条里遺跡』四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
- 宇治谷孟1988『日本書紀 全現代語訳』下、講談社。
- 宇治谷孟1992『統日本紀 全現代語訳』上、講談社。
- 大西貴夫2004『天武・持統朝 その時代と人々』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
- 西光慎治編2013『牽牛子塚古墳発掘調査報告書』明日香村教育委員会。
- 四條畷市教育委員会編2006『こども歴史 わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
- 四條畷市教育委員会編2010『歴史とみどりのまち ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
- 四條畷市史編さん委員会編2016『四條畷市史』第5巻考古編、四條畷市。
- 杉山 洋2003『唐式鏡の研究』鶴山堂出版部。
- 瀬川芳則1975『清瀧の古寺正法寺と氏寺の造営』四條畷市文化財シリーズ3、四條畷市教育委員会。
- 千田稔・関根俊一2015『古代を創った人びと 天武天皇・持統天皇』奈良県。
- 瀧音能之監修2016『古代史再検証 持統天皇とは何か』別冊宝島2490号、宝島社。
- 遠山美都男2010『天智と持統』講談社。
- 直木孝次郎1960『持統天皇』吉川弘文館。
- 塙保己一編1894『新撰姓氏録』『群書類聚』第17輯、経済雑誌社。
- 濱田幸司編1990『石宝殿古墳』寝屋川市教育委員会。
- 平尾兵吾1931『北河内史蹟史話』（1973年増補再刊）。
- 松井一晃編2017a『大海人皇子 天皇への道』平成29年度春季特別展、歴史に憩う橿原市博物館。
- 松井一晃編2017b『天武天皇 覇者の世界』平成29年度夏期特別展、橿原市教育委員会。

写真図版 1



1. NN2013-1 第1遺構面1区遺構完掘全景（東から）



2. NN2013-1 第1遺構面4-3区遺構完掘全景（西から）

写真図版 2



1. NN2013-1 第3遺構面3-1・3-2区遺構完掘全景（東から）



2. NN2013-1 第3遺構面3-3・4-1・4-2区遺構完掘全景（西から）

写真図版 3



1. NN2013-1 第3遺構面3-3区溝15遺物出土状況（北東から）



2. NN2013-1 第3遺構面3-3区井戸16井戸枠検出状況（南から）

写真図版 4



1. NN2013-1 第3遺構面4-2・4-3区遺構完掘全景(東から)



2. NN2013-1 第3遺構面4-2区土坑28・溝30遺物出土状況(南から)

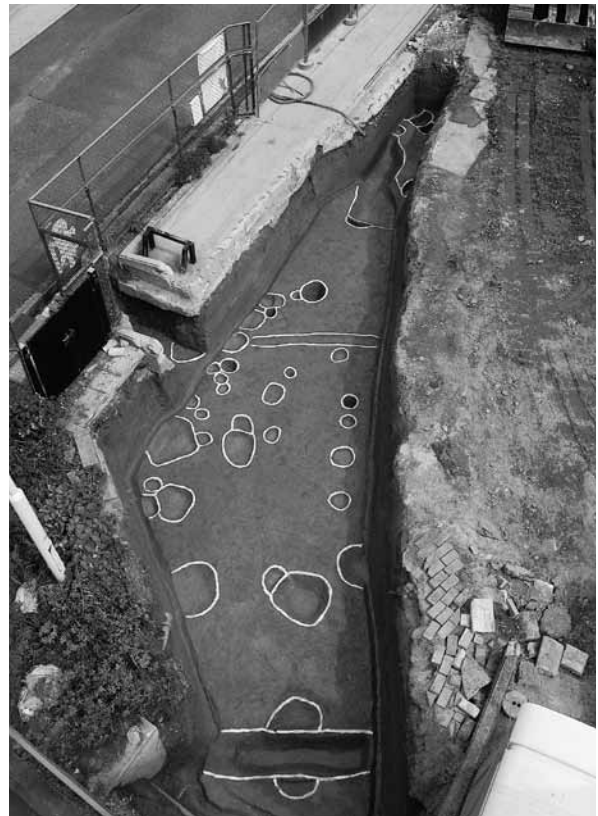
写真図版 5



1. NN2012-1 遺構検出全景（北西から）



2. NN2012-1 遺構完掘全景（北から）

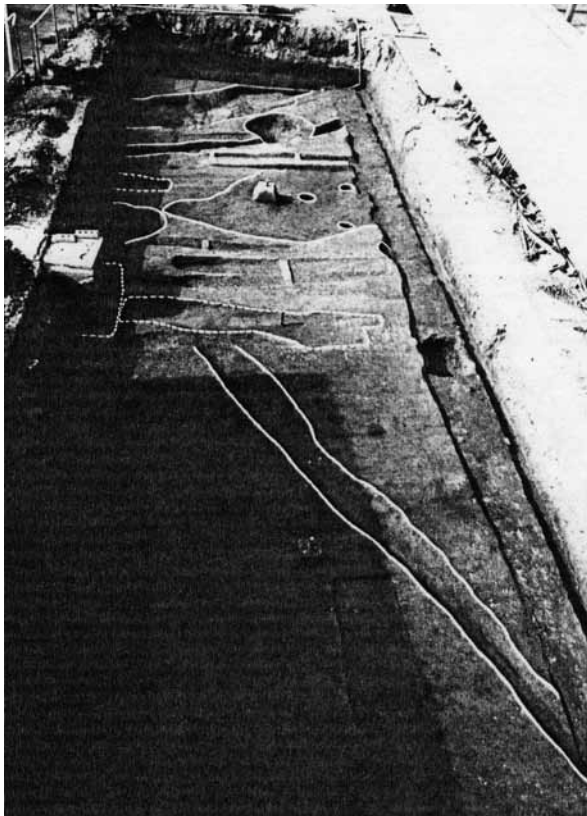


3. NN2012-1 遺構完掘全景（南から）

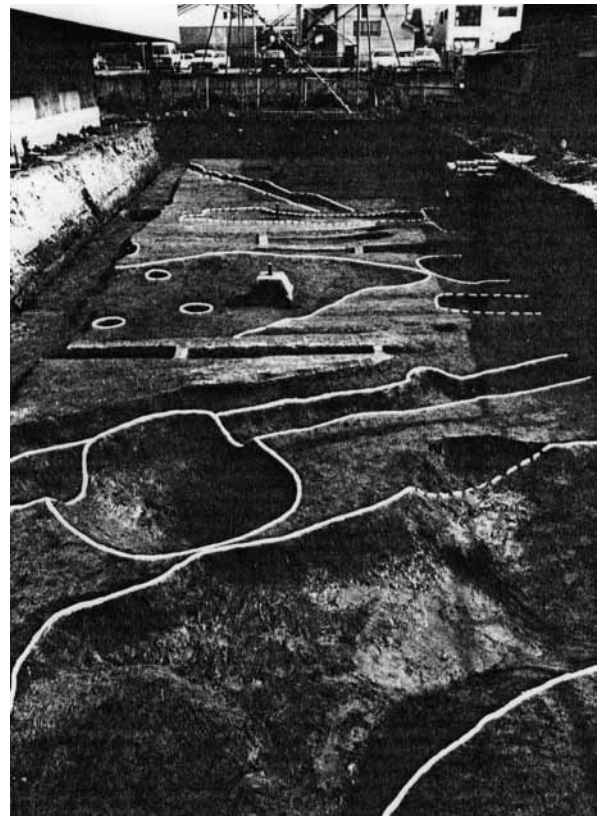
写真図版 6



1. NN2012-1 遺構完掘近景・東壁断面 (南西から)

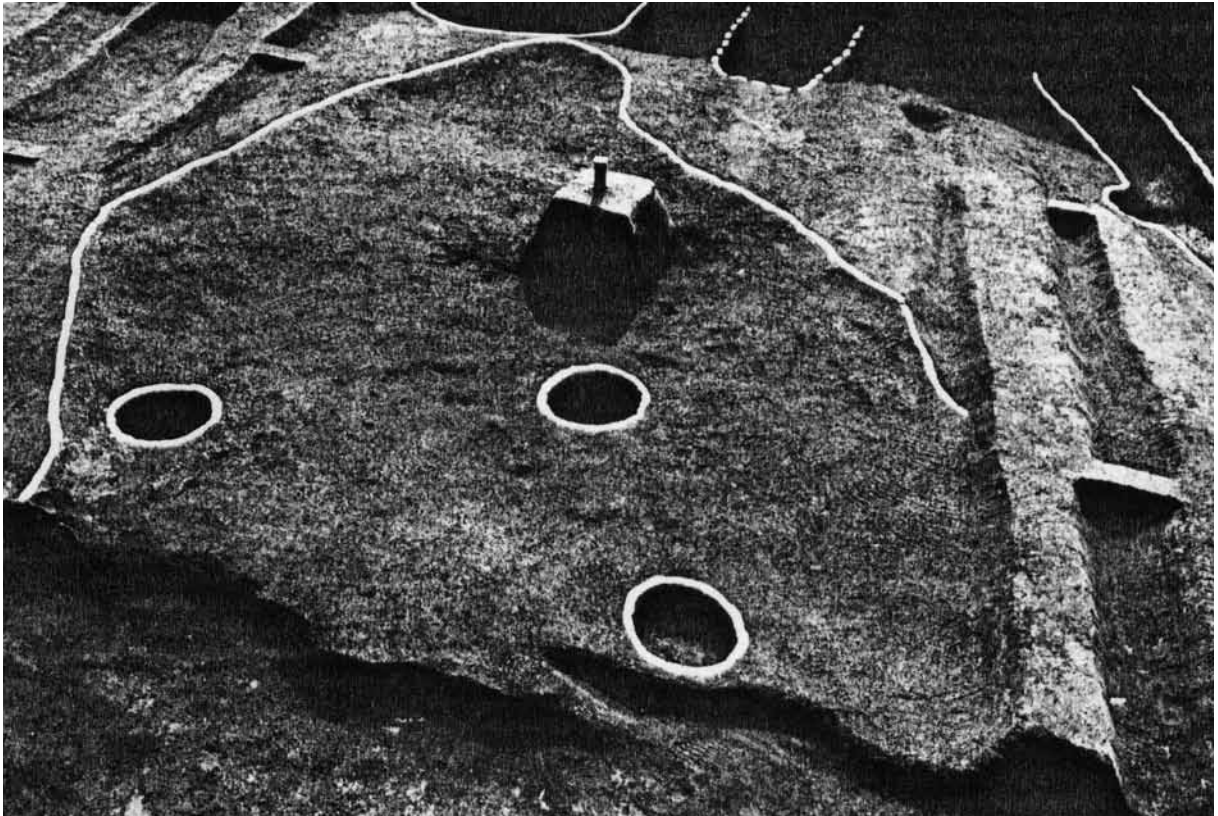


2. NN1990-1 遺構全景 (東から)

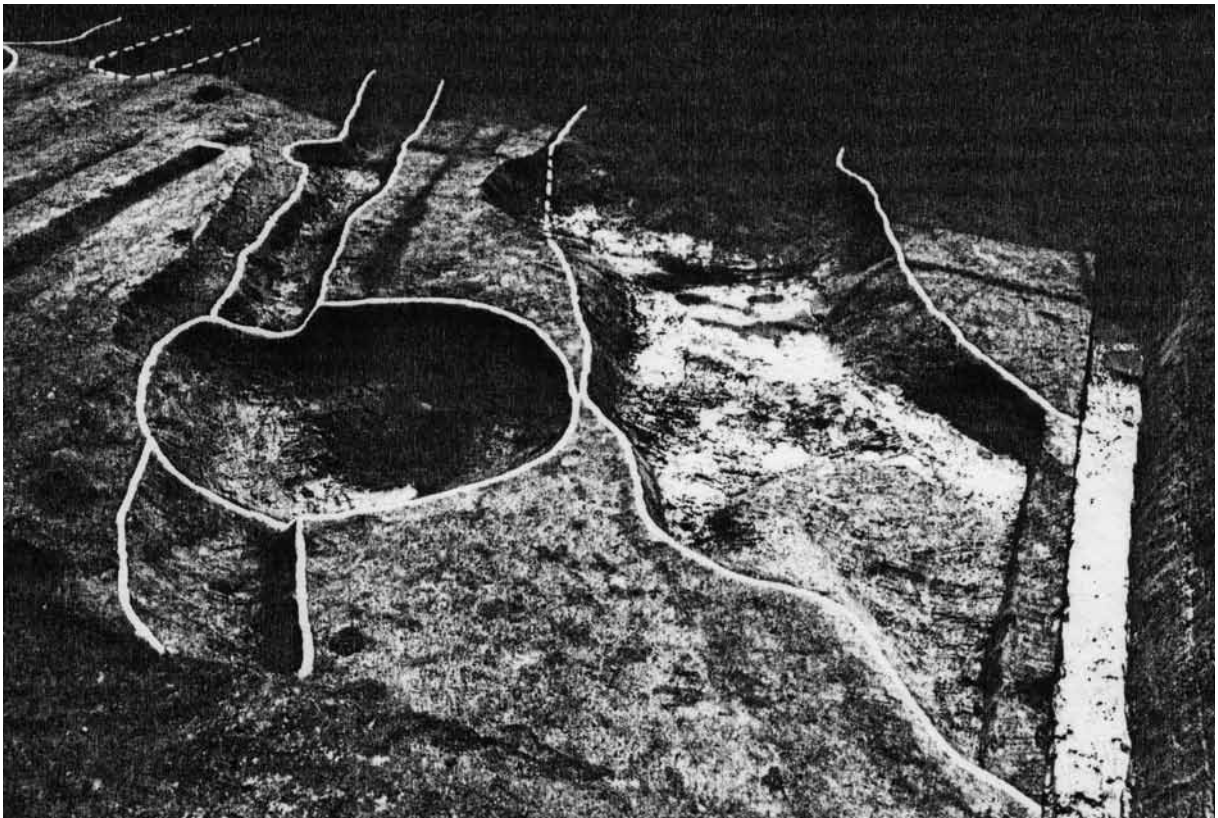


3. NN1990-1 遺構全景 (西から)

写真図版 7

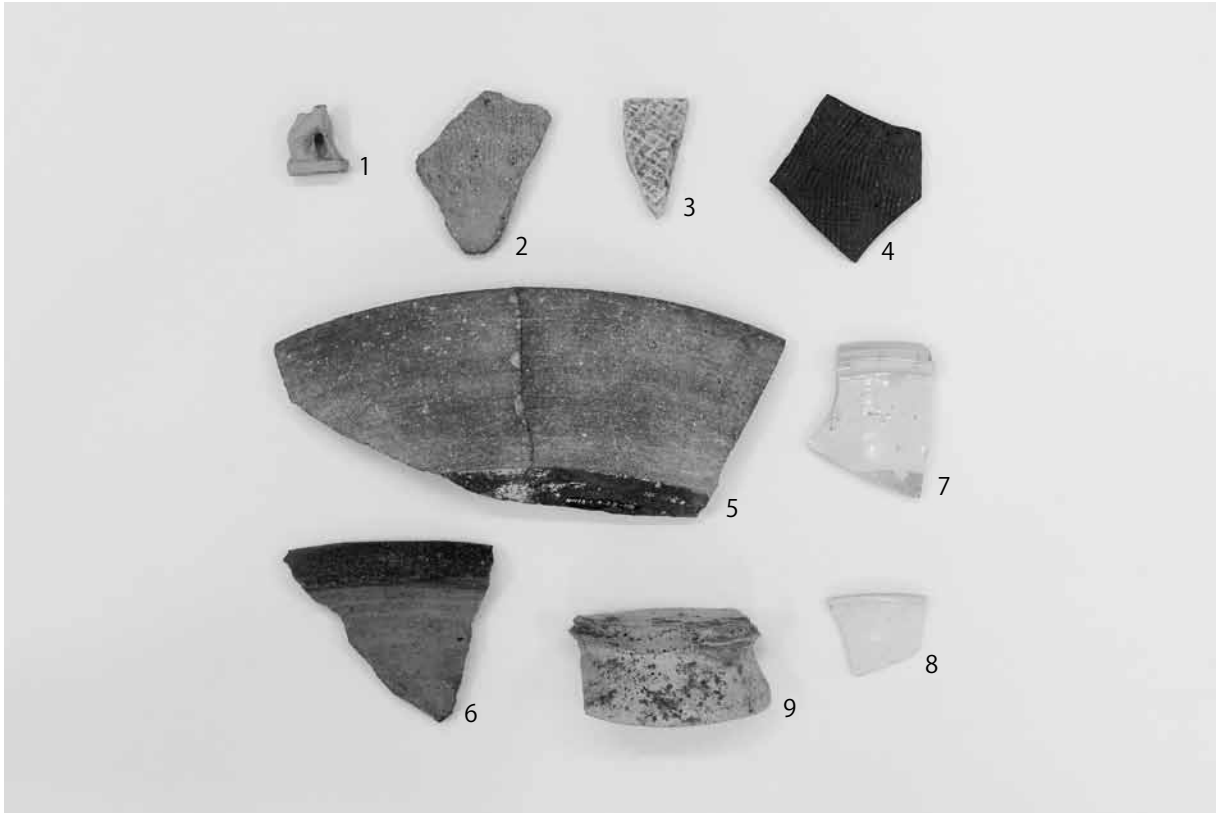


1. NN1990-1 堀立柱建物1近景（北から）

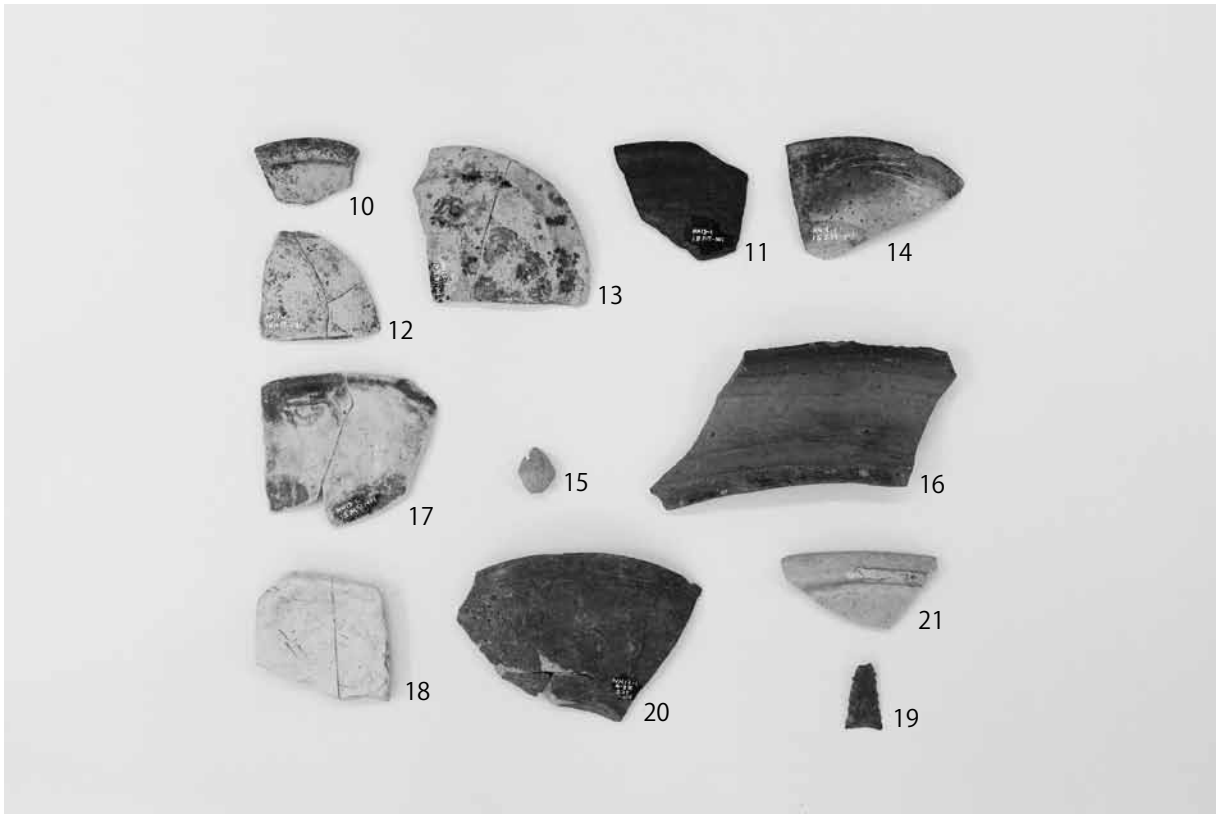


2. NN1990-1 井戸1・溝1近景（北から）

写真図版 8

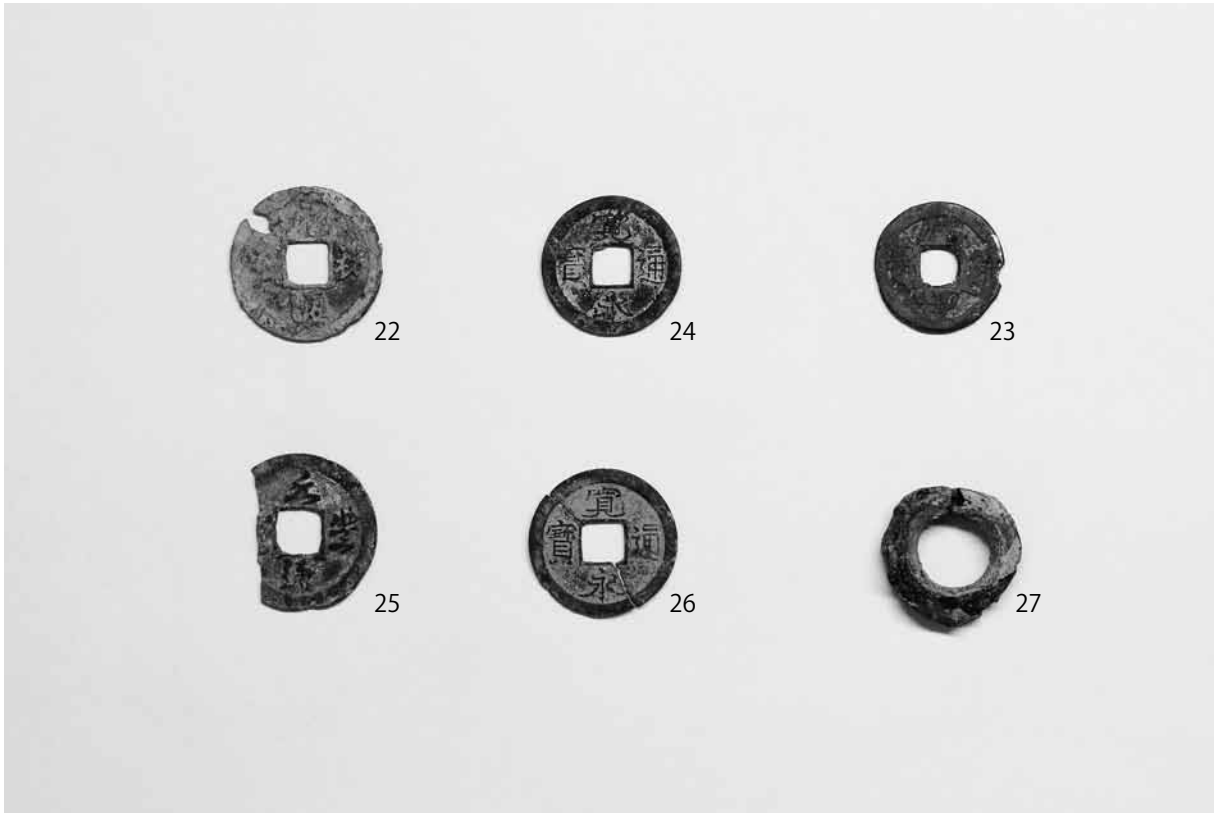


1. NN2013-1 出土遺物 (包含層)

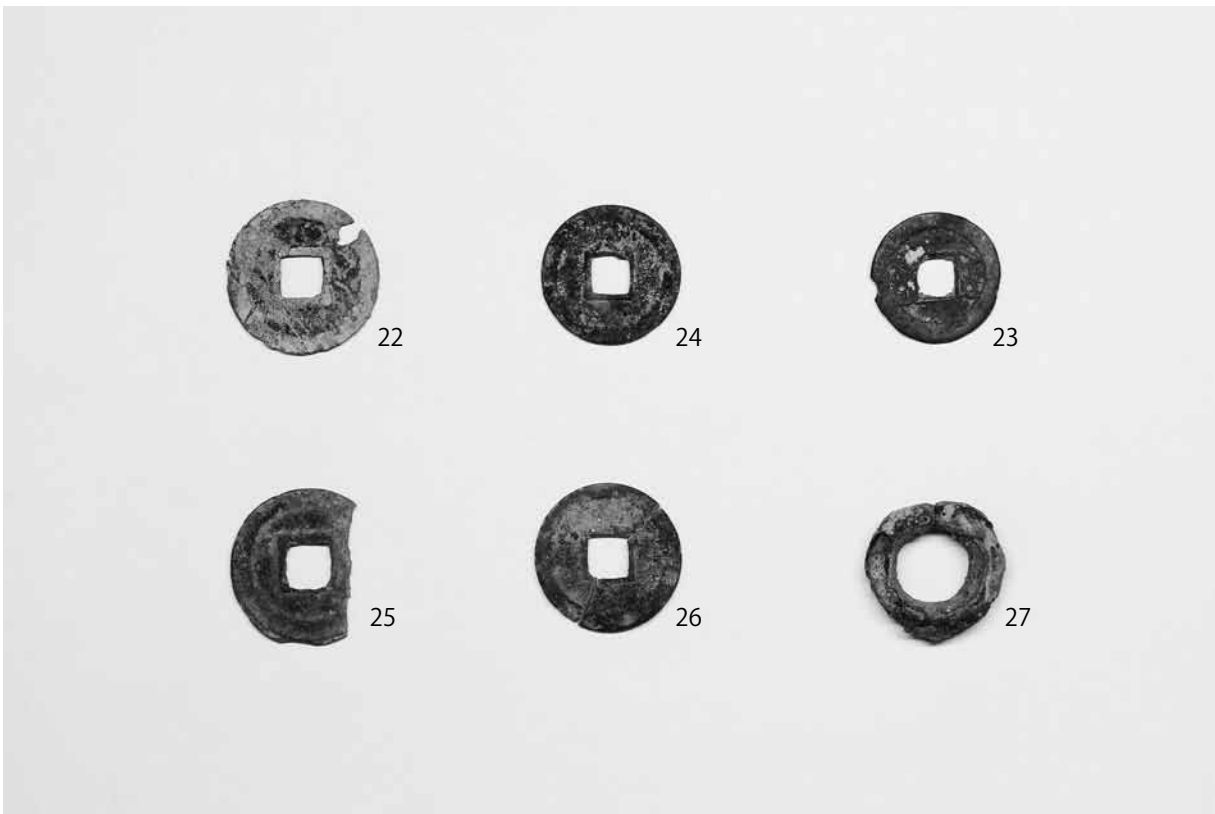


2. NN2013-1 出土遺物 (第1遺構面)

写真図版 9

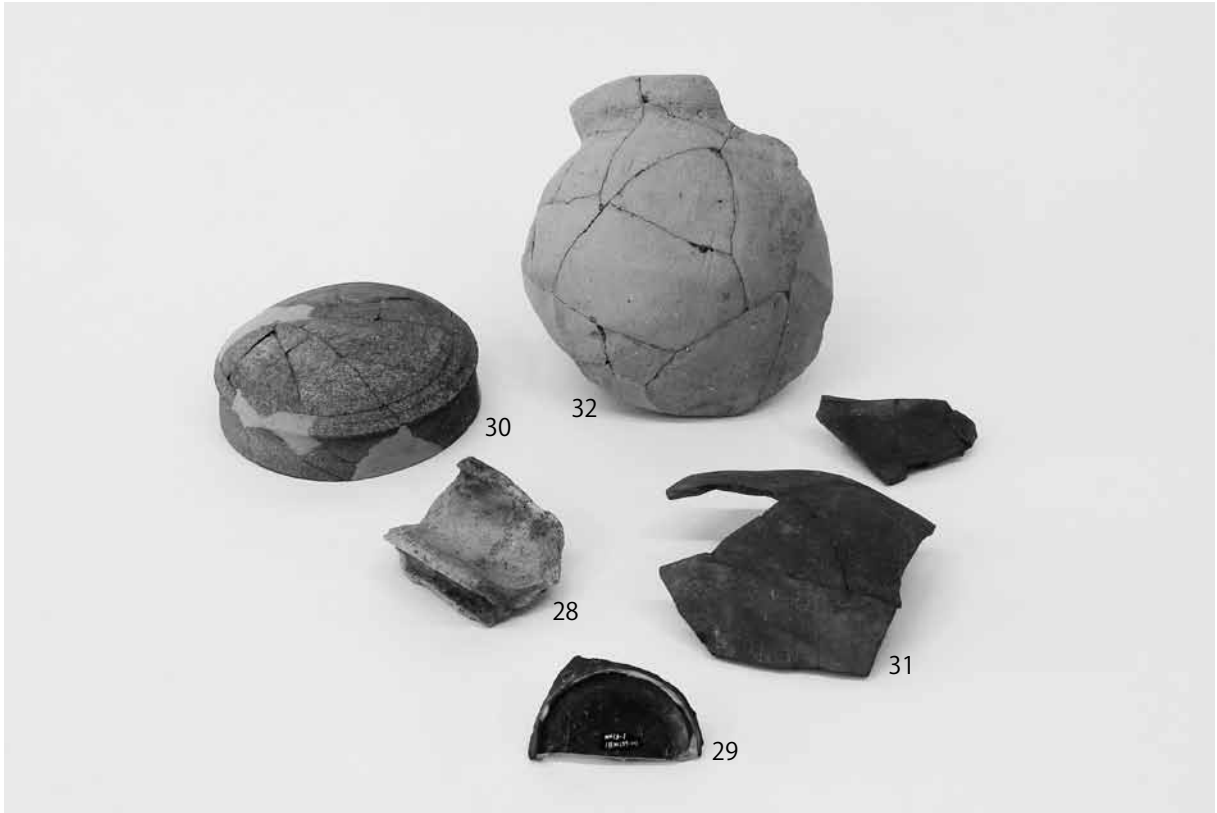


1. NN2013-1 出土遺物 (金属製品・表)



2. NN2013-1 出土遺物 (金属製品・裏)

写真図版 10



1. NN2013-1 出土遺物 (第3遺構面1区・3-2区)



2. NN2013-1 出土遺物 (第3遺構面3-3区溝15・21)

写真図版 11

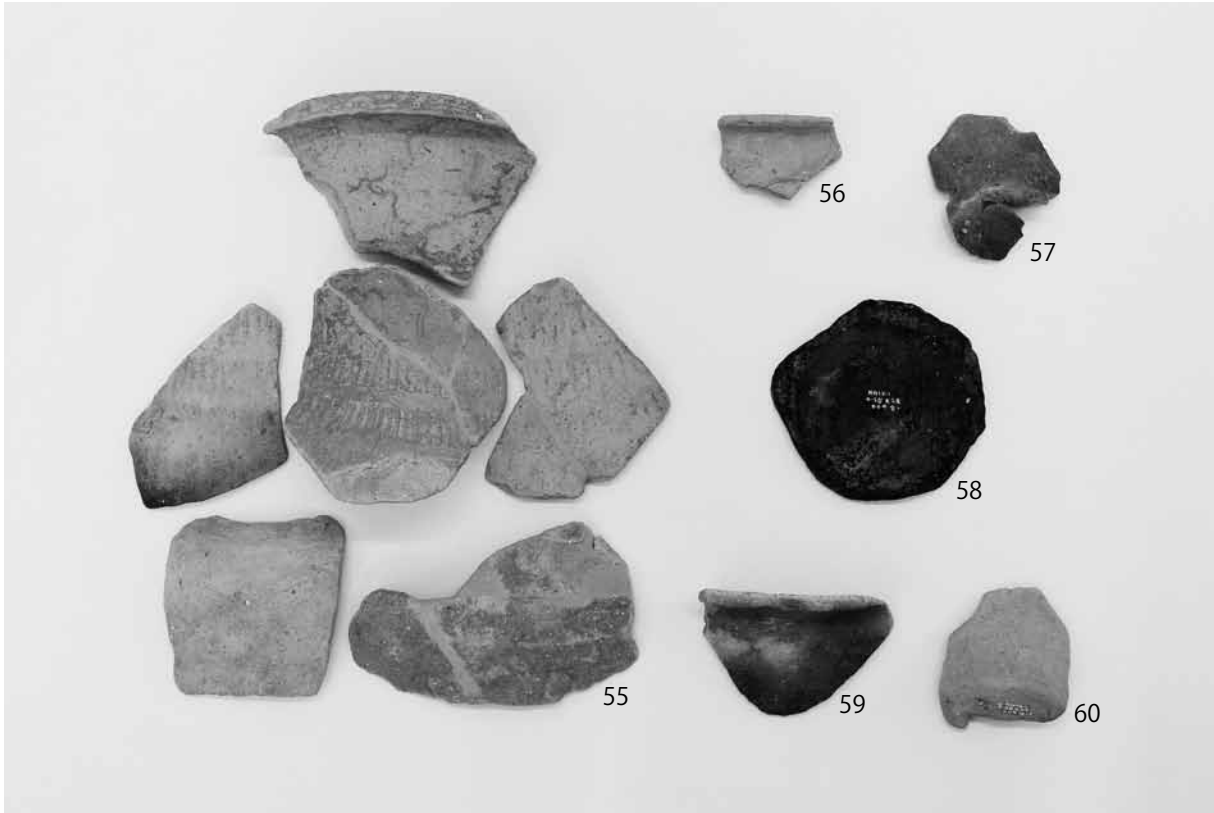


1. NN2013-1 出土遺物 (第3遺構面3-3区井戸16・土坑19・24)

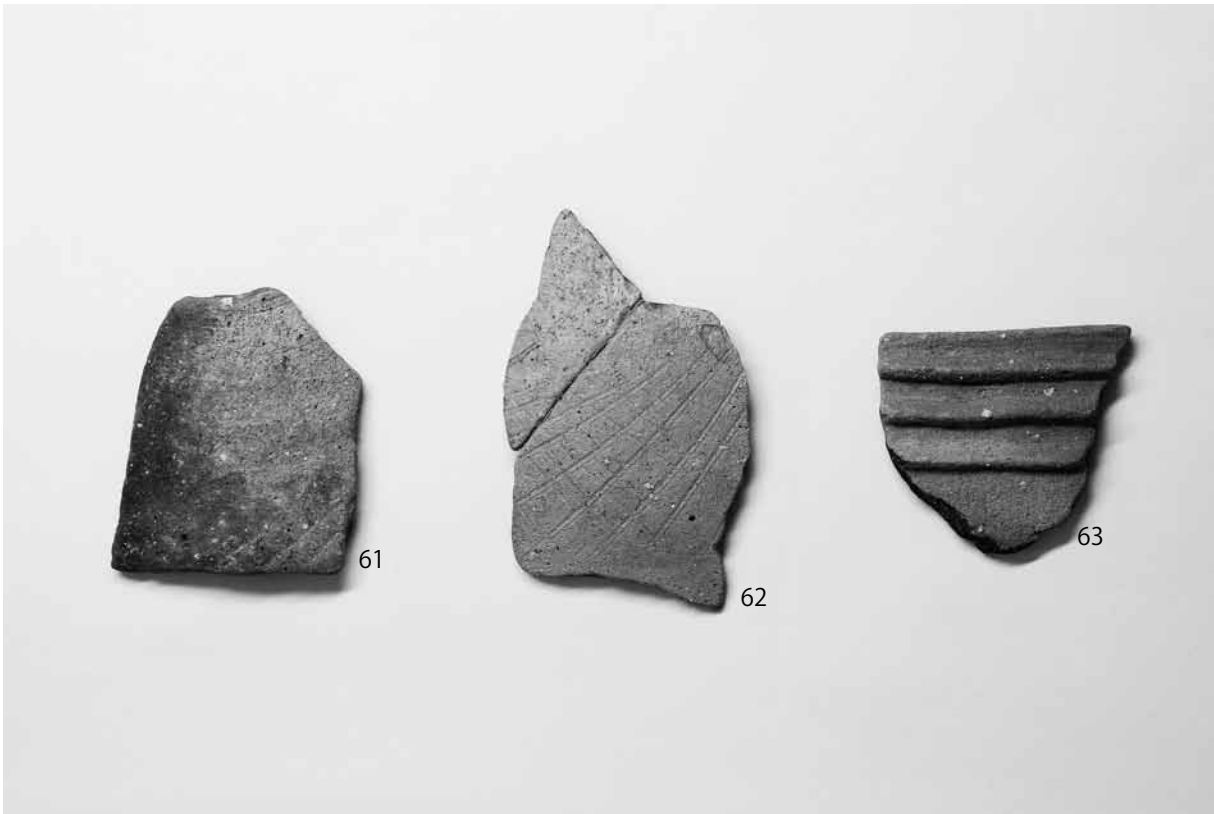


2. NN2013-1 出土遺物 (第3遺構面4-1区・4-2区溝75)

写真図版 12



1. NN2013-1 出土遺物 (第3遺構面4-2区土坑28)



2. NN2013-1 出土遺物 (第3遺構面4-2区溝17)

写真図版 13

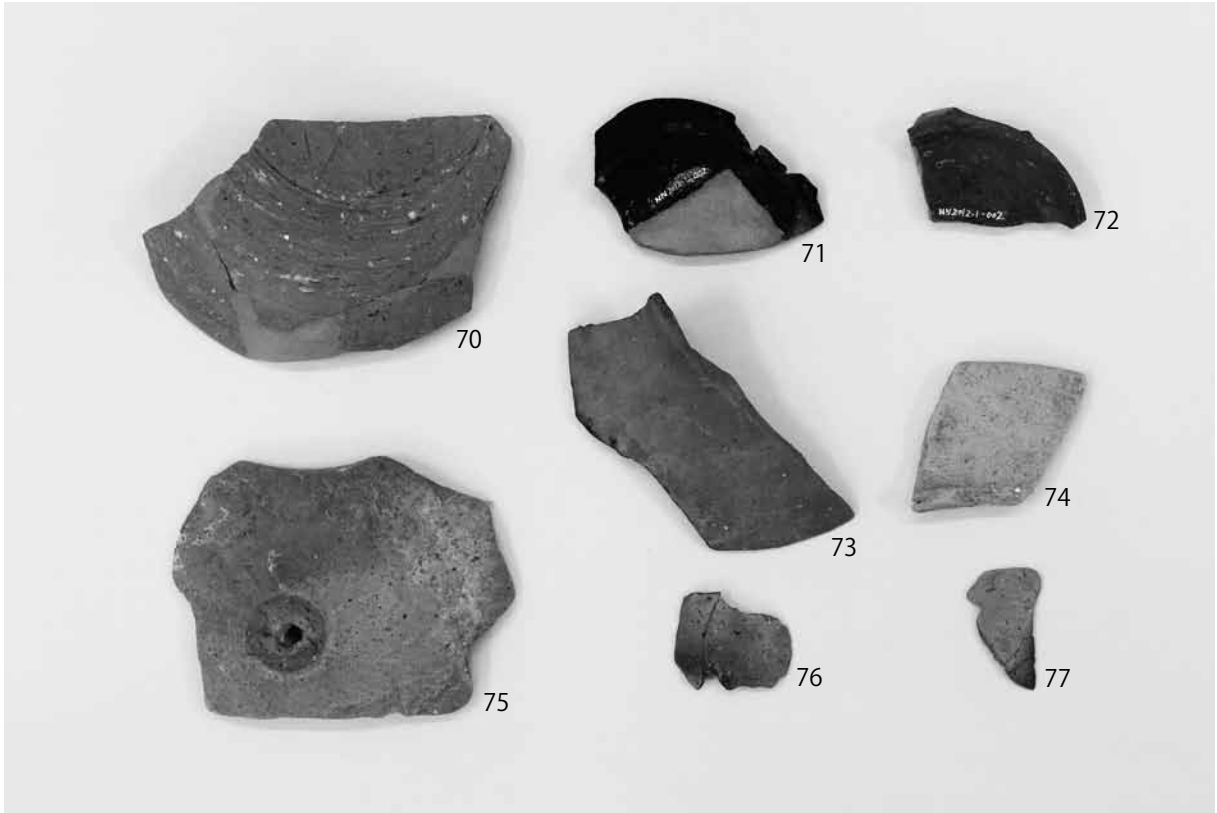


1. NN2013-1 出土遺物 (第3遺構面4-2区溝30・落込107)



2. NN2013-1 出土遺物 (馬歯・種子)

写真図版 14



1. NN2012-1 出土遺物



2. NN1990-1 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しじょうなわてしぶんかざいちょうさねんぼう
書名	四條畷市文化財調査年報
巻次	第5号
副書名	中野遺跡
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第55集
編著者名	村上 始・實盛良彦
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号
発行日	2018(平成30)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかのいせき 中野遺跡 (NN2013-1)	しじょうなわてし なかのしんまち 四條畷市 中野新町	272299	34° 44' 22"	135° 38' 19"	平成25年6 月3日～平 成25年9月 12日	2188㎡	宅地造成
なかのいせき 中野遺跡 (NN2012-1)	しじょうなわてし なかのしんまち 四條畷市 中野新町	272299	34° 44' 20"	135° 38' 23"	平成24年6 月11日～平 成24年6月 26日	58㎡	道路拡幅
なかのいせき 中野遺跡 (NN1990-1)	しじょうなわてし なかのしんまち 四條畷市 中野新町	272299	34° 44' 20"	135° 38' 24"	平成2年10 月25日～平 成2年11月 16日	233㎡	法務局増築

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野遺跡 (NN2013-1)	集落跡	弥生、古 墳、平安、 中世	井戸、溝、 土坑、Pit	弥生土器、土師器、 須恵器、黒色土器、 瓦器、土製品、金属 製品、石製品	弥生時代中期の方形周溝 墓の可能性のある溝を検 出
中野遺跡 (NN2012-1)	集落跡	古墳	溝、土坑、 Pit	土師器、須恵器、黒 色土器、製塩土器	
中野遺跡 (NN1990-1)	集落跡	古墳	井戸、掘立 柱建物、溝、 土坑	土師器、須恵器	古墳時代中期のまとまっ た集落

四條畷市文化財調査報告 第55集

四條畷市文化財調査年報

第5号

中野遺跡

平成30(2018)年3月31日発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
大阪府四條畷市中野本町1番1号

印刷 株式会社 近畿印刷センター